再版

明治二十六年一月十七日

印刷ノ都合ニヨリ附錄「國民便覽」ヲ廢セリ

THE HOME JOURNAL

家庭雑誌

定價金五錢

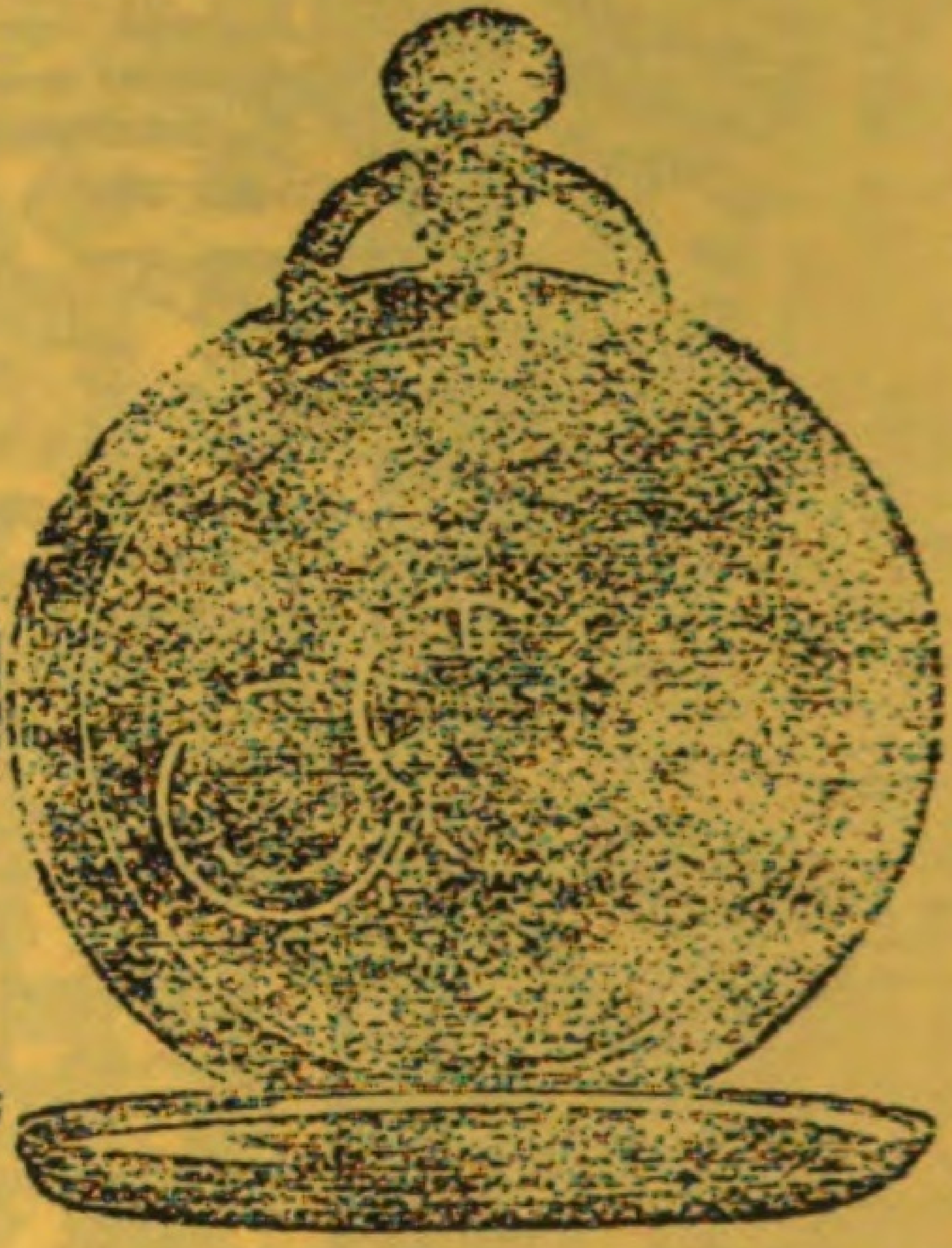
東京家庭雑誌社發兌

毎月一回



第五號

瑞西國製



米國製



瑞西國製

十八金側無雙蓋三枚蓋二十一形龍頭卷時計甲價百三十五圓●乙價百廿圓●丙價百五圓●丁價九十八圓●戊價八十五圓●仝中硝子甲價八十五圓●乙價七十五圓●丙價六十五圓●仝片硝子甲價七十五圓●乙價六十圓●丙價五十圓●丁價四十圓●仝十四金側無雙甲價七十五圓●乙價六十五圓●丙價五十五圓●丁價五十圓●仝片硝子甲價六十圓●乙價五十五圓●丙價四十五圓●丁價三十七圓●仝十八金側無雙蓋三枚蓋七曜及月指シ月ノ滿決十二ケ月付價百四十五圓●仝價二百三十五圓●仝コロノカラフ引打チ付價二百七十五圓●仝價三百五十圓●銀側無雙蓋三枚廿一形龍頭卷甲價四十五圓●乙價三十七圓●丙價三十圓●丁價廿五圓●仝中硝子甲價三十五圓●乙價廿七圓●丙價廿圓●丁價十五圓●仝片硝子裏三枚蓋甲價三十七圓●乙價三十三圓●丙價二十九圓●丁價二十五圓●仝中硝子甲價二十五圓●乙價二十一圓●丙價十六圓五十錢●丁價十一圓五十錢●戊價九圓五十錢●巳價八圓●仝鏈卷甲價十八圓●乙價十五圓●丙價十一圓●丁價九圓五十錢●戊價八圓●巳價七圓

米國製

十八金側無雙中蓋付二十一形龍頭卷甲價百十五圓●乙價百五圓●丙價九十五圓●仝十四金側價七十五圓●仝價六十五圓●仝金卷側甲價三十五圓●乙價廿九圓●丙價二十五圓●丁價十八圓●銀側無雙甲價二十九圓●乙價二十五圓●丙價二十一圓●丁價十六圓五十錢●仝片硝子價十五圓●仝價十三圓五十錢

金着側

無雙側廿一形龍頭卷甲價四十五圓●乙價三十五圓●丙價廿八圓●丁價廿五圓●戊價廿一圓●巳價十八圓五十錢

金製鎖

廿二金三十匁附價百十九圓三十五錢〇廿五匁百圓十二錢五厘〇廿匁八十圓九十錢〇十五匁六十一圓六十七錢五厘〇十匁四十二圓四十五錢◎廿金三十匁附百九圓八十四錢〇廿五匁九十二圓二十錢〇廿匁七十四圓五十六錢〇十五匁五十六圓九十二錢〇十匁三十九圓廿八錢◎十八金三十匁附百圓四十二錢〇廿五匁八十四圓三十五錢〇廿匁六十八圓廿八錢〇十五匁五十二圓廿一錢〇十匁三十六圓十四錢◎十六金三十匁附九十圓八十五錢〇廿五匁七十六圓三十七錢五厘〇廿匁六十一圓九十錢〇十五匁四十七圓四十二錢五厘〇十匁三十二圓九十五錢◎十四金三十匁附八十一圓四十六錢〇廿五匁六十八圓五十五錢〇廿匁五十五圓六十四錢〇十五匁四十二圓七十三錢〇十匁廿九圓八十二錢◎十二金三十匁附七十二圓四錢〇廿五匁六十圓七十錢〇廿匁四十九圓三十六錢〇十五匁三十八圓二錢〇十匁廿六圓六十八錢

市外遞送費金廿錢

(二十五年十一月十五日調)

右の外白金側(プラチナ)又は七寶象嵌彫刻等の裝飾を施したる品數百種あり現品御一覽の上御購求あるべし遠隔の地より御注文は代金御送附次第直に其品を精撰して差送り決して御信用に背くこと無し。且弊堂販賣の時計貴意に適はざる時は御購求後三十日(他品は一周間)以內(往復日數を除き)原價返戻も他品交換も御望に任すべし。其時計には十ヶ年より三十ヶ年迄の保存受合證を附し其請合期限中は無料にて修繕すべし。機械に損所を生し使用に堪へざる時は交換又は返戻を受くべし。其他鎖類までも其金性を保證すべし。右等の手續は詳細に諸新聞紙に屢々廣告したる弊堂店則にて御諒知を冀ふなり

東京市京橋區尾張町二丁目
十八番地電話三百三十三號

天賞堂

漢文大講義錄

初號より近刊迄取揃有り缺本無し

第一號(八版)
第二號(八版)
第三號(六版)
第四號(六版)
第五號(五版)
第六號(四版)
第七號(三版)
第八號(三版)
第九號(再版)
第十號(三版)
第十一號(再版)
第十二號(再版)
第十三號(再版)
第十四號(再版)
第十五號(再版)
第十六號
第十三號 本日發兌

科目及講師

大學(完結)	三島中洲
孫子(完結)	内藤耻叟
詩話(完結)	石橋雲來
文話(完結)	岡三慶
論語	萩原西疇
中庸	三島中洲
左傳	近藤南州
詩經	宮内鹿川
莊子	大野雲潭
史記列傳	石川鴻齋
政記論文	生駒膽山
外史論文	池田蘆洲
十八史略	山田濟齋
文章軌範	土屋鳳洲
唐宋八家文	平川訒堂
三體詩	山田新川

漢文學の自宅獨習に適當なる講義錄は獨り本誌あるのみ類似の諸雜誌はすべて亡滅せり本社は基本金を東京第百十九國立銀行に預けあれば決て途中廢刊の要なし

何號よりにても亦何册宛にても御注文に應ず

略則 毎月三回發兌●一部金八錢○十部前金七十錢○廿部前金一圓三十錢○卅部前金一圓九十錢●郵送料一部五厘宛●郵券代用一割增●爲替は神田一ッ橋通爲替取扱所宛●見本は郵券八錢にて呈

諸子大意

本書ハ老儒萩原西疇先生ノ數十年ニ亘リ上ハ管晏老莊荀楊墨列韓等諸子ヨリ淮南子劉子文中子等ニ至ル迄ノ諸學派ヲ細分解析シ精緻簡明ニ斷案ヲ下シ一致ノ下ニ東洋哲理ノ大旨ヲ喩ラシムルヲ本旨トセリ四方ノ有志諸彦請フ一本ヲ購求セヨ

西疇萩原裕先生講述

全部四卷 第壹卷既刊 毎月一卷發●定價一卷八錢全部四卷前金三十錢●郵稅一卷一錢

發行所 東京麴町區富士見町一丁目 益友社

四書讀本

全四卷合本一冊◎定價金拾五錢◎郵稅四錢

四書ノ少年諸君ノ課讀本ニ適當スルコハ遍ク世人ノ識破スル所ナレバ茲ニ喋々セズ但從來ノ刻本ハ卷冊ノ繁多ナルト字尾「ステ」假名ノ或ハ篆ニ失シ或ハ簡ニ失スルトニ依リ往々讀者ノ不滿ヲ抱カシムル者アリ今本社ハ四書廿六卷ヲ集メテ一冊トナシ四號活字ヲ以テ鮮明ニ印刷シ校字附點ハ一ニ之ヲ本社講師本城鷹峯先生ニ囑托シタレバ課讀本ニ供スルニ於テハ完全無缺ナリ且著述家文章家ハ之レヲ架上ニ挿ミ考證索引ニ供スルニ於テモ卷帙ヲ紛亂スルノ憂ヒナク實ニ至好至便ノ書トス

正文章軌範讀本

全七卷合本一冊◎定價金拾五錢◎郵稅四錢

漢文學ノ必要ハ普ク世人ノ認識スル所トナレリ而ルニ之ニ要スル書籍ハ價格甚ダ廉ナラズ供給太ダ多カラズ是故ニ僻遠ノ地方ニテハ容易ニ購求シ得ザル者ハ今日ノ情勢ナリ豈盛世ノ一大缺事ナラズヤ今本社ハ先ヅ斯學ノ教科書トシテ最モ需用多キ正文章軌範ヲ取リ蘆洲濟齋ノ兩君ニ請ヒ謝疊山ノ原本ニ據リ和漢諸家ノ批評註釋ヲ取捨シ嚴ニ校訂ヲ施シ紕繆ヲ正シ且序說ノ一欄ヲ設ケ良齋、山陽、瀛村、朗盧等諸先輩ノ此書ニ關スル說話ヲ錄シ此書ヲ讀ム者ニ方針ヲ示シタレバ坊間俗書ノ比ニ非ラス

鼇註 十八史略讀本

全七卷合本一冊◎定價金三拾貳錢◎郵稅六錢

十八史略讀本成レリ顧ルニ陳殷ノ舊註久ク行ハルレ𪜈繁冗要ヲ失シ誤謬少ラズ且字音ト地理ヲ以テ其大半ヲ埋タリ其他新註少カラザレ𪜈或ハ史文ヲ抄節シ或ハ史論ヲ附載シ無用ノ處ニ多ヲ誇リシニ過ズ本書ハ簡明痛快ニ新註ヲ加ヘ要ヲ擧ゲ粹ヲ摘シ讀者ノ一讀能ク從來ノ疑團ヲ氷解スルヲ旨トセリ且七卷ヲ纏メテ一本トナシタレバ支那史繙閲上非常ノ便利ヲ有セルノミナラズ序說ヲ讀メバ以テ舊來學者ノ知ラザル十八史略ノ源由來歷ヲ知ルヲ得ン

注意◎爲替ハ神田一ツ橋通爲替取扱所宛◎郵劵代用ハ一割增ノコ

發行所 東京麴町區富士見町一丁目 益友社

家庭雜誌定價表

	前金	地方郵稅共
一冊	五錢	五錢五厘
六冊	三拾錢	三拾二錢
十二冊	五拾錢	五拾六錢

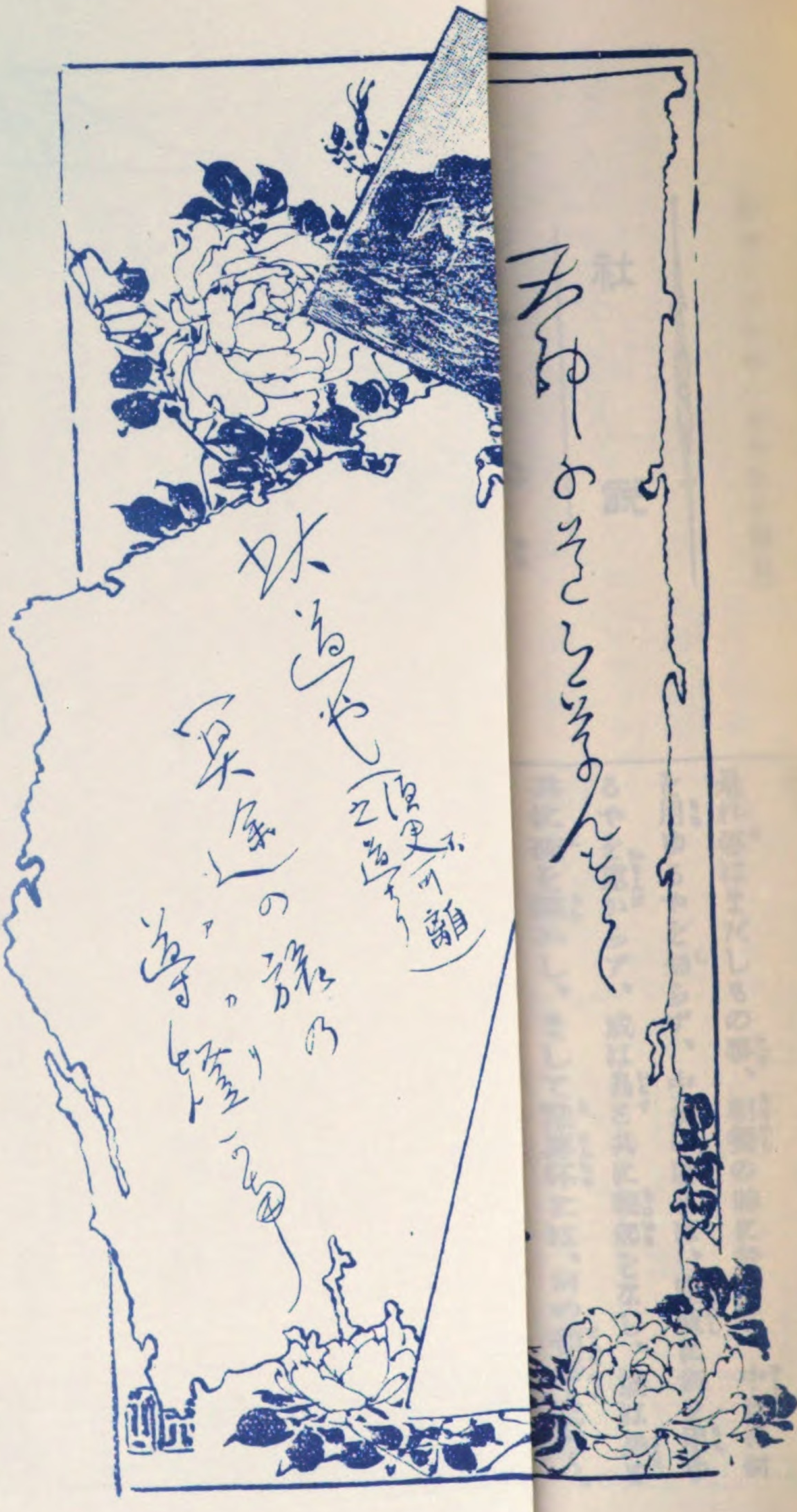
廣告料　二拾四字行數回數に付割引無　八錢　本社は前金にあらざれば發送せず爲替は芝口支局宛郵券代用は爲替の無き地に限り一割增しの事

發行所
發行兼印刷人　垣田純朗
編輯人　塚越芳太郎
東京市京橋區日吉町四番地　家庭雜誌社

明治二十六年一月十五日發兌

家庭雜誌第五號

目録



家庭雜誌第五號

（明治二十六年一月十五日發兌）

社説

一家の秩序

世の中の事は、規則縛りにて行はるゝものにあらず、さりとて一切無規則なれば、尙ほ更ら行はるゝものにあらず。規則の中に自由あり、自由の中に秩序あり、斯くありてこそ、家も修るなれ、國も治まるなれ。秩序なき家を見よ、如何に見苦しきや、玄關には塵あり、坐敷には取り散したる道具あり、臺所の口抔は、一種の芥溜の如し。イザ食事と云へは、何所に箸はありや、茶碗はありや、イザ客來と云へは、何所に敷物はありや、火桶はありやと立ち騒く。如何にも淺間敷次第にて、家人のハシたなき心の底現はれて氣の毒なり。

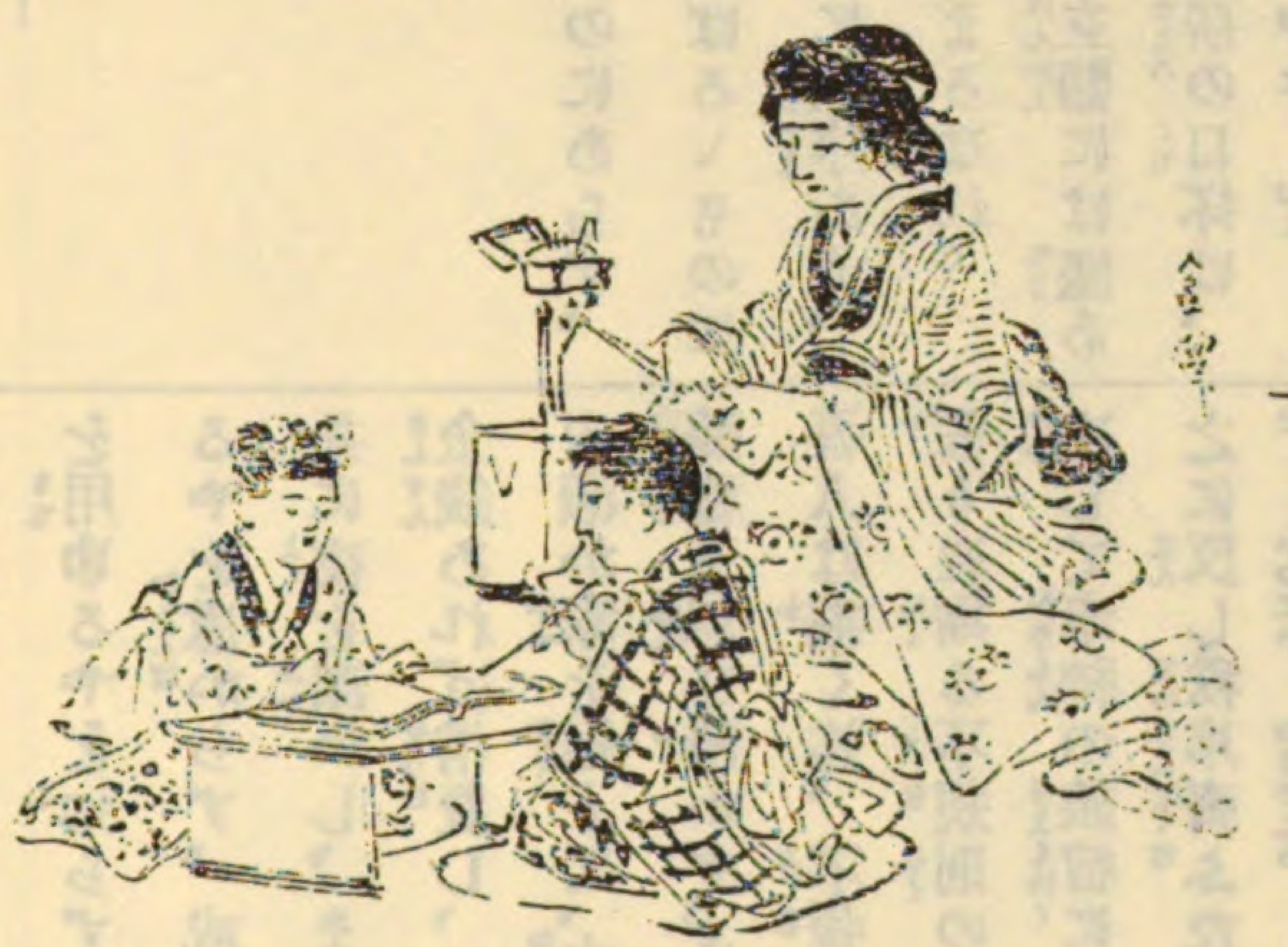
是れ等はまだしもの事、朝餐の時には、中食に何を用ゆるやを知らず、中食の時には、晩飯に何を用ゆるやを慮からず、或は烏と共に朝起をなし、或は梟と共に夜を深かし、まして豫算抔には、何の頓着もなく、金錢あれば消費し、好物眼に附けば購求す。而して年の瀬か家を送りて、大晦日に迫りたる時の苦しさには、夢程も思ひ附かず。さても情けなき次第ならずや。吾人は斯く迄、不規則の家庭ある可しと思はず、但た假りに斯る不規則の家庭ありもすれば、その一家は、決して幸神の旅宿にあらざるを明言し置くのみ。

之に反し秩序齊ふたる一家は、如何程幸福なる！　家具に一定の置所あれば、事に臨んで騷ぐにも及ぶまじ。食時には食用の器具、來客には客用の器用、その他機に應じ、變に臨み、立ろに辨ず可し、勞は半ばにして

功は倍す。

且つ一家の會計も、出入を計りて、豫算を立て置けば、別段年末になりて、狼狽するの醜躰もなかる可く、一家悠々然として、無事安穩に暮すを得可し。固より人事には意外の變あれども、大概の出來事迄は、豫じめ備へ置くを得可し。例せば一家收入の幾分丈を豫備金として、別途に備へ置くの類也。

食事の献立なり、就眠出眠時間なり、家具器皿の配置なり、對客の振合なり、一家老幼の奉養なり、何事も秩序井然として定まり居る時に於ては、三人の婢女を雇使する代りに一二人にて便ず可く、二時間にて爲すことをば、一時間にて爲すを得可く、十圓使用せねばならぬ所は、五圓にて事足る可し、經濟と云へば、此上なき經濟なり、儉約と云へは、此上なき儉約なり、快樂と云へば、此上なき快樂なり。



何事も順序を附け、次第を考へ、規則を作り、手續を定めて爲す時には、面倒なる事のある可き筈なく、六ケ敷事のある可き筈なし。主人は主人の爲す所をなし、主婦は主婦の爲す所をなし、一家の老幼少長に到る迄、各その家庭の一要素として、秩序に順ひ、各爲す可き所を踐行せば、苦情小言抔は藥にしたくも、出で來らざる可し。

或は春の花見、夏の海水浴、若しくは誕生節抔も、一家の年中行事に數へ置き、豫じめその用意をなし置か

ば、一家の歡樂も如何程多からん。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

考へ見よ、斯る家庭に成長したる子女は如何に幸福なるものよ！　彼等は遠心、深慮、沈着、周密、精嚴、謹厚、勤勉、耐久の人物となる可し。知らずや、ウエスリーの母、彼に『規則立つ事』を敎へ、遂に彼をして他日規律敎會を建立するに到らしめたるを。ワシントンの大領統となるや、人その母に向て、彼が偉大なる人物たるを賞賛す、母平然として曰く、彼の生平他の奇を見ず、但だ兒童たる時、能く丁寧に習字帖に臨みたるのみと、素養あるもの此の如し。世の父母たるもの、深く此の所に鑒みよ、子女の敎育に於て必らず悟る所あらん。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

小は『マッチ箱』の置き場より、大は一家の身代に及び、手近きは食膳より、遠きは子女の敎育迄、願くば秩序を失ふ勿れ。而して此の秩序をば、溫厚和平にして、自由寛裕なる心を以て之を行ふ可し。家庭幸福の秘訣實に此に在る也。

論說

新日本の地盤

其三　新國民

水磨を轉ずる水流の源は、窮谷幽谷の地より出づ。此の世界を動かす勢力も、亦田舍の爐より出づ。

小兒は大人の父なり。家庭は邦國の搖籃なり。健全なる小兒ありて斯に健全なる國民あるべし。健全なる國民ありて斯に健全なる邦國あるべし。一日の天氣が曉の色を以て卜すべきを思はゞ、小兒の品行が如何に其注意を要するかを知らん。邦國の命運が無心なる母の乳房に懸れるを思はゞ、家庭の敎養が如何に其大切なるかを覺らん。知らず世の父母たる者は如何にして能く其愛する子女を健全なる國民となさんとするや、

今家庭敎育の要旨一二を數へん。

第一、父母は先づ自家を健全にすべき事　人は遺傳と慣習とに由て作らるゝ者なり。特殊の事情に制せられざる以上は父母の心術躰軀は其兒子に遺傳するを常とす。唯に學校敎育のみにあらざるなり、唯に家庭敎育のみにあらざるなり、又唯に胎敎のみにあらさるなり、夫妻日常の品行健康は實に人類敎育の始たり。



第二、母たる者は殊に自ら修養すべき事　古より賢父有て賢子なき者はこれ有り、賢母有て賢子あらざる者は幾んど稀なりとす。世の傳記家が常に今古の偉人を傳して寧ろ父の賢を說かざるあるも母の賢を說かざるものなきは、蓋し故なしとせざるなり。そは他にあらず、母は遺傳に加へて慣習を附すればなり。

譬へば人性（遺傳）は絲なり、慣習は色なり。絲豈素ならんや、色之を染めて或は黄にし或は綠にす。母は人に最初の慣習を附する者なり、而して人生の規摸は全く此の最初の慣習に由て定めらる。

是の故に人の母たる者は最も常に身躰の健康に注意すべし、最も常に精神の快愉に注意すべし、最も常に行爲の秩序的なるに注意すべし、最も常に心を操る莊重貞實に且高潔温麗なるに注意すべし、其平昔に於て尓。胎敎の日に於ても。三歳が間に於ても、家庭に坐するすべての時に於ても。

第三、女子には成るべく自治の慣習を附すべき事

一國の獨立するは一家の獨立するが故なり。一家の獨立するは一人の獨立するが故なり。而して一人の獨立するは一心の獨立するが故なり。世に依賴心程卑むべきものはあらず、依賴するの極は小なれば以て事を敗り、大なれば以て國を敗るに至るべし。是を以て國を敗り、事を敗るを悪まんものは獨立するに如くはなきなり。而して獨立するの道は唯自治のみ。

自治とは自家の事は自家之を爲すを謂ふなり。自家の事は自家之をなし、而して後に幷せて人の事までも我之を爲すを得べし。人の事までも我之を爲す、之を慈善と謂ひ、又之を公共に盡くすと謂ふ。去れば自治は積極的生活をなすの始めたるなり。

故に人生の事は自治より先なるはあらず。從て敎育は自治の慣習を附するより重んずべきはあらず。

小兒に自治の慣習を附するには之に一室を與ふるを最も便なりとなす。小は顏を洗ひ衣を着け靴を穿つの事より、大は讀書學問に至るまで、自家の事は自家之れを爲し、而して自家の事に他の助けを仰ぐは、人の最も耻とすべきの事たるを知らしむると共に、家計の許さん限りは成べく早くより小兒に一室を與ふべし。其初は彼が定まりたる臥塲となすも可なり、又た彼が定まりたる翫具の置所となすも可なり。少しく長じたらんには、彼は自ら此の小城郭の主人公たるを見出し、自ら其城郭の臣從たる書物卓子獨樂凧絲等を如何に所理すべきかを知らん。父母は唯之を監査し之を扶助して、其秩序と勤勉とを保たしむべし。

第四、堅忍不屈の風を養ふべき事　諺に、時日と忍耐とは桑葉をして紬緞に變ぜしむと云へることあり。絶大の事業は多くは大才睿智に由て成されずして、常に繼續せる勇猛精進の力に由て成さる。是の故に人に堅忍の力あるは家に柱あるが如く、國に不屈の氣風あるは人に脊骨あるが如し。

而して子女の堅忍不屈を養はんとならば、決して事を半途に廢せしむる勿れ。又決して擧動をなまぬるからしむる勿れ。事に從ふに當ては須らく事を責任的に引請けしむべし。之を爲すの理由を明白に覺らしむべし。之が結果の如何になるべきかを知らしむべし。又仕事と時間との割合を思はしむべし。而して手段は自ら撰ばしむべし。且其初には成るべく彼が力の之をなし得て餘りあるものを命ずべし、然らざれば彼は事に逢ふて萎縮し、遂に何事をも嫌避するに至らんとす。

此くの如くにして彼れ能く其事を成し畢らん乎、宜しく其手段の適否と時間の遲速と成功の可否とを明かに

し以て之を賞し之を勵ますべし。如何なる塲合に於ても理由を明さゞるの賞罰をなす勿れ、又賞罰に定率なき事勿れ、恒久なき事勿れ。或る塲合には賞罰し或る塲合には賞罰せず、若くは或る塲合には重く賞罰し或る塲合には輕く賞罰す、此の如きは信を兒子に失ふの甚しきものにして、賞罰の効果復た有るべからず。

第五、規則正しき慣習を付くべき事　規則正しき事は、時間の最好なる經濟法なるのみならず、事を敗るの憂少なく、錯雜を來さずして事を爲すに苦少なく、且定期を愆らざらしむべし。加之能く心身の秩序を保ち、大に健康を永續するに益あり。語に云く、徐々として行歩するものは、久しけれども疲れずして、遠きに行くとを得べしと。蓋し一時一事は成功の秘訣也。

第六、常に快愉を保たしむべき事　快愉は勇氣の母なり。善行の源なり。平和の由て出る所なり。自由光明の由て來る地なり。

而して快愉の光にして照る處は唯和樂なる家庭在り。

第七、自重の念を養はしむべき事　自重は傲慢に異り。傲慢は以て人に加へんとするものなり、故に其行や憎く〳〵し。自重は以て自ら持せんとするものなり、故に其事や貴し。以て品格を保つべきなり。以て威嚴を保つべきなり。又以て操行を保ち、安祥を保つべく、以て大事に任じ、以て遠きに行くべきなり。

孟子が所謂、天下の廣居に居り、天下の正位に立ち、天下の大道を行ひ、志を得れば民と之に由り、志を得ざれば獨り其道を行ふ、富貴も淫する能はず、貧賤も移す能はず、威武も屈する能はざるもの、豈喜ふべき國民にあらずや。

第八、自ら欺かざらしむべき事　是れ從來の日本家庭が最も輕視したる所にして、世間の父母は勸懲の爲めに幾多の妄誕なる古譚を小兒に告ぐるを不可とせざりき。彼等は泣く子をすかすに、犬なきに犬來れりと言ひ、鷄あらざるに鷄を看よと呼べり。斯る罪なき事と雖、人を欺き自ら欺くの結果は決して少小にあらず。

蓋し國民の美風は其摯實なるに在るなり。人の最も願

母しきは自信強きに在るなり。自ら欺く者は是れ自信なきもの。自信なき者は、其行輕々しくして常に人に侮らる。古に言はずや、信なくんば立たずと。

第九、自ら教育せしむべき事　人の心意は春芽は如く、光と温とに浴して自ら發暢せしむべきものなり。彼の宋人の如くに苗を抜くべからず。又茶碗の如くに湯水をつぎ込むべきものにあらず。是の故に成るべく自ら其手段を求めて自ら教育せしむべし。自ら教育するものは能く自ら其志を立つるなり。又能く自ら世に處するの道を見出すなり。

世に曲學阿世の學者を出し、又器械的の人物を出す所以の者、職として其自ら教育せざるに由ずんばあらず。

第十、教育を強ゆべからざる事　性情同じからず、嗜好各殊なり。父母の責務は唯兒子の嗜好性癖を見出して之を助長せしむるに在るのみ。木を切ること好むものは工人にせよ。培植を好むものは農夫にせよ。業に貴賤なし、事に高下あらず。

干渉教育の結果は唯失望あり、又萎痺したる心情あり。

第十一、最も遊戯に注意すべき事　家庭教育中最も重要なる教科は何ぞ、遊戯是なり。遊戯は最も快愉にして而して最も効果の多き教科、智育に於ても、德育に於ても、又躰育に於て、其自然を教師とし、社會を教師として得る所の者、決して學校に於て得る所に減ぜず。

人の性癖を見出す、これより好き所あらんや。人の自由思想を養ふ、亦これより好き地あらんや。

世人動もすれば兒子の遊戯に干渉して言ふ、成人しくして遊べと、然れども不可なり。遊戯は成るべく活潑なるを好しとす、其事の罪悪ならざる以上は各好む所に從はしむるを可とす。是れ啻に其躰軀を強壯にするに適するのみならず、能く人を大膽にし、兼て自由の意氣を發暢せしむるものなればなり。

健康なる精神は健康なる躰軀に宿り、健康なる躰軀は健康なる遊戯に由て養はる。



以上略述せし所は、吾人が新日本の相續者たる新國

民の爲に世の新父母に望める重なる條項なり。然れども人誰か子を愛せざらん、其愛する所のものを育する、誰か其道なからん。其道固に多端なり、吾人は其多端なるを問はず。唯願くは我が新國民をして從順なる國民たらしめんよりは、寧ろ强梗なる國民たらしめんことを。唯願くは我が新國民をして愛すべき國民たらしめんよりは、寧ろ畏るべき國民たらしめんことを。敢て告ぐ我が新國民をして好國民たらしめんよりは、寧ろ大國民たらしめよ。

陶淵明

盛年不㆓重來㆒。
一日難㆓再晨㆒。
及㆑時當㆓勉勵㆒。
歳月不㆑待㆑人。

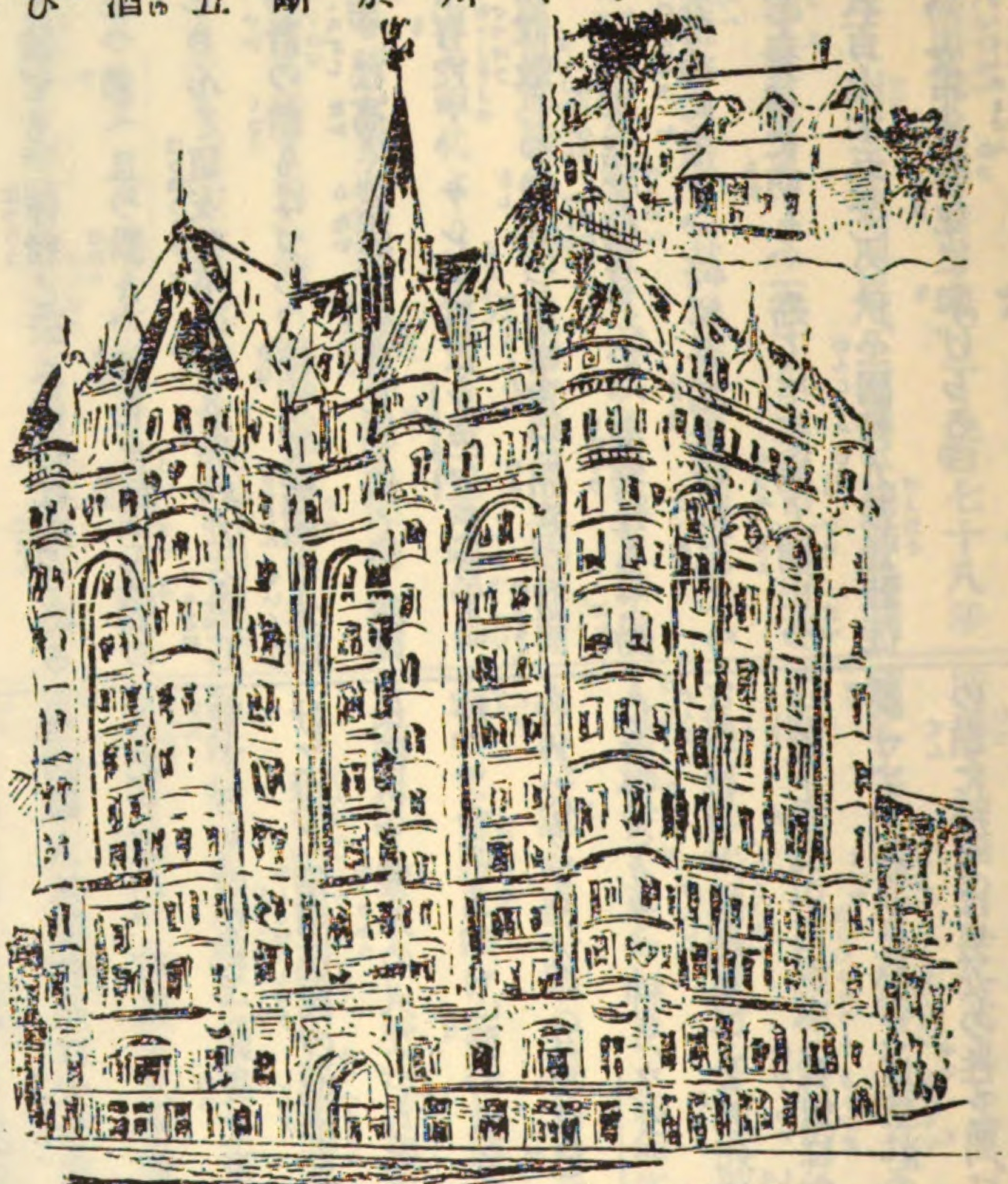
美談

ウイルラアド女史（續）

女史が其眞職に就きたる時は、已に三十五歳なりき。女史は性來の禁酒家にて、父も母も亦一滴の酒を用ひしことなく、女史の育ちし家の壁には禁酒せる家の幸福と飲酒の家の不幸なるさまとを對し描ける一面の畫額を掲げありて、其不言の敎訓は深く幼なき女史の腦底にしみぬ。

頃は千八百七十三年、オハイオ州ヒルスボロウに於て、心勇に姿やさしきトムソン夫人なる一婦人深く感ずる所ありて是非共酒魔に對する十字軍を起さゝる可からずと決心し、其會堂に出で丶他の婦人に自家の熱心を傳へ、斯くて共々に祈禱を以て酒店を閉さしめんと出で立ちぬ。此運動忽ち猛火の如くオハイオ全州に燃へ

廣まり、熱心なる婦人等聖歌を唱へ祈禱を捧げて酒店を攻撃し、或は酒店の内に祈り或は舗石の上に跪きなどして只管熱禱する所ありき。結果は宗敎上の一大信仰復興となり、禁酒名簿に署名する者幾千人、暫くの間はオハイオ州及近隣の諸州に於て酒類の賣買を斷つもの渾て二百五十市村に及び、酒店の主人先を爭ひ樽を倒にして毒汁を溝に傾け棄つるなど、一時非常の勢なりき。已



女史少時の家と現今の婦人白標軍の本陣

にして反動起りぬ、禁酒運動は進歩を妨げられぬ、於是ウイルラアド女史即ち出でにき。大學に於ける職を辭してより女史は東の方に赴むき、時に觸れ禁酒事業に盡力し演說をなしなどしつゝありしが、頓て新約克の女子學校より年俸三千五百圓を以て校長に迎へむとの申込來りぬ。同時にシカゴ府より同地婦人禁酒會頭とならんことを請ふの書達せり、素より俸給の申込はなくて。此時女史は別に生活の道あらざりき、然れども堅く信ずる所あり、新約克女學

校よりの申込を謝絶してシカゴ婦人基督教禁酒會の會頭となりぬ。

會頭の名美なりと雖ども、俸給と云ふ俸給は殆どあるなく、數月の間且つ餓へ且つ働き、貧しき民と自個の間に懸隔なからしめんと朋友弟子の贈り呉れたる美しき指環も脫し、時計の鎖もはづし、極めて窮困の生活をなしぬ。然も志は高く意大、揚言して曰く、余は此世に一仙の金も有たず、サレド吾はシカゴを有す」と。斯くて女史は說敎しつ敎へつ祈禱會を開きつ訪問をなしつ組織をなしつ非常に働きしが、滋養足らで働き過ぎたる爲めに熱病に罹り、終に其老母の勸により僅かに其困窮の實を會員に明し、斯くて事漸く緒につきたり。此年（千八百七十五年）の秋全國婦人基督敎徒禁酒會の組織成り、女史其書記に擧げらる。

此頃より女史は婦人撰擧權につき思ふ所あり、謂へらく、婦人撰擧權を得ずして禁酒運動をなすは猶右手を背に縛せられて戰に臨むが如し」と、即ち婦人撰擧權を主張しはじめたり。然るに女史が之を主張するや、全國婦人禁酒會頭は大會に於て此問題を持出すことすら之を拒み、右にも左にも敵も味方も一人として之を贊するものなし。此後女史は大說敎師ムーデー氏を扶けて以て禁酒運動の進步を圖らんとせしに、ムーデー氏極めて善良の人ながら極めて褊狹の人物にて、女史が「ユニテリアン」派の人々と與に禁酒演說壇に上るを咎めたりければ、女史は已むなくムーデー氏と絕たざるを得ざりき。抑もウイルラアド女史は極めて實着の人物にて、眼識男子を慙死せしむるものあり、曾て其主義を述べて曰く、我會は宗教に於ては何れの派にも屬せず、政治に於ては何れの黨にも與せず、公民たるの點に於ては男女の性を問はず」と。流石に近世未曾有の大十字軍を指麾する女史の如き者は、此程の大識見大包量なくては叶はぬなり。其のムーデー氏と絕ち、

衆難を排して婦人選擧權を主張するところ、正に以て女史の膽力 識力 自信力を見る可きなり。

斯くて女史は米大陸遊説を初めたり。千八百七十八年より千八百八十八年に到る十年間に、女史は聯邦諸州中人口一萬以上の都府はもとより五千以上の市町の大抵は遊説し盡し、家にあることは一年に三週間ばかり、其餘は大抵一日に一演説の割合にて、或年の如きは友人ゴルトン孃と共に星章旗の翻る四十四州五個の直轄地を遍歴し、鐵道舟車により旅行する所三萬哩の長きに渉れり。其到る所女史は禁酒に併せ説くに婦人撰擧權を以てし、大會に於てすら婦人撰擧權に對するの反對は次第に收まりたり。千八百七十九年インヂアナポリスの大會に於てウイルラアド女史愈々會頭に擧げられ、爾來此大十字軍の指麾の大權女史の手にあるもの茲に十四年。

女史會頭となりてより米國婦人禁酒會は全く其組織を一新し、其事業は矯遏部敎育部社會部法律部組織部の諸類に分たれ、婦人撰擧權説も採用され、其目的とする所獨り禁酒のみに止まらず、類を分つて殆んど四十四種に上り苟くも社會に存在する弊害惡習を拂て之を滅すは實に此の白標軍の目的なり。女史が十有餘年の盡力如何に此軍勢の力をして威米國に振ひ延ひて萬國婦人禁酒會となりしめ、如何に多くの改革の績を擧げたるか、説かば一朝の事にあらず。ウイルラアド女史が初めて會頭に擧げられし時大會に來り臨めるは聯邦の二十州のみなりしが、先年の大會には四十四州皆來會し、新大陸舊大陸の代表者亦皆來り臨めり。婦人禁酒會は禁酒の請願に都合一千萬人の記名を集め得たり。聯邦四十四州の中三十八州に於ては、已に公立學挍の課程中に酒の生理上に及ぼす影響を學術的に敎ふるに到らしめたり。幾多の州議會に迫つて結婚の年齢をあげ青年の腐敗を防ぐの道をとらしめ、小兒に煙草を賣

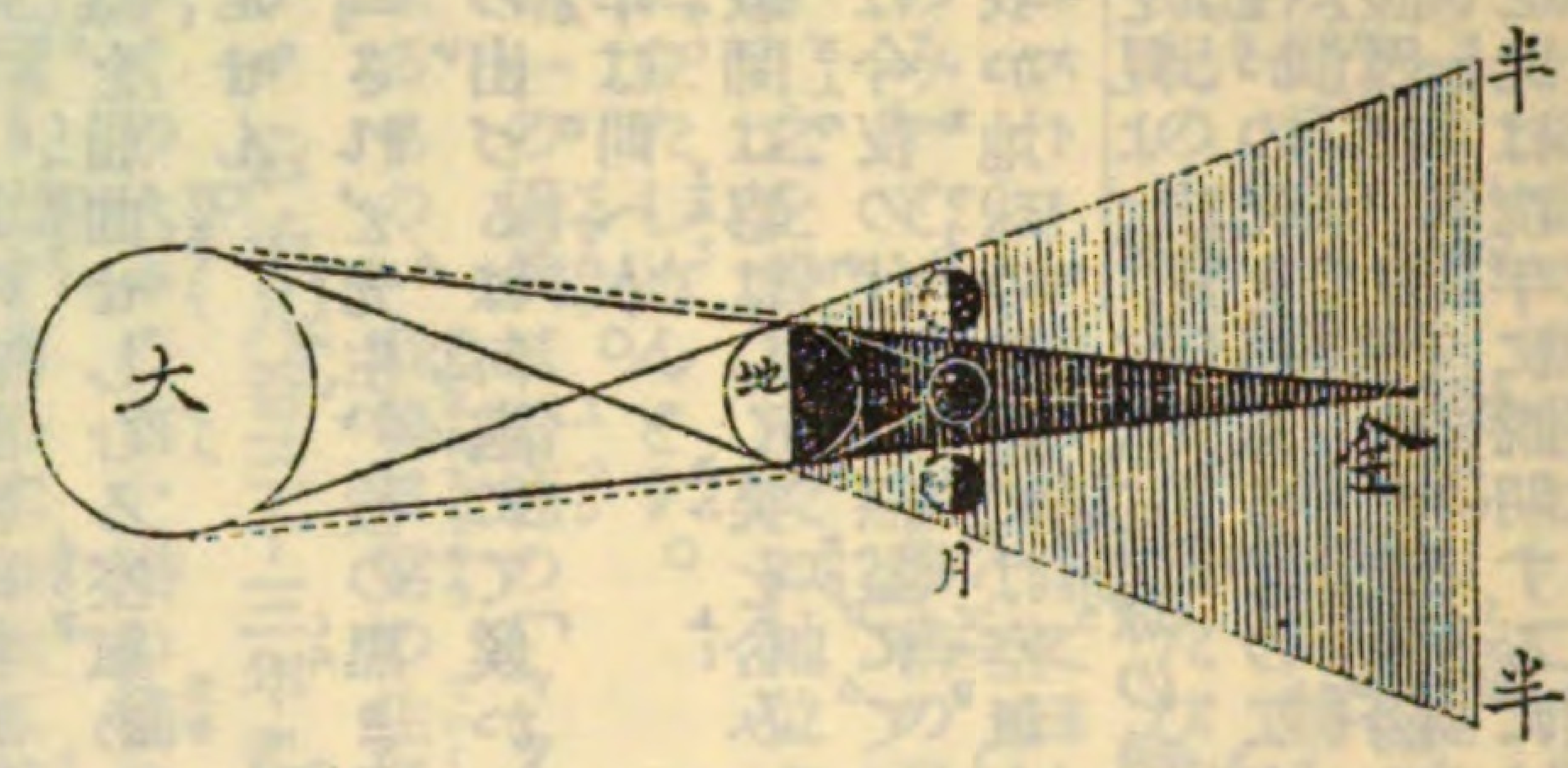
るの制限を設けしめ、日曜安息の事に就ては輿論を提撕し法律を強むるに機會を逃さゞりき。其機關新聞は今や一週に七萬五千の發兌高に上り、其活版所は單に此會の目的の爲めに一億三千萬ページを印刷す。シカゴ府第一等の宏大美麗なる建物は婦人禁酒會の本部なり、一萬の支部合衆國中にわたり、歐亞濠弗皆脈絡を通ず。眞に是れ十字軍以來の大征伐、之を指顧の間に操縦するウィルラアド女史も亦偉なりと云ふ可し。男まさりの意思、男まさりの見識、男まさりの才能、學問あり、修養あり、五十年の實驗あり、尤も組織の能に富み、終生未だ曾て人に嫁せずと雖とも所謂家庭の眞味を知り、もと懷疑的なるもかたく信仰を守り、認めて行ひ信じて進む、女史は實に此大運動の指揮者たるべき資格を具へたり。自ら信ずる高しと雖とも、其力は即ち之に應へり。男子も慙かしき氣力ありと雖とも、親しく其人に接し亦女史が其愛妹メーリーの紀念に捧げたる『美はしき十九年』を讀む者何人か女史の情愛深き婦人なるを疑はんや。女史曾て曰く、上帝若し我等と共に在さば、我等はジアンダアクが其王を位に即かしめしが如く必ず我國を救ふを得可し」と。女史も亦實に十九世紀のジアンダアクと謂つ可き也。（完）

科學

月の話（月蝕のこと）（つゝき）

彼の天文學者が今まで語り續けし言葉の先を止めしとき、月の光右手の下の方より次第々々に朧になり行きしとき、月は其の半陰に入りつゝありしなり。間もなく暗き影はアリスターカス、プラトーの洞に蔽ひかゝりて、月は其の會陰に入り、中間にある地球の爲めに、太陽よりの光を全く遮り斷たれたり。されど太陽の光は全く遮斷せられたるにあらで、地球の周圍に空氣の大洋あるが爲めに、茲に一の美觀を呈したり。

此の夜は、天に一點の曇なき清き夜なりき。暗き影、徐に月の表面に蔽ひかゝり、アペンニース、コペルニコスを蝕し、漸くタイニーの輝ける光を嘗め、遂に



月蝕皆既の圖

大は太陽。地は地球。月は下より地球の陰に入りて上に出づ。地球の後の眞黑なるは太陽の凡ての光地球によつて蔽はるゝ部分にして之を全陰と云ふ。其の半黑の部分は太陽の光半は蔽はる部分にして之れを半陰と云ふ。

……の點は太陽の光線の屈曲する樣を示したり

之を呑み了りしとき、怪げなる柑色の光見へ始めたり。月の蝕されし部分は全く黒くはならず、甚だ微かなる青みある緑色にて彩られ、蝕されし部分一分々々多くなり行くと共に、何時變りしともなく赤き薔薇色に變り、遂に焰の如き銅色の光と變しぬ。彼の少年は與へられたる小さき天文鏡より此等不思議なる光を見、月は既に蝕されながら、尙ほアペンニース其他種々の洞穴の朧ろに見分け得るを異しめり。彼は注目せり、されど無言なりき。大切の時は既に間近く來り、黑銅色を帶びたる月は、一の輝ける星と益々近く接し來りぬ。

此の小さく閃めく星は數億萬里彼方にある一箇の大陽にして、此が月の後に隱るゝ一事實は一粒の粟が大海に落ちたる程些細なることなれども、學者の爲めには大なる功を奏し彼等をして月の表面に空氣なきことを證せしめたり。彼の星は益々近く來り、月の暗きに對して益々強く輝きしが、一瞬の後は既に見へざりき。長き間待ち設けたる時は過ぎたり。彼の天文學者は椅子を離れ溜息をつきて云へり『余は別に新しき智識を得ざりき。されど、我等自ら、彼の星が、我が地球に

於ける太陽の漸次光を失ひて遂に彼方に沒するが如くにはあらで、突然、月の後に隠れ、また突き出づるを見て、月の表面には我が地球に於ける如く、太陽の光線を屈曲せしむる空氣あらざる證據を得たるを以て滿足せん。

『されど先生、彼の黒き月より種々の色を帶びたる光の出づるは何處にて候か』と今まで無言にて待てる少年は問へり。

敎師は喜ばしく笑を含み『御身は其を見たるか、さらは今夜の仕事は無益にてはなかりし。御身の知る如く我が地球の周圍には空氣あり、太陽の光線を屈折（圖を見よ）せしめ、地球の後に全く隠れたる月の表面に、僅かの光を與ふるものなり。光の色の種々に變り行く源因は、日沒のとき太陽の光變り行くと同じ道理なれど此は夜半に説明するには六ヶ敷すぎたる問題なるべし。』

かく云ひて、彼はランプに光を點じ、天文鏡を臺より下し布にて覆ひ、敎子と共に梯子を下り行けり。二八が敎室に至りしとき、鼠の天井を走るが如き音彼方に聞えぬ。敎師は微笑みぬ、彼は此の音を聞き、曩に敎室に集まり思ひ〳〵の觀察をなせし多くの生徒が寢室に走り行きつゝあるとを知りぬ。（終り）

科學と勤儉なる細君　（廢物利用）

人智の進み行くと共に、誰しも知る極めて尋常の物を、これ迄知らざりし極めて新奇なる用に充つること發明せらる。天然に作られたるものに無益なるものはなし、動物の生活する中に排泄する物、死して後の肉骸は植物を養ふものとなり、新たに生れ來るもの丶爲めになくて協はぬものとなる。處定めず風のまに〳〵吹き遣らるゝ塵が、雲雨を喚ひ起すの媒となり、また天の色を立派に彩るの効あることは人々の知る所ろ也。不用のものあるが如くに見ゆるは、其の實不用なるにはあらで、人未だ其の用法を知らざるのみ。製造の全歷史は廢物利用の進歩なり。今日の不用物は明日の富源

となるやも知るべからず。嘗て第十七世紀の頃ボイルなるもの一書を著はして人が充分に使用法を知れる天然物は未だ一もあらざることを論じたり。十七世紀に於ける此の眞理は、二十世紀に近きたる今日に於ても同一の眞理を含める言葉也。されども人智の進歩は此の間に於て多くの無用物を價ある有用物となせり。今世紀の中頃に於て三たび英國の大宰相となりしパルメルストーン卿の格言に曰く『物の役に立たぬは只だ塵のみ』と。されど學術の進歩は塵の如きものをも棄てず、之を役に立たぬ地位より引き上げて、金銀と同列に立たしめんとす。

第一の適例は普通の「マッチ」なり。人生の快樂に必要なるもの、我等日常の生活に欠くべからざる此の「マッチ」が千八百三十三年に至るまで知られざりしとは、多くの人々の信じ得ぬ程のことなるべし。昔の人が火を鑽り出す爲めに如何に苦辛し、之を保存する爲めに如何に注意せしか。千四百二十九年の頃には、頸に燧袋を掛けたる人は、其の時代の進歩したる人として貴ばれたりき。第八世紀の頃亞刺非亞人ベクルなるもの燐を發見せしが、一たび忘れられ、千六百六十九年に至りブラントによつて再び發見せられたり。其の時の燐は人尿より製造せられしが、其後更に簡易なる方法發明せられ、今まで顧みられざりし動物の骸骨はマッチ製造の必要なる原料となれり。千八百三十三年世界最初の燐マッチ製造せられしが、其の製法甚だ粗惡にして、製造するもの、使用するもの皆其の毒に苦しみたりき。千八百四十五年に至り、澳地利の都維也納にに住めるシュローテルなる人燐を油にて煮る方法を發明し、此に初めて赤色燐のマッチ製造法起りぬ。

古き骨より出てたる原料を以て、容易に火を燧り出すの方法出でゝより日常生活の上に如何に驚くべき變化を齎し來りたるか。マッチの發明ある前には、男子、婦人、小兒各火と光とを得る爲めに一年平均九十時間を費せしと云ふ。今日マッチを費すこと一人一日八本にして、一本毎に十五秒を費すとすれば、一日にして二分を費し、一年にして十二時間を費すの割合とな

る。されば此の一事によつて得たる時間の經濟を我が國の人口に當つれば、一人毎に七十八時間を節し、七十八時間は十日の勞働時間となるべく、勞働賃銀を平均三十錢として之に代ゆれば、人毎に三圓、四千萬にして一億二千萬圓の節儉をなし得たるなり。

或る製造場の排棄物にして他の工業の材料として用ひらるゝもの甚だ多し。襤褸は此の變化の著しき一例なり。木綿及びリネルの襤褸は紙を製造する主要の原料なり。乞食の觸るゝを厭ふ程のものさへも、神聖なる愛情、懇切なる友情を送る爲めに用ゆる紙となる。著名なる獨逸の化學者リービヒ男は石鹼を以て各國民文明の程度を計るの尺度となせり。これ素より理あるの言なれども、尙ほ木綿、リネル襤褸購收の競爭が最も明らかに敎育の普及、文學の嗜好を表するに如かず。千八百八十七年以後の統計は未だ得ざるも、其の年各國民の費す紙の量は、英國、一人に付き十二封度、合衆國十封度、獨逸國九封度、佛蘭西國八封度、伊太利國四封度、（一ポンドは百十二匁程）。

毛織物の襤褸に至つては最後の用をなすまでに、更に多くの日を經、多くの道を行く。英國にはバットレー、デユーベリー、リーヅなど云ふ大なる襤褸市場あり、歐羅巴の破れて臭き古着は再び流行を支配する織物となつて現はれ、外見と經濟を考ふるしやれものは皆な之によつて自ら裝ふ。若し其の襤褸少し大なれば、「つくらひ師」、「仕立直師」「細工師」の手に渡さる。「つくらひ師」は破れたるを縫ひ合せ、原の如き形となす。「仕立直師」は名の如く、破れ汚れたるものを仕立直し廉き衣服を求むるものに賣る。「細工師」と云ふは一等上の職人にて古き上衣の裾の部分より小兒のズボン或はチヨッキを作り出す。若し黑服にしてつくらひ或は仕立直しの出來ざる程に破れたるときは、之を佛蘭西、魯西亞、ポーランドなどに送りて帽子となす。英國兵士の古赤シャツは和蘭陀に行き、胸當となり、少しく新しきは阿非利加に行き王及び酋長の威嚴を示す衣服となる、かくて再たび用ひられぬ程になりて後、更に解かれ漉かれて下等の布となる。此の下等の布また古

び再び用ひられざるに至り、他の細工に用ひたる蹄、角のくず馬の血などを混し、灰、金クソなどと共に鐵の釜にて熔かされたるときは、人の目を炫す計りに鮮なるプルシヤ藍となる。

婦人に必要なる香水の如きも、原を質せば、花の油より製せられたるものあれど、多くは酒精をランビキに掛くる時に出づる、臭き油より製せらる。或は廐の流れ液、或は石炭の煤より製造したるものを美はしき額に塗り、其の香氣、其の光澤に誇る貴婦人も多きなり。

瓦斯製造より出ずる煤は川に捨つれば川を毒し、地にうづむれば地を荒し、最も取扱ひ悪き無用物と現られしが、今は最も美はしき染料、最も高價の藥品、砂糖より三百倍甘きサカリン、病素を殺す最良の豫防藥を製するの原料となれり。其の用法種々あれど最も大切なる用法はアリザリンの製造に用ひらるゝものなるべし。アリザリン（木の根）と煤とを以て赤、青、紫の染料を製するの方法發明せられて土耳古、和蘭佗の大耕作業全く衰滅に歸せり。

立派なる染料、最も甘き食品にして此の最も汚き不用物より製造せらるゝことに付きては數十頁を費すとも盡きざるまじき面白き話あれど、其は後に讓り、今は目先の變りたる一の話を擧げて滿足することゝせん。

あらゆる生活物の中鼠程うるさきものはなし。されど、鼠も用ゆれば虎となるとの譬こそなけれ、用ゆれば大工業を起すの原ともなるなり。佛蘭西の都巴里にては、動物の骨を投げ入るゝ一の大なる洞穴あり。此處に大なる鼠の殖民地開かれたり。鼠は誰しも知る如く、骨に殘れる肉を食ひ去り、之を磨き直ちに燐の製造に用ゆるに適せしむ。洞を圍める壁の下方に數多の淺き穴を穿ち、鼠之に入るときは身躰のみは藏れ、尾は藏るゝ能はざらしむ。三ヶ月毎に大掃除行はれ、古き骨取出され、新しき骨投げ入れらる、鼠は其の騒擾に怖れ穴に走り込み、尾を取りて引き出され、捕へらる。かくて製造始まり、鼠が磨き上げたる骨は燐の製造場に送られ、鼠は皮を剝かれ、最上等の手袋となり、肉、骨は煮て砂糖製造所に送られ、砂糖を固むる用に供せ

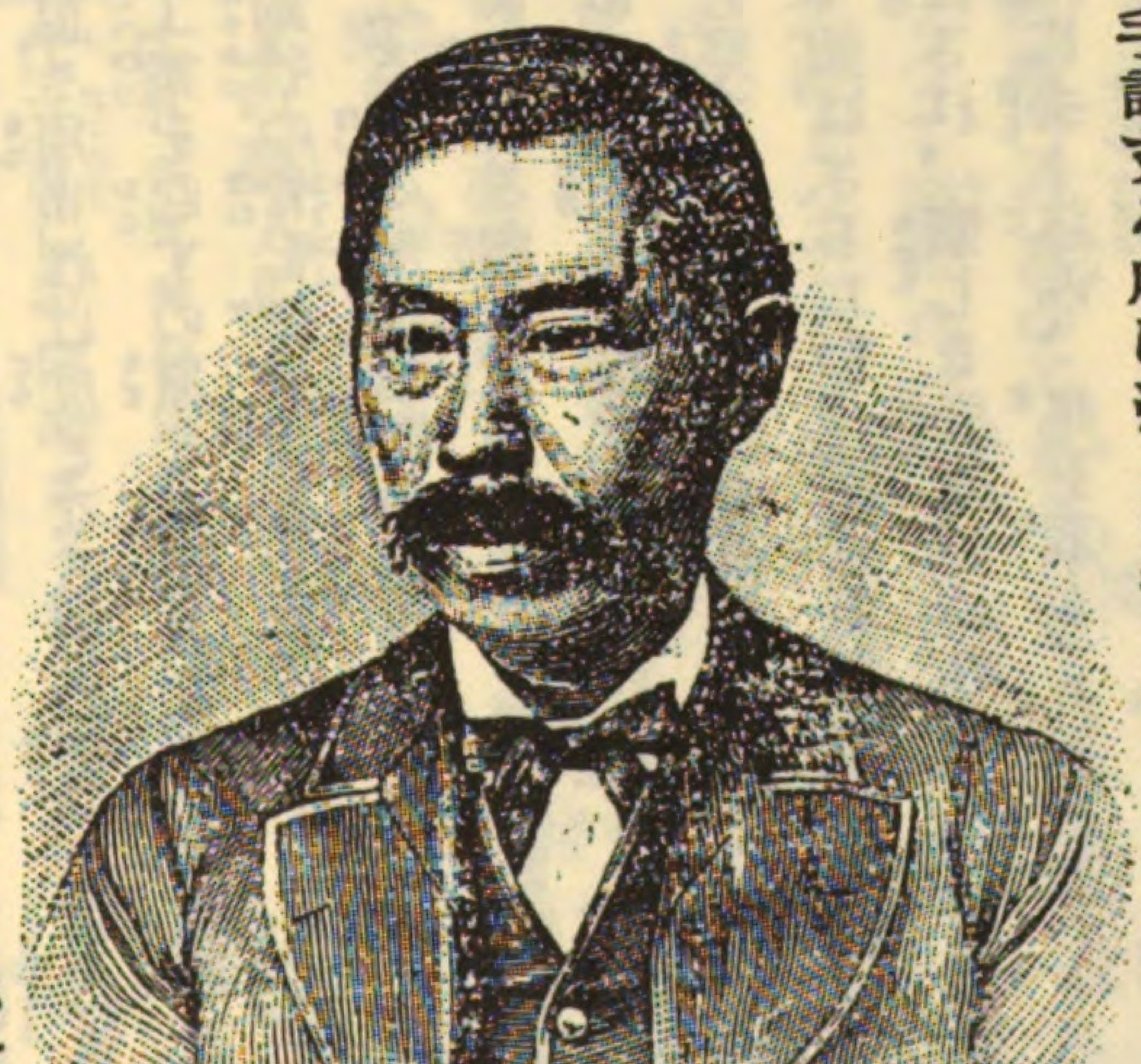
らる。
科學は心ある細君の如きなり、有用のものを節し用ひ、無用の中に有用を求む。街上に落ちたる馬の靴は取り集められて刀劍となり、鐵砲となり、麥酒の樽の輪はインキとなる。天然には一の無用物はあらぬ也。余は讀者が此の二三の例によつて、假令科學なるものに其の意を注がれずとも、せめては科學なるものは勤儉なる細君なりとのことを知り、之を師とせられんことを望む、畢竟科學の神髓と云ふべきは此に外ならざればなり。

文藝

新島先生聖書の記

蘇峰生

卷首に掲ぐるは、余が珍藏する故新島先生の聖書中に記入し、若しくは挿入したる、先生の眞蹟なり。余が明治九年の晩、始めて先生を京都に見るや、斯書實に先生の案頭にありき、爾來屢ば先生を見る毎に、屢ばその傍にありしを見たり。聖書は先生の最も愛する所、而して先生が聖書の愛實に斯書に鍾る。斯書先生の手記する所に憑るに千八百六十六年とあり、實に我が慶應三年に當る。而して創世記の首章より默示錄の末節に到る迄、或は朱點或は綠點、或は黑線、層見疊出、實に先生が熱讀玩味したる痕跡歴々として徵す可きを見る。余が始めて此書を見たる時には、海氣布を



新島襄先生肖像

以て、その黒皮の表釘を包ゝみありき、而して今や黒皮の表釘も斑々の痕あり、その三面の小口に貼したる金箔も、剝落して金閣寺の天井の如く、まゝその紙丁も絶たんとするあり、既に絶ちたるあり。而して此の聖書中には、先生の說敎の草案、その他偶感偶記の類、挿入若しくは記入しあるもの擧げて暇あらず、且つその記入したるものを見るに、實に再度の洋行中にも、斯書は先生に伴ふて、歐山米水を涉りたるを知る可し。未だ知らず果して大磯灣頭先生の最后に陪したるや、否や。

先生の永眠後、その遺物を故舊門人に頒つや、余は特に新島未亡人に請ふて、斯の一卷を得たり、爾來余が斯書に對する實に先生に對するか如し、卷に向ふて髣髴靄然たる德容眼中に入るを覺ふ。

明治二十六年先生三週年前十三日

門人蘇峰生記

嬰兒（つゞき）

一一生

彼の母や祖母が彼を湯屋へ連れ行きし時には、必ず彼を湯桶の中へ座せしめて、湯札を弄せしむるなり、ある日の事なりしが、彼は湯札を弄し居りしが、いつしか之を紛失しけり、三助はアハヤ八厘を刹け損はんかと心配し、眼玉をムキ出して、彼をば湯桶の中より攫み出しぬ、其擧動の如何にも凄まじかりしゆゑ、彼は大に驚きてワア〳〵啼き出したり、よりて又た八厘を出して湯札を買ひたりしが、湯より上りて着物を着るときに、三助は紛失したる湯札を搜し得たりと言ぬ、彼は時として、手を高く擧ぐると（高い〳〵）兩手にて頭をたゝくと（頭カン〳〵）兩手を拍つと（シャン〳〵）口を開いて掌にてたゝくと（アワ〳〵）兩頰を窪めて口を尖らせると（鳶口）等を續けさまにするとあり、又た如何に促しても爲さゞるとあり、强ち其時と場所とに因りて、意ありて爲し意ありて爲さゞるにはあら

ねど、大概は愛嬌ありて善く褒める人に向つては促さゝるも、善く諸藝を爲し、愛嬌なく餘り褒めぬ人に對しては、促しても容易に爲さぬが如くに見ゆ、

彼に陶製の蛙を持たせる時は、彼は直に口を閉ぢ舌を鳴らして、蛙鳴に類する聲を作すなり、何人もこれを見て不思議と言はざるなし、されど是れ强ち不思議なる次第にはあらず、最初彼が蛙鳴に類する聲を作したる時より「蛙をした〳〵」と褒め囃し、其後此の如きことを爲す毎に、かへる〳〵と傍にて言ひしゆゑ、彼はいつしか蛙と云ふことを覺へしなり、蛙とさへ云へば直に此の如き聲を發することゝ定めたるなり、故に彼は陶製の蛙を與ふると與へざるとに關らず、蛙をせよと促せば直に蛙鳴を爲すなり、後には陶製の蛙さへ見ば、促すまでもなく蛙鳴を作すに至りぬるなり、嬰兒の知らず〳〵の間に敎育せらるゝこと、概ね此類なり、

彼の燒芋を好むと云ふ評判は、親類緣者の間に喧しく聞へぬ、故に彼の母か祖母が、彼を連れて親類緣者の家に到る毎に、必ず燒芋を買ひ來りて饗應するやうになりたり、

彼は以前より燒芋と鹽煎餅を好みて、此二物を見れば狂氣の如く貪り食ひ、與ふること少しく後るれば、怒り泣くこと甚しく、而して他の食物に向つては淡如として噪がざりしが、此頃は又た蜜柑の味を知り、蜜柑の液を吸ふと乳を呑むが如く、多量ならざれば飽かざる樣になりぬ、故に家人皆な彼には決して蜜柑を見せぬやう注意するに至りぬ、柑液を乳ほどに呑みては胃を害するの恐れあればなり、

彼は今月にて滿一ヶ年となりぬ、來る二十三日は彼が誕生日なり、彼は實に明治の偉人として滿天下の敬愛を得たる新島襄先生の三年忌の當日を以つて、此世に出で來りけるなり、社會改良運動の義戰士として有名なる植木枝盛氏と相約して更迭したるものゝ如く、植木氏が逝去したるの當日を以つて、此世に出で來りけるなり、彼は此の如く新日本の偉人名士と因緣を有す、此因緣だけを以つても、彼は爲すことなく聞ゆることなくして、一生を終るべきにあらざるなり、

同邸内に彼と同名の嬰兒あり、彼より五十日ばかり後れて生れたるものなるが、我が一家の者は皆な同名なりとても、强ち同字なるにはあらざるべしと思ひ居たるに、不思議なる事には、同名にして文字さへ異ならず、

新刊書

『婦人立志篇』

自助生

『婦人が文學を業とするは惡しきことにあらず、去れども浮きたる小說や主義なき文章は爲さゞるに劣り、其品格を下すもの也』とは、是れ『婦人立志篇』中に記せる一節なり。

吾人は固より婦人の文學を非とするものにはあらず、然れども亦其浮きたる小說や主義なき文章をは好ましとは思はぬなり。而して深く『婦人立志篇』著者が亦之を好まざるを喜ぶ。

我邦に於て古より文藻に富みたる婦人少なきにあらざる也、紫氏淸女は言ふも更なり、現時に於ても田邊花圃女史若松賤子小金井君子等皆一個の女文學家、彩毫を嚙んで各思ひ〳〵の花を綴る。而して此等の人々は勿論浮きたる小說や主義なき文章を好むものにはあらざれども、多くは是れ主とする所美文に在る也。獨り『婦人立志篇』著者に至ては、實に新日本の家庭が由て立つべき摸範を示さんと欲するものゝ如く、主とする所濟世救人の事に在り。是れ特に其喜ぶべき所以。

『婦人立志篇』著者は婦人雜誌記者竹越竹代女史なり。辭藻淸捷、一種の風調を有す。婦人矯風會雜誌を出すの縫餘今此書を著しぬ。其意蓋しスマイルスの言を引て自ら其卷首に題したる如く

勝れたる人の言行錄、就中善人君子の言行錄は最も他人を補け、導き、且つ奬勵するものなれば、その敎訓となり、裨益となることは甚多し、その極善なる人の言行は殆ど福音書に均しく、その高潔の志念、幷に已れを善くし、又天下を善くせんと欲して爲すところの邁往剛烈の行狀、皆世の敎となる

を以て乎。讀て幾多の婦人を奧起せしむるに足るもの少からざるべし。」書もと格言と偉婦人の傳記とを以て成る。上卷載する所は

政治家　ローランド夫人
教育家　ハナ、モール夫人
貞　婦　ハッチンソン夫人
殉教者　アン、アスキウ夫人
理學者　ソマルヴヰル夫人
慈善家　ナイチンゲール孃
文學者　ビーチヤア、ストウ夫人
　　　　ラバレット夫人
大神學家　アウガスチンの母モニカ
旅行者　アイダ、バイフエル夫人

及び幾多の格言なり。且挿むに其自讃を以てし、以て花上更に幾多の花を添へたり。

吾人は此くの如き書の新日本の閨秀の手に成りたるを喜ぶ。

『新教育』

新教育社發兌

文部省の教育主義に多少反對の意見を有せる教育雜誌、『新教育』も亦其

一なる如し。彼は以て積年の空教育を打破し、教育社會腐敗の空氣を一掃し、朋黨の跋扈を挫き、不潔の自稱教育家を誅伐し、僞政治家の暴論に當り、文部の現政に直言を盡し、大に日本教育の發揮を謀らん。と宣言せり。其意向見るべきなり。

家政



育兒小話

小兒の習慣

習慣は第二の天性なりと云へば、惡き性質の子供も、善き習慣によりて之を救ふヿを得べし。

第一に效ゆべき小兒の習慣は『自ら制するヿ』にあり。この習慣を付くるためには、例へば他よりもらひ得し菓子等は、必ず家族に分配すること、或は自らの欲せざるヿにても、父母兄弟より命ぜられたるときは、必ずなすこと等の風を養なひて、成るべく氣儘を制するにあり。

小兒を仕つくるに當りて最も注意すべきは、父母を信用せしめ、父母の命とならば何にても聞かざるべからずと、威嚴を以て命ずるの傍、時ゝは小兒の意を迎へて、小兒の善事を賞し、小兒をして、善にはげましむるヿを勉むべし。然して何にても小兒の得心の行かざるに、強ひて爲さしむべからず。これ小兒の根情曲がりて、爲すべきヿも爲さゞるに至ればなり。小さき時より、父母は小兒の友人となりてうるさくとも小兒をして、事に得心せしめ、然る後之を爲さしむる樣に命ずべし。

第二は賞罰常あるべし。殊と更ら感覺の強き小兒を育つるに當つては、最も大切なるは、賞罰を明らかになすヿなり。年若き父母には、格別あり易き弊なるが、己れの氣の平かなるときには、小兒が爲せし過失をも、笑ひつゆるし。己が氣に不平のあるときは、やたらに小兒を叱りつけて、小兒をして如何になさば、正當なるにやと爲すべきヿを知らざるに至らしむ。かくなせ

し結果は、小兒をして小心ならしめ、遂には正直の心を失なひて、父母に隱れて事をなさしむるに至る。

第三小兒に命令の言は、成るべく靜かにして、ひどく叱らざるにあり。例へば小兒が過をなせし時は、小兒を膝元に呼び寄せ『汝が今なせし事は、誠に宜しからざる事なり、今後かゝる事をなすべからず』と敎へ、再び爲せし時『汝爲すべからずと云ひしを、忘れしか、今一度のみは免るすべし、今後之を爲さば罸すべし』と、かく命しをき、三たび命にそむきし時、始めて罸すべし。罸を度々なすときは、罸を恐れざるに至り、こらしめの法方なきに至らん、注意すべきと也。

第四敎育上忘るべからざるは、小兒の心を飢餓ならしめざるにあり、言を易ゆれば、即ち餘り消極的に育てざるにあり。されば是はなすべからず、彼は爲すべからずと敎ゆるの傍ら、時々古人の爲せし前例を談し、有益なる喩へ談し等をなして、小兒の心を富ましむるとを勉むべし。かゝる談は、屢々小兒の心をして、善をなすに勵げみ進ましむるの益ありて、善を爲すを倦まざるべければなり。

調理談

正月の菓子

正月には何れの家にても客の出入多くして、多量の菓子を要すべし、然るに日本從來の菓子は甚だ胃に害あり、さりとて一々西洋菓子を購はんには費少からず、されば暇の節手製になしをかば經濟にして便利なるべし。先づ何種の菓子に限きらず、菓子を作るに付きて注意すべきことは、

第一　塊なき粉と砂糖を要意すること。

第二　卵子を用ゆるときは黄味と白味とを、別々になして能く解かすと。

第三　容器は、鐵銅等の金物を用ひず、陶器を用ゆべし。

第四　菓子を混和するには、成るべく手を用ひず、木のサジ、或ははしを用ゆべし。

第五　菓子を燒くに最も大切なるとは、火の加減なり。

火の廻り能き處と、惡しき處とあらば、燒けし處と、燒けざる處とを生ずべく、火勢强よきに失すれば、中の燒けざる内に、外部焦げ付くべく、始め火勢を弱くして、途中より俄わかに之を强よむるときは、菓子に割れ目を生ずべし。

第六　菓子の内部迄燒けしや否やを知らんと欲するときは、一本の藁を刺して見るべし、未だ燒けざるものは、藁に水氣の付き、燒けしものは藁潔くして出づべし。

第七　菓子を保存するには、ブリキの入れ物を最良とす。但し布切れ等を以て、菓子を包まざるを良とす。

第八　菓子を燒くには、燒器の下に、油紙をしくを最良とす。

（一）橙柚の菓子

先づ望みによりて少量のバター と、二個の雞卵の黃味とを能く混和し、次ぎにコップ一杯計りのうどん粉を入れ、最後に二個の雞卵の白味を能く解かしたるものを入れ、少しの塊りの無き樣になりたるとき、小サジ半杯計りのソーダを入れ、之に橙或は柚子の皮を、少さく刻ざみて能く混和し、直ちにストーブにて燒くべし。（ストーブは前號家庭雜誌を參看せよ）

（二）白　黑　花

この菓子は、花形に切りて、菓子器に盛らば、美麗なる見へあるなり。先づ白花菓子のために、コップ一杯の白砂糖と、少量のバタと、コップ半杯の牛乳と、コップ二杯のうどん粉と、小サジ一杯のソーダと、二個の鷄卵の白味とを取り、能く混和し、若し餘り堅ければ水を加へ、餘り柔らかなれば粉を加へて、花形に切り、直ちにストーブにて燒くべし。黑菓子のためには、砂糖の赤きと、鷄卵の黃味とを用ひて、同じ樣に燒くべし。

（三）生姜の菓子

小サジ一杯のソーダを、茶飲茶碗の中の熱湯にて溶かし、之に一合計りの水と、一合計りの砂糖と（望みによりて少量のバタと）生姜の絞り汁とを混和し、然る後、手にて捏得る丈けの堅さになる迄、うどん粉を入

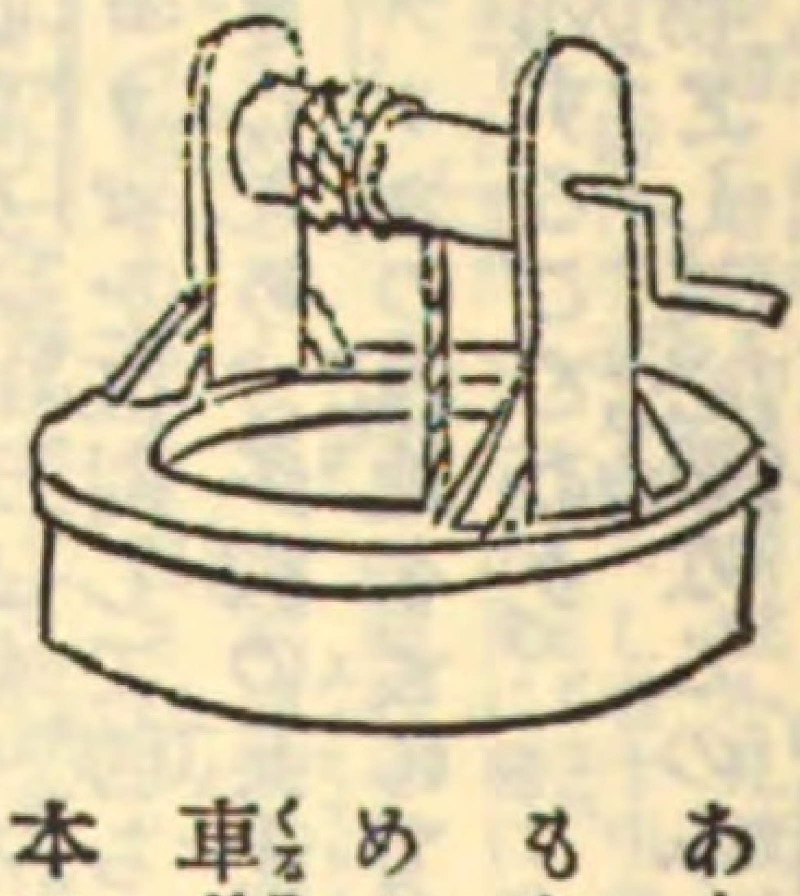
れ、能く捏ねたる後、板の上にて一二分の厚さに伸し方、圓、或は花の形に切り、ブリキに油をひきて燒くべし。

(四)菓子の氷掛け

何種の菓子にても、氷をかくとて、菓子の上を白くなさんと欲せば、鷄卵の白味の中へ、徐々に白砂糖を加へ、少量のレモン油を入れて、能く混和し、掛けんと欲する菓子の上に塗り、日光又はストーブにて乾かすべし。

井戸と釣瓶

米國の或る町にて、一年降雨の度毎に、數十の人死ありて、その原因久しく分明ならざりしが、醫者の盡力によりて、遂にその原因は、水にあることを見出だせり。そはその町の中央に、大なる骨粉製造所ありて、幾廻ともなく、骨を積み重ねをきたるが、氣候の變化により、骨に付きたる肉の腐敗して、降雨の度毎に、水と共に流れて、近邊の井水に浸入し、かくは毒害を流したるものなりき。大なる町にては數十の人々命を失する如きことあれども、一軒の家にても、井水の周圍を不潔になしをくときは、屢々惡しき病を發することあり。井戸にかきらず、凡て水は塵埃を吸集するの性あるが故に、桶瓶等に蓋をなさずして、汲みをきし水を飲用になすは、甚だ危險なり。



日本にての井戸の釣瓶には種々ありて、投げて汲むあり。竹の竿をつけて汲むあり。車にて汲むもあるが、上に示めせるは、西洋の車井戸にして、日本の井戸に比すれば、大に力を省ぶき、殊にこの頃の如き寒天には、水に浸たされたる繩、或は竹を持ちて曳き上ぐるの苦を省ぶくを得るが故に、臺所に働くものゝためには大に幸ひなるべし。

鹽の談

吾人の毎日用ゆる食塩は、如何にして得らるゝやと云

ふに、日本にては海水より充分に得らるべけれど、アフリカにては沙漠の中より得る所あり、アメリカの西部の州にては、『塩舐』と稱する大なる土地より之を取る也。その土地は、滿面塩を以て土地を覆われたるが、獸類の時々來りて、その塩を舐づるよりこの名あり。

エウロッパは塩の鑛山を以て有名なるが、その鑛山に二種ありて、一は岩の如き固形となりて出づるもの、一は塩水となりて出づるものなり。クラコーは世界第一の塩鑛にして、塩の出づる處、廣さ卅里、深かさ九百尺に亘たれり。その塩坑は深かき井戸の如くして、所々に入り口あり、さてその坑中を見んと欲する人は先づ坑夫の案內を受け、燭を點じ、繩にすがりて、六百尺計りの地中に下り、そこに他の入り口ありて、更らに三百尺の地中に下る。さてその下りし處は、如何なる樣なりやと云ふに、或は矢の如き、或は刀の如き、或は柱の如き、種々樣々の結晶をなしたる塩の、さながら水晶宮の如くに輝やき渡れり。その間を數匹の馬を以て曳きたる車、幾個となく東西に馳せ廻り、彼處には塩を以て作りたる禮拜堂あり、此處には鑛夫家族の住居する家屋ありて、市街をなし、地上の人の想像し得られざる美麗の都をなせり。

その處より取りたる塩は、多くの混和物あるが故に、直ちに食用に供せらるゝにあらず。一度沸騰せる塩水の中に投じて、混和物を溶解し、塵はすくひて去り、純粹の塩水のみ鍋にて沸騰せしめ、水分を去りて燒き塩となす。

佛蘭西の海濱には、所々に淺さき塩の溜り水ありて、太陽の熱のために塩水蒸發して、天然の塩の結晶をなす、其の塩をラグンと名づく。

さて塩の人躰に必要なるは云ふ迄もなけれども、かのスペイン人がフロリダを征討して勝ちを得しときに、城中食塩を欠きしため、多數の兵士病を得て死せることありき。アフリカの內地などにては、屢々食塩の欠乏するがため死することあり。

食塩はたゞに食物として必要なるのみならず、多くの製造品に欠くべからざる原料なり。類を擧ぐれば、先づ陶器の製造に必要なり。緋色は半ば塩にて造らる。ガラスの製造、石鹸の製造は、皆塩の力を籍らざるはなく、通常の洗濯ソーダも塩より製せられ、藥のコロリンも亦塩にて製せらる。塩は水分を吸集するの性質を有するが故に、もし濕氣ある所にをくときは、忽ち濕りて重くなるべければ、塩を貯ふるには、成るべく

高燥の所を撰むべし。

社交一斑

新年市中雜觀記　　衣笠

源氏初音の卷『年立ちかへるあしたの空の氣色、なごりなく曇らぬうらゝけさには、數ならぬ垣根の內だに雪間の艸、若やかに色づきそめ、いつしかとけしき立つ霞に木の芽も打ちけぶり、おのづから人の心ものびらかに見ゆるかし』。明治廿六年の初春は來りぬ、玆歲はわきて年立ちかへる朝の空麗らか、風枝を鳴さず塵地に起らず、未だ節分に程遠きも、寒强いて人に迫らず、めづらしき霞たちこめ、野山の草木も自づと若やぐやうなる天地の物色は、紫式部が石山寺に參籠し、脇息の側几帳の下に坐し、源氏五十四帖に筆意を籠めし幾世の昔時に變らねど、物移り星移り世は如何に變遷したりけるよ。予は玆に新年第一日市中を漫歩して得たる都の春景色を記して聊か流行の案內に替ゆるといふ。

門松と緑門

門松を始として七五三繩、橙、伊勢海老、干柿は古代よりの慣習として目出度都門各家の門戸に飾りつけられ松の綠翠增して深きも近年西洋より舶來せし「アーチ」といふ一時隆盛を極めし門飾は本年は目ッ切左手になりゆき、偶に貴樞の門邊、又は奇を好む商家に用ゐらるゝを見るのみ。

萬歲と鳥追と獅子

昔は素襖立烏帽子いかめしく『德若に御代萬歲と枝も榮ゐ、益々愛嬌ありける新玉』などゝ謠ひ初めたる萬歲も、今は大夫が姿は二子の衣物に松魚縞の袴とは見る影もなし、三河木綿を着たるはまだしもなり、四日市で高き給銀を貰ひし才藏も、今は木綿の頭巾、紺の股引とは是も情なし。『せりやうや萬兩、吾妻の方には酒井樣に榊原、井伊に本多の鳥追』は今那邊にかある、紺の股引を穿き、裾を端折り怪氣なる風躰を爲して門邊に彳むものは寔に彼れなり、萬歲も鳥追も德川全盛の頃とは如何に莫大の相違ならずや。獅子も東京は面白からず、豐作を當込み近在の田舍を廻りて錢を貰ふ算段なりと。

春衣

春衣の準備は前號の紙上に掲載せしが、愈々時は新歲の幕を切り落し、人々今日を晴と着飾る美衣新粧を見渡せば、さては未だ人事は全く春ならざりけむ、新に春衣を調へし者十中の一二、それさへ上等社會に行はれ、中等以下は新門せしもの洵に稀にて昨年の春衣が二度染を着用せしもの多かりし、而して時人の流行と好尙とは次第に古風に復り、洋風漸く衰頽の色をあらはしぬ、これ復古的流行の時節なり、予が雜觀したるものを先づ男子の部より記さむ。

禮服

「シルク ハット」を戴きたる官吏社會を除きては「フロクコート」を着用する者洵に稀なり、頸に淡鼠縮緬の襟卷を纏ひ絲織又は節米澤の上着に、黑七子の三紋、仙臺平の袴をさやつかせ行くもの、最も多く最も躰裁よく見受けられたり、黑一樂の羽織、綸一樂の着物も流行と聞つれども、予は不幸にして三四名の外は見當ざりし。新調にあらざる黑の羽二重、寳生、の羽織は流行の外に行はる。綾絹のお羽織、琥珀のお袴なんど着用の方もあらんが、是等は孰れも馬車中の殿樣なれば、予輩の平民には其委細を知るに由なし。

外套

外套は日本服の上に二重鳶形、色は淡茶、淡鼠の荒き格子縞、殊の外流行せり、但し新調にあらざるものは沙汰の限なり。

帶　品は博多、色は黑、茶、小豆、鼠黑、柄は縞なし、巾は一寸内外。

帽子　予が逢ふ人毎に帽子は大抵黑の山高なり、其他の色に余程注意したれども生憎新手は悉く黑なり、此様子にては黑九分九厘の勢なり。略帽には本年は縁廣き「ハット」と、畸形の「キヤツプ」とは目ッ切流行廢れ、盛に世に歡待せらるゝは例の鳥打帽子なり、其流行の新形は前號の通り前頭に襞と皺目をよせたるもの、品は多く濃紫、梅鼠色の天鵞絨類なり。

履物　洋服を着したる人の外は靴を履きたる人は稀に見る所なり、多くは南部表の堂島用ゐらる、鼻緒は種類多端にして甚だ分別し難かりしも鼠色多かりし、鹿革頭に用ゐられしならむ。

書生の扮装　十年一裘、寒暑一衣を改めざるは元是れ書生の本領なり。近年、書生社會はなまぬるき都の風に吹き染められ、春花秋月に花車風流の風俗を學ぶは慨歎すべきの至なり。善か惡か近來は兵兒帶癈れて角帶を用ゐ、ガラ〳〵と引ずり歩きし書生下駄は左手になりて、巾廣く丈低き「雨はぐり」と申すもの行はれぬ。

變生女子の退散　昨年の正月頃までは女用肩掛にくるりと包まり傲然として大道を來往するニヤケ紳士多かりしが、本年は幸にかゝる變生女子は一人も見當らず、又羽織に緋の裏、履物に天鵞絨の鼻緒をすげし優男も同斷なり。

二人綱曳車　以前は後押なりしが此新年には綱曳車洵に勇しき景氣なり、急ぎの向は兎も角、髯も未だ生へきれぬ小二才が、躰裁の爲に此風を習ふに至りては、申すも片腹痛き業なり、これも流行の一つとも申すべきか。

散髪の風　大低帽子を被り居れば、髪の体裁甚だ分明ならず、されど知己途に逢ひて互に『新年は』などゝ禮を施し帽を脱ぎ去る隙に、一寸瞥見すれば矢張當時行はるゝ「ジヨンブール」形など多く、前部の毛は一寸二三分後部は二三分襟元一分に苅り込み、七分三分に分けたり、これは是れ亞米利加風とぞ言ふなる。前部を短く平たく苅りたるものは佛蘭西風ならむ。髭は相變らず鼻下に八文字に植ね、大概は頤の髯を剃落し、而して八文字の髯尾も尖らず跳ねず、豊に口吻を蔽ふ獨乙風とかをタント見受けたり。

繻珍の帶に風通織　今春又は烏森邊に優形の男が風通織の一樂を着、唐草模様の繻珍の帶をしめ、黑の羽織をゾロリと着流して、ブラ〳〵漫歩するものは、蓋し芝居者か、華族の若殿様と察せられし。

可憐なる年始客　七八歳の小兒に山高の帽子を被せ、紋附の羽織、袴と神々しく扮装せ、腕車に乘せて父親又は阿兄の新年賀正の代務を爲さしむるは、是れ亦可憐の趣向ならずや。

紙鳶と獨樂の遊戲　予は本年多く市中に紙鳶と獨樂を玩ぶ小兒を見ず、街上の遊戲は査公の小言多きにや、又は家内に於て面白き遊戲法多きにや、予は其故を詳にせず。是より一轉して女人の扮裝を少しく筆下すべし。

縮緬の三枚重　雜觀中最も予の目を惹きしは江戸鼠及藍氣鼠の二色なり、而してフキ模様は年齢によりて美遊の差あれども、予は愈々此二色が流行の第一位と斷ずるに躊躇せざるべし、其の高尚なる點に於ては黑に如かざるべし、去りながら予が一日の遊觀中禮服として黑縮の紋附を着したる女姓を見ることは僅に指を僂むるに過ぎず。下着は假に鑑定を下すに由なきも無論三枚揃は立ち榮ねたれど多くは更紗縮緬なりし

が如し。市樂織も見受けたり、上着縞物も可なり流行せり。

襟 は勿論白壁チョロ、次に白綾、白綸子、白縮緬二枚襟、少しく奇を好む人には市樂なりし。

帯 は予習一々識別に苦めど令孃即ち妙齢の方には繻珍の丸帯及京錦等行はれたる如し、柄は種々なれども色は淡手の方なりし。令閨即ち中年以上には黒の西陣緞子の倶楔様行はれ繻子は今は下向となれり。

羽織 大低は黒縮緬なりし、小紋は新調らしきものには餘り見當らざりし。

書生羽織 不斷着に女の書生羽織は、昨年以往の如く甚だ盛ならず、これ此流行退潮の候なる乎。

黄八丈の大流行 徳用向か派手好か、本年は新年早々より黄八丈の大流行を見る、品は珍色の竪縞最も多く行はる、予が到る處には必らず此流行を見たりし。而して這般の流行は廣き區域に於て傳播せり、即ち中等社會より上下に通して行はるゝなり、着物に於て、羽織に於て、ドテラに於て、チンチコに於て、前垂に於て種々なる點に用ゐらる。又綺麗なる點よりするも黄八丈は、敢て他に讓る所なきを以てかゝる流行を見しものか。大低十五歳以下の少女又は少年に用ゐらる、男子の下谷にも弗々行はる。

果然被布の流行 予は豫て新年には美麗なる被布が可憐なる少女の身に着けらるゝならむと期したりしが果然被布は新年の大流行となりたり、黄八丈の流行に劣らず到る處眼に觸れざるはなかりき。予が飯倉片町を通行したる時、乳母に連れられし美麗なる被布着たる三人の少女を見たり、九歳ばかりの一人は黒縮緬のボカシ、裾模様は松島の景、七歳ばかりの少女は紅掛鼠に裾は松竹梅を面白く模様し、最も稚き少女は菊の亂咲の友禪染を着、孰れも燃ね立つばかりの緋又は萠黄の四房を附けたるは、蓋し新年第一の美觀なりし。

布子のフキ 小袖のフキの厚きは從來の流行なれども、木綿衣にしてフキの厚は今年始めて流行を見たり。中等以下の婦人のフキに見る布子(綿入)は大低六七分最も厚に至りては九分より一寸に至る。

ショール 男子には廢れたれども、婦人には益々此流行を見る。多くはテル地倶楔様、色は鼠、淡茶大部を占め、黒も行はる、駱駝毛織は目ツ切用ゐられず、これ其の重量のおむきが爲めに、羽織などを引きずらし襟元を亂すがゆゑ日本服には不適用なる爲ならむ。

髪の風 西洋的女學生若しくは基督教會に關係あると思はるゝ婦人を除きては皆悉く日本風に跋扈せられたり。令閨とも覚しき人には丸髷、處女には島田次は三輪、次は銀杏なり、十歳以下の少女には稚兒髷に結びたるもありし。惣して髪の結方は丸髷も島田も根高く、鬢張らず前髪おさなし。

ちらし髪 予は漫歩の途上新年早々不祥なる風俗を見たり凡は妙齢の處女が、長髪亂雑背なうたせたる姿なり。斯の如き怪物を目撃したること二三人、予は始は洗髪と思ひしに、新年の衣服を着け新年の扮裝を爲して人家に出入する所を見れば、彼等が一種の社會を學ぶと知るべし、良家の子女にして此風を爲すは、狂人の沙汰とも、風俗大亂の基ともいふべし。

櫛、笄、簪 櫛笄は品は分明ならざれども大低鼈甲地、中には卵甲製も下りて馬爪もタントあるべし。櫛は半京形廂に第一の流行なり、蒔繪のお初形も同斷、笄は小角形即ちアラレなり。島田には花付も流行し簪は蛙脚に相違あらざりしも、ピカピカするは純金か、鍍金多かるべし、玉は五分以上の珊瑚用ゐられ、其他の金銀寶石類は判別するに甚だ困難なりし銀の平打は流行の由なれども予は一人も見當らざりし。

根掛、手柄、掛物、タボ止め　これも種類多くして到底一々見分ること難儀なり、然し根掛は滅金の一文字多かりし、中には純金もあるべけれども眞偽わかちがたし、金消し彫付物、蒔繪したるもの、金銀寶玉を鏤めたるもの、其他管根掛、護謨製、珊瑚玉など種類多かりしも島田には金色六七分の一文字大流行なりし。手柄は海鼠絞、色は淡藤を多く見受けたり併し其他に銀鼠、肉色、濵淺黄等も流行の由なり、緋又は紅をあしらひしものもありたれども是は流行を知らざる向なり。掛物は紅掛紫の菅糸多かりし、友染を用ゐし處女も見受たり。タボ止は鋼鐵製の細きもの流行せり、何か模樣は知れされども金の象眼したるものを多く見たり。

少女の花簪　十五歲以下の少女の頭上には時ならぬ花の咲きけり、梅の千輪咲、菊、薔薇、松の綠、これ人造の花簪にて護謨製多かりし。

束髪　一般の社會には大不向、束髪を結ひし人にも網は悉く擲れたるにや、束髪に粒珊瑚を散せしもの一人も見ず。

履物　婦人は大抵車上なれば履物の注意に苦めり、履物通に聞けば、後丸、小町形の南部表最も流行し、意氣なる人には吾妻形用ゐられ、鼻緒の色は千歲、利久茶、鶸茶、藤紫流行し、緋天鵞絨も派手なる向に弗々行はるゝよし、女學生と雖も靴の流行曾てなし。

女風一般にヂミに傾きぬ　服裝の點よりするも東京の女風黑又は淡色を好むを見ればヂミに傾けり、然れども此ヂミといふ中には奢侈といふ一種の意味を含み居れば、敢て俄に賀すべき事ならず、たゞ本年は新年より「カルタ」などの遊仕度尠く、また頭に丸髷を戴きし婦女子が、街上に小兒と共に手毬又は羽根突の遊戲を爲すもの稀なるは、これ嘉すべし。

月下の遣羽子　時に故曆十四日に屬し、精華滿衙を照らす、都下の子女出でゝ、遣羽子の遊戲を爲す、其音戞々として夜陰に徹す、仰げば一輪の明月天に在り、光裔に依りて鏡の如く澄めり。

播種季節

東京近傍を標準として調査したるものなり

季節	種名	季節	種名	季節	種名
二月中旬	早茄	三月中旬	中て茄	三月下旬	西洋茄
三月下旬	西洋赤茄	二月下旬ヨリ三月上旬マデ	早胡瓜	三月下旬	中胡瓜
四月上旬	晩胡瓜	三月下旬	西洋胡瓜	同上	大南瓜
三月下旬	縮緬南瓜	同上	大冬瓜	同上	西洋南瓜
四月上旬	長瓢	同上	丸瓢	四月下旬ヨリ五月上旬マデ	西瓜

（學農社）

五月上旬	銀甜瓜	五月上旬ヨリ七月上旬マデ	早越瓜	五月中旬ヨリ六月中旬マデ	大越瓜
五月中旬ヨリ六月下旬マデ	大青瓜	同上	丸漬瓜	四月上旬	大瓢箪
四月下旬	甜瓜	二月下旬ヨリ三月上旬マデ	早蕃椒	同上	甘藍
二月下旬ヨリ三月上旬マデ	コールラビー	二月下旬ヨリ三月中旬マデ	ブロッコリー	二月下旬ヨリ三月上旬マデ	花椰菜
二月下旬ヨリ三月上旬マデ	漬菜	二月下旬ヨリ五月上旬マデ	細根大根	三月下旬	夏大根
三月下旬ヨリ八月下旬マデ	西洋廿日大根	八月中旬	練馬大根	八月中旬	尾張大根
八月中旬	丸尻練馬大根	同上	櫻島大根	三月下旬	無蔓早菜豆
三月下旬	藤豆	四月下旬ヨリ五月中旬マデ	十六豇豆	五月中旬	中晩豇豆
五月中旬	八房菜豆	五月下旬	無蔓黒菜豆	五月中旬	大刀豆
五月中旬	雁喰豆	三月下旬	紫蘇	三月中旬	料理菾
九月上旬ヨリ仝中旬マデ	長蕪	九月上旬ヨリ仝下旬マデ	小蕪	九月上旬ヨリ仝中旬マデ	天王子蕪
九月中旬ヨリ仝下旬マデ	三河島漬菜	九月下旬ヨリ十月中旬マデ	京菜	九月中旬ヨリ仝下旬マデ	唐菜
九月中旬ヨリ仝下旬マデ	體菜	同上	山東菜	十月上旬ヨリ仝下旬マデ	二年子大根
十月中旬ヨリ十一月上旬マデ	油菜	九月上旬	苣菜	九月下旬ヨリ十月中旬マデ	葉芥菜
十月上旬ヨリ十一月上旬マデ	小松菜	十月中旬ヨリ仝下旬マデ	菘菜	十月下旬	黄芥菜
十一月上旬	晩水菜	三月下旬	落花生	同上	甘薯
五月上旬	馬鈴薯	三月上旬	藍	三月下旬	早稲
四月上旬	中稲	四月中旬	晩稲	五月上旬	畠稲
三月下旬ヨリ四月上旬マデ	麻	三月下旬	早玉蜀黍	四月中旬	中玉蜀黍

時期	種類	時期	種類	時期	種類
四月下旬	晩玉蜀黍	三月下旬	箒蜀黍	六月上旬	黍
四月上旬	荏胡麻	四月下旬ヨリ五月上旬マデ	草綿	四月上旬	萆麻子
四月下旬ヨリ五月中旬マデ	青芋	仝上	九面芋	仝上	紫芋
五月上旬	早小豆	仝上	早大豆	仝上	胡麻
四月上旬ヨリ仝下旬マデ	松葉うど	三月下旬ヨリ四月中旬	西洋芹	六月中旬	粟
八月上旬ヨリ仝中旬マデ	秋蕎麥	十月中旬	小麥	十月中旬ヨリ十一月上旬マデ	大麥
十月中旬ヨリ十一月上旬マデ	裸麥	仝上	蠶豆	四月下旬ヨリ五月中旬マデ	西洋蠶豆
六月ヨリ八月マデ	西洋蠶豆	四月下旬ヨリ五月中旬マデ	西洋豌豆	十月中旬ヨリ十一月上旬マデ	豌豆
十月中旬	白豌豆	四月上旬ヨリ五月中旬マデ	梅田牛房	九月中旬ヨリ十月中旬マデ	夏牛房
三月下旬ヨリ五月上旬マデ	冬牛房	三月下旬ヨリ四月下旬マデ	冬太葱	三月下旬ヨリ四月下旬マデ	西洋玉葱
九月中	夏葱	十月中旬	紅花	十一月上旬	水水菜
三月上旬ヨリ五月下旬マデ	筒蒿	六月中旬ヨリ九月中旬マデ	薤	仝上	小葱
三月上旬ヨリ六月下旬マデ	西洋苣菜	五月中旬ヨリ七月中旬マデ	胡蘿蔔	三月下旬ヨリ四月中旬マデ	西洋胡蘿蔔

日用品物價　（一月十日）

◉白米　前號に掲載したる直段より其以來は差したる變動なく即ち今十日の直段は（圓に付）●一等白米九升六合●二等白米一斗●三等白米一斗六合●四等白米一斗一升三合●五等白米一斗二升一合て一等米に於て二合、二等米に於て二合、三等米に於て五合、四等米に於て七合、五等米に於て七合方の下落なり

◉雜穀　近來は大したる變動なかりし即ち大相場は（圓に付）●攝澤大豆一斗九升五合●御祀大豆二斗〇五合●下總大豆二斗●朝鮮釜山大豆二斗三升●南京大豆二斗二升八合●同青大豆二斗一升五合●常州大豆一斗九升八合●越後大豆二斗一升●本石大豆二斗一升六合●青柳大豆一斗八升五合●地廻並小豆一斗八升

◉醤油　歳暮在荷の著しく減少したる爲め新年の發立付に一樽に付き最上二三厘上等五厘中等以下は一二分方高直に建直に改正したれば小賣も隨て直段を引上げたり

◉炭並薪　歳暮より炭は非常に暴騰し近日に至りても又々上騰したり即ち小賣は●堅炭大俵一俵四十二三錢小俵二十五六錢●ドガマは大俵三十二錢小俵は十七錢薪も幾分か上高なり即ち一圓に付き堅木大把長尺十四五把雜木は二十把位

◉鹽　一圓に付大相場●赤穂三俵二分●大鹽三俵六分●本齋五俵二分●新齋五俵七分

◉油　は前報同様●石油一升十錢●種油一升二十三錢

雜錄

◎鳥、魚、野菜　山鳩、鴨、雀、玉子、鰤、鮭、鮒等は例年の如く寒前より稍一割方の騰貴にて山鳩は一羽に付十二錢より二十錢、鴨は五十錢より七十錢、雀は一錢ヶ厘、玉子は一粒に付一錢三厘より一錢七厘、鰤は一尺に付一圓四十錢より一圓六十錢、鮭は十五錢より二十錢、鮒は一升十三錢より廿錢にて甘露煮、昆布卷等には賣行頗る多しさいふ又野菜物は一月以來重詰おせチ等になすため賣行頗る多く留て拂底を告げたるため何れも一割方値上げをなせしが其相場は小松菜一把に付二錢五厘より三錢人參一本八厘より一錢五厘、牛蒡六厘より一錢三厘、獨活大束一把五錢より五錢五厘計り慈姑一升六錢より七錢、里芋五錢より五錢五厘、蓮根一本三錢より五錢等なりさ

遺珠顆々

限りなく人を樂ましむる音樂は靜和なる音樂なり最も香しき花は物靜かに謙れる花なり　ウオヅウオルス

過失は常に多言なり　ゴールドスミツス

或人は宗教を藥さなして用ふ宗教は食物さして用ふ可きなり　ゲーテー

貯蓄の話（二）

塵も積れば山さなり、坐して食へば山も空し、

一少年積次郎は初め富人富田懶惰齋の家僕さなりしが、身躰の小がらなるに似合はず萬事甲斐〻〻しく働き、流石の懶惰齋も氣に入りて、何事にも積や〻〻さ召び使ひき、

積次郎は曾て村の農談會にて人の貯蓄の話をするを聽き、感ずる所ありて其後二三日間何やらん頻りに考へしが、一日一個の竹筒を作り來りて已れが室の天井に懸せり、彼れは是より主人の許を受けて夜間仕事かにりし後、繩をなひ之を賣りて、日每に金二錢を其中に投入することを始めたるなり、而して月末に至れば之を取り出して其主人に預けき、

斯くして彼は其預けたる金高年末に至り元金のみにて七圓三拾錢あるを見出し、且つ已れの給金をも併せて主人に預け、一日も怠らずに數年を經ぬ、

然るに懶惰齋は日に酒を飮むを以て業さなし、衣服に奢りうか〻〻さ年を經しかば、所有の山林田畑も次第に少なくなり、遂には積次郎が預けたる金の積りて三百圓に近くなりたるをさへ返すこさ能はず、所有の田地若干を分ちて之を償ふに至りき、

爾來積次郎は其田地を以て獨立の生活をなせしが、常に竹筒を忘れずして、其後は之に日々十錢の銀貨を投しぬ、

此くの如くにして春過ぎ秋來り、懶惰齋は自活する事さへも叶はぬまでに零落しけるが、之に引かへ積次郎は一個の富人さなり、懶惰齋は遂に其家に寄食して餘年を送るに至りしさ云ふ、

此一話以て貯蓄の如何に貴ぶべきものなるかを知らしめて餘りありあるべし、

讀者よ、諸君も亦貯蓄に心あらばこれには數多のよき便りあるなり、請ふ下に述ふる所を見よ、

郵便貯金

貯金は信用が第一にて信用なき所には如何に割合よくさも誰れ預入るゝものあらざるべし、然るに郵便貯金は遞信大臣の管理する所なれば其信用すべきは勿論なり、

而して其貯金の法は

一人一度の預金十錢以上とし一人一日五十圓以下なり、且つ預金總額元利合せて五百圓に超ることは出來ず、
利子は廿四年一月より一ヶ年元金百分の四分二厘にて毎年三月卅一日を期とし之を元金に加ふ、
拂戻は預け人の請求次第何時にても全額なりとも幾分なりとも請取り得べく、又其幾分を以て公債證書の購入保管を請ふことも出來るなり、
而して預入手續は預入をなさんとする者まづ貯金を取扱ふ郵便電信局又は郵便貯金預所に到り、貯金預入申込書用紙を申受け、式の如く之に記入し、記名調印の上、其局所に差出し、通帳を受取るべし、
已に通帳を請取らば其通帳に氏名住居所身分職業を記入し、且捺印の部へ捺印し、之を預け金と共にその居所の主務者に差出し、預け金の記入を受けて所持するなり、再度以後は其所持せる通帳に預金を添へ直に記入を受くれは可、
而して預け人は一の貯金取扱所に預け金をなせし通帳にて、他の貯金取扱所にて預け入れをなす事も出來べし。
又拂戻を請はんとする時は何れの取扱所にても之をなし得べく、其手續はまづ其取扱所にて拂戻請求書用紙を申受け、之に金額及び拂戻金を請取らんと欲する局名其他式の如く記入し、記名調印して通帳を添へ之を差出し、通帳受取證書を受取るべし、然る時は取扱所は五日以内に拂戻證書を送り來るなり、請取人は即ち之に記名調印し、通帳受取證書と共に持ち行き金額を受取るべし、又全額請取りし時にあらざれば通帳の返戻を受くるなり、
其他委しき規則手續は郵便貯金條例及び郵便貯金條例施行細則等を參觀すべし、今一々叙せず、

家庭小話

其三



明くれば麗らかなる日曜日。太郎は、昨日父と約束せし如く、平時よりも早く起出で、己れの室及び庭前を掃事しける。朝餉を了はりて後、姉と共に書林に行きて、昨夜夢に迄で見たりし字書を購ひ歸りぬ。太郎、其後少しも怠りなく學事に勵ば、語學の進歩は非常なりき。幾十日の後の事、太郎父の傍らに座り、さきに求めし字書を膝の上に置きて、扨て語る樣『父上よ、如何なれば、斯く迄でに便利なるぞ。見は、此の字書を得て後は、語學の力の餘程進みし如く自ら覺ゆ』。父は其時、字書を手に取りて、太郎に問はるゝ樣『太郎よ、左程便利有益なる字書を誰れが造りしぞ。太郎は『何某と云ふ、學者が造りし』と答ふ。『此の表紙も紙も皆な、學者が造りしか』と問

へは、笑ふて『否』と叫ぶ。
父は、徐ろに說き出して曰く、『然り、此の一個の字書と雖も、實に、幾人かの人間が、各其の職を守りて、力を盡し、汗を絞り、心を苦めて勉めし結果なり。農夫が造りし者は紙の原料となる。農夫は如何にして造りしか。朝は星を戴て野に働き、夕は月光を蹈んで歸る。只だ、誠實に勉めしなり。思ふに、其の造りし綿が衣服となり、衣服が古びてぼろとなり、ぼろ買はれて、紙となり、紙刷られて此の字書となりし事の先々までは、思はざりしならん。只だ々々渠等は、己れの職分をかたく守り、力の程を盡せしのみ。盡せし力は集りて此の字書となり、此の字書は幾多の智識を此の世に撒く、撒かれし種は、來る可き世に其の果實を結ぶ。斯くして此の人間社會は進み行き、榮へ行く也。人間生れて此の人間仲間に來り、百年の生命を此の天地の間に寄す、要は、誠實に働くのみ。其のうちに意味あり、希望あり、幸福あり。職業の如何は人間を品定する者にあらず、職業は、其の人の天稟と、其の人の境遇と其の人の敎育とに由りて定まる。人間本來の價値は只だ誠僞勤惰に由りて決す。吾家の源二は只だ吾家の田畠を耕作なすの外に何事もなし能はず、然かれど、渠は僞らず、怠らず、渠は なまけたる王公將相よりも貴し。渠は、誠實と勞作とに由りて、天地の間に、何者をも恐れず、何者をも憚らず獨立する幸福者なり。神は、誠實と勞作とを經緯して、天國を造り給ふ、其の國に居む人間は王冠よりも貴き寶物の所有者にして、眞に自由の民なり。父は、太郎が行末如何なる事業をなすにせよ、此の國の一平民たる事を祈りてをかず。父は、此の字書より、いつはり、なまけ、の二字をけづりたし』。
此の父が、をりを見、機に投じて、己れの愛する小兒を敎へ導くと、常に此の如くなりし。

阿孃の獨語

進天堂譯

ほんとうに如何しやうかしらん！　こんなに難儀な事はありはしない。
お末はあんばいが惡いッて臥て居るし、おろくはお頭へ腫起をこしらへてあんなに機嫌が惡いし、お鈴は新らしい、いゝ前掛を破ッちまつて…ほんとうに

氣が利かないねエ。何です德之介は、かういたづらては私がちッとも目を離すことが出來はしないワ、そして赤ちやんは齒が痛いてこんなに泣くし、

ほんとうに如何しやうかと思ふよ。家内の始末をつけるのは：：：ア、辛い〳〵！



時事一斑

明治廿六年

嗚呼、明治廿六年は新なる面目を以て來れり。吾人は笑顏を開て之を迎へんと欲す。

願ふに一時狼の如く狂ひまはりし保守的反動の寒威も、今は端りなく和暄なる進歩的淑氣の一陽來復するに逢ひ、學校は引きしまりぬ、社會は自ら省みぬ、世は勢力蓄積の時となりぬ。陽春布ニ德澤ニ萬物生ニ光輝ヿを見る、亦恐くは遠きにあらさるべし。

多望なる明治廿六年よ、幸福なる進歩の旅よ、願くは讀者と共に此の樂しき陽春の都入を忩がん。

『あらたまの年たちかへるあしたより、侍たるゝものは鶯の聲』。嗚呼、新氣運の鶯の聲！

一月二十三日

一月二十三日は吾人が忘れんと欲して忘るゝ能はさるの日なり。新日本の偉人新島襄氏は實に此日を以て其籍を天國に移しき。大礒濤頭の波、若王寺畔の松風、世に音絶ゆる日はあらじ。

北里柴三郎氏

有名なるロベルト、コッホ氏が黴菌學上の發明を助け、日本科學の光耀を世界に發揮したる北里柴三郎氏は、頃者日本政府の贈與せる勳三等の榮章を受けたり。西日本、阿蘇山の陰、北里村と稱する一寒村は、實に此貴ふべき學者を出したる地にして、氏は明治十五年に醫學士の稱を得て大學を出でしより、十八年に獨逸に



遊び、刻苦精思するもの六春秋、伯林都下、コッホ氏の傍、彼は竟に彼れ自らを世界の榮譽ある發明家として見出すに至りき。芝公園御成門側、『傳染病研究所』てふ門標は、如何に彼が既往の功績を紀念するよ。又如何に彼が將來の希望を表章するよ。

姦通に關する刑法民法の改正請願書は横井時雄氏の姉たま子外三百三十八名より衆議院に提出せられしが、委員會は之を院議に附せざることゝなしぬ。之が贊成者たる星衆議院議長夫人の如き、爲めに二百圓の運動費を寄贈したり。

行樂

ヒュー／＼として軟かなる髪を其可愛ゆき頬に吹き掛くる風をも厭はず、『一夜明ければ賑かで』と歌ひし小孃の待ちたるに愆たず、彼女等が幸福なる新年は來りき。おかざり立てたる松飾りに映らふ日影も長閑けく、追羽子に袖翻へしかけり廻るは蝶鳥の花散る樣にも似かよへど、春の恨を知ぬ乙女子の無邪氣さ。『新年』てふ樂しき神は如何に輕く彼女等が頭上を舞ふよ。





まだ冬枯の野邊には其處此處に春を點せる小童の姿、『上れ！〳〵！』とはめきつゝ心を紙鳶と共に天外に飛ばせ、日下の鶴も其高さを爭ふめり。彼等が紙鳶絲を掴みて岡上に突ッ立てる時は、眉昂り氣舒び、恰も戰國の勇士が敵の大將を誡りて顧眄する狀に似たり。磯の松風は齊しく喝采すらく『あはれ新國民よ』。

勉むる時はよく勉むべし、遊ぶ時はよく遊ぶべし、此處の小路の一群れ、彼方の巷の一隊、彼等は寒さも知らず風吹くをも知らず、鬼ごッこするあり、獨樂をまはすあり。學校は休みなり下讀みの心配なし、此日を遊ばずんば一年一度の新年を奈何。

去れども斯る樂しき新年ははや十有五日となりぬ、戶內的の遊びを好む人々が事とせし夜々のかるた遊びも今は一とまはり濟みつらむ。今の若盛りを炬燵にばかりへばりつき居る弱蟲共は知らず、勇悍なる我黨の小健兒は來れ、我れ爾と積雪を沒する愉快なる朝を卜して郊外に會戰せんと欲するなり。

滿目限りなし皚々たる世界、雪を壘となし雪を丸となし、虛實進退相攻守せば如何に壯快なるべきぞ。

紀貫之歌ふらく『霞たち木のめも春の雪降れば花なき里も花ぞ散りける』と。實に雪の降れるは花の散れるにも似たらんかし。其ながめの面白きこと花にも勝りつべし春にも超へつべし、冬



にして寒からずば、雪にして匂ひあらば。

去り去て觀よ、雪は冷たけれども以て情を温むるに足る。郞や姉や柔櫓咿軋隅田の流を遡らん乎、未だ必ずしも花下の逍遙に劣るべくはあらじ。

雪見の好所は、隅田堤。忍が岡。日暮里。飛鳥山。湯

島天神。神田明神。御茶水。目白臺。九段。愛宕山。
左れども幸福なる雪見の客は、同時に世の憫むべき雪に泣く人を想はざるべからず。時に感じては花にも涙を濺ぐの人々よ、喜びの反面は悲なり、快樂の後には苦痛あり。



昔者俳人西島の妻は夫の雪夜に小奴を伴ふて俳筵に趣かんとするを止めて、『我子ならともにはやらじ夜の雪』と云へり。某貴人は哀れなる酒舗の下男を見て、『雪の日やあれも人の子樽ひろひ』と吟じき。

而して今より此月に於て人の賑ふは十六日、薮入前日の如く賽日と稱して各所の閻魔大王の祭日なり、其最も賑ふ所は新宿大宗寺、藏前華德院本所回向院。

十八日は二の卯、初観音。淺草寺、橋場の長昌寺、駒込の大觀音等人出あり。

廿日は是れ二十日正月、商家の若恵比須。

河崎の初大師は二十一日なり、新橋より臨時滊車出づべし、雜沓重ねて雜沓。

廿三日の初庚申には柴又の帝釋天賑ひ、廿四日の初清正公初地藏には白金の清正公、西河岸三田の地藏賑ふ。

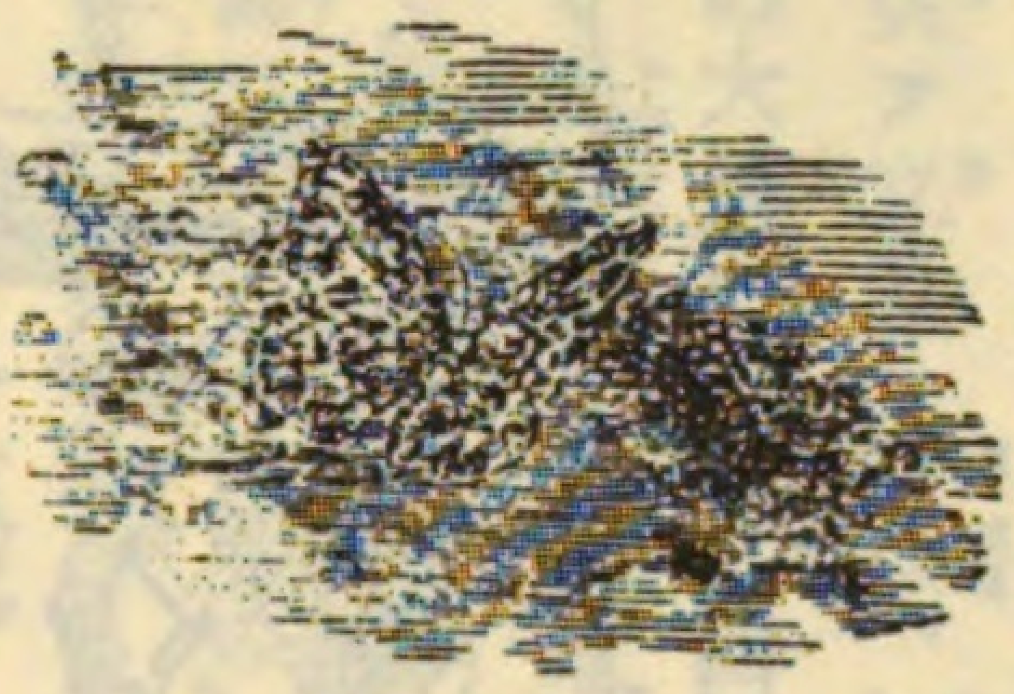
廿四五日は龜戸天神の鷽かへ。

廿七日は初甲子、傳通院土富店蓮光寺の大黑。

廿八日は深川、藥研堀其他の不動尊の初緣日。

三十日は孝明天皇祭なり。又三の卯なり。

而して此等は所謂俗客多きの處。故に若し靜に高趣を掬ばんと思ふ人は、如かず本所四ツ目の植文、然らざれば駒込巢鴨邊の植木屋、然らされば淺草公園の花屋敷をおとづれんには。一點の春色盆梅に在り。




吾人は我が讀者の幸福なる新年を迎へたるを慶びこゝに新なる面目を以て相見るを得るの多幸を感謝す

明治二十六年一月

民友社員

國民新聞社員

家庭雜誌社員



家庭雜誌新年大附錄



池田子尾子

蘇峯生

思ひ出すも涙の種子なり。彼女の爲めに筆を揮らんとしたる幾回ぞ、遂に果さす、果さゝるは、情に於て忍ひされは。歲月は奔るか如く、彼女の三週期も、眼前に迫りぬ。今にして記する所なくんは、彼女の淸き記念も、或は時の爲めに打ち消されむ。

◎ ◎ ◎ ◎ ◎ ◎ ◎ ◎

顧みれは早や六年前の事。余か一家の熊本より東京に移轉せんとするや、池田某の孃、余の親戚を介して、同行せんとを請ふ。余惟らく一家を挈ふ、既にその煩に堪へず、まして他家の孃を伴ふをや。且つ壯年血氣の男兒すら、動もすれはその立志の堅確ならさるか爲めに、遊學の中途にして躓くもの往々是れあり、况んや年少女子に於てをや。若し漫にその請を容れんか、或は彼人の子を賊ふに到るやもしる可らすと。故に辭せり、屢は請ふも、固く辭せり。切に辭せり。

明治十九年十二月二日、愈々明日より出立と定りぬ。客は門に滿ち、行李は室に溢る。余は四五の友人と書齋にありて、行く末の事抔打ち語り、狼藉たる書冊を整頓しつゝあり、折りしも冬の短かき日脚は簷端の橘に映ずる頃、家人來り報して曰く、嘗て同行を請ひし池田某の孃、余に面會を求むと。余は驚けり、聞きし所によれは彼女の家は阿蘇郡にあり、熊本を去る近くとも十里に餘れり、然るに自から出て來るとは。余は

怪めり、斯程に辭したるに、餘りと云へは押の强さに。余は嚴然として家人に諗けたり、『取込み中なれは面會は勿論御斷り致す、同行の儀も固く相斷る』と。斯くは言ひしもの丶余は不思議の念に打たれて、家人に向てその樣子を問へり、家人は『男性とも女性とも見分けのつかぬ容態』と答へぬ。余は再ひ不思議の念に打たれぬ。イサ一寸試みに面會せん、案内し給へと。

余か書齋を出て丶坐敷に＝八疊の板の間に三疊の疊を敷きたる＝入りし時には、不思議の幻像たる新客は、既に坐に就き居れり。彼女は五分刈の短髮に、紺の手織木綿の羽織を着し、紙捻りを以て之を胸邊に押しつめ結ひ、堅縞の木綿袷衣を纒ひ、白木綿の三尺帶をくる〳〵と巻き附け、手織碁盤縞の襯衣をは釦もて襟元と兩袖とを緊へり。余は實に驚きぬ、余若しその先容なくんは、余は確に男子と認めたらむ。

『貴孃の名は』『池田子尾』、余は手帳を出して之を書き止めたり。〔余は頃ろ手帳を翻したるに、彼女の名は、鉛筆にてあり〳〵と現れぬ〕『貴孃は日本外史を讀みしか』『十八史略は讀めり、外史も少しはかりは』『何の爲めに東京に行かんとする』『學問せんか爲めに』問答は僅かに五分乃至七分位かと覺ゆ。余はその容貌を熟視せり、余は何となく底氣味惡く感せり、併しなからその眸子の何となく眞摯なるか如く、その脣の何となく決然たる意思を示すか如きを見、左の如く云へり『兎も角も御同伴致す可し、明日某時に上代村竹崎氏宅にて御待ち合せあれ』と。竹崎氏は余の伯母の家にして、余等か乘船す可き百貫石港の中途に在り。約束は整ふたり、彼女は辭し去れり、余は玄關迄見送れり、彼女は實に紺足袋を穿ちたり、彼女は方形の足駄を着けたり。その後影を見れは、愈々以て宛然たる男子なりき。

余は不思議の念、愈々募れり。明日竹崎氏に到れは、彼女は小行李を携へ、既に先つ在り。

百貫石港より長崎に、長崎より神戸に、神戸より横濱に、遂に余か一行は十二月十日東京に着したり。而して此の旅行中にて、不思議の念は寧ろ加はれり。何となれば彼女は默然として問はざれば答へず、言はざれば語らざるが故に。長崎にて家人彼女を伴ひ、會堂に赴き婦人席に坐せんとしたるに、會堂の執事は、彼女を麾きて『足下は彼方にと』男子席を指させり。長崎より數十の教導團志願生徒と同船しけるに、彼等彼女の風采を怪み、或は男子なり、或は女子なりと評し、無聊の餘り互に相ひ賭して、彼女の眞相を判せんと欲し、交も彼女の前に來り凝視したりき。彼女は泰然毫も意に介せざるが如し。

横濱に上陸してよりはせめて女らしかれとて、余か家人の羽織を着けしめたり、併し羽織丈は女性なれどもその餘は皆な男性なりき。

斯くて彼女は余か一家と共に、明治二十年の新歳を靈南坂の僑居に迎へたりき。

彼女か恐ろしき程眞面目なると、恐ろしき程膽氣あると、恐ろしき程親切なると、遠慮勝ちたると、思ひ込んだるとは、頑固なる程立て通すと、良心の刺激甚だ敏捷痛楚にして、善を善し惡を惡むの心甚だ鋭きと、總て此等の特質は略ゝ家族的生活の間に解し得たり。』

抑も彼女は何者ぞ、如何なる志あればかくして東京に來れる、彼女が余の母上、及び家人に語りし一斑を記すれば左の如し。

彼女は元治元年二月二十日、肥後國阿蘇郡山西村に生る、父は池田東園とて古式の洋醫にして、和蘭の文典位は、かしり讀みしたるとありと云ふ。彼女が十歳の時母を亡ひ、伯母に鞠養せられ、幼少より機工裁縫に精勵し、家族の衣服に欠乏を生せしめず、而して間を偸み、同村の竹崎政長に就て學ぶ。弟一人あり、熊本の某校に在り、子尾子彼をして東京に遊學し、大に家

を興さしめんと欲し、衣服調度を整ふに心身を竭せり、準備全く成るの日、弟肺を病んで沒す。彼女十年の苦心空となる、此に於て自から亡弟に代りその素志を遂けんと欲し、爾來一層家事に盡瘁し、深更人靜かなるの後、更らに燭を挑けて讀書す。居村に天滿宮あり、その社山の半腹に在り、彼女毎月幾回、參籠通夜し、學問上達を祈願し、敢て人に知らしめず。既にして家事稍く寛、子尾子父に向て東京に遊學せんとを請ふ、父容さず、此に於て斷然決する所あり、遂にその髮を絶つ、父その志の奪ふ可らざるを見て、泣て之を容す。此に於て家事を經紀し、父をして繼室を迎へしめ、後顧の憂なきを期し、將に東京に出てんとす、偶ま余等一家の東京に行かんとするを聞き、遂に同行するに到りしなりと。

余が不思議も、遂に解たり、今は彼女をしてその志を達せしめんとする同情の外はあらざりき。かくて彼女は二十年一月の中旬より櫻井女學校に入りて英學を修め、傍ら看護婦科を學べり。彼女が如何に僻村に生長したるかは、その十八史略を讀み得るに係らず、『歌かるた』の何物たるを解せざりしを以て知る可し。彼女は余が家人に語れり、『學校に入りて一ヶ月間は、言葉の分らぬのに泣き升した』と。

その頃の事と覺ゆ、彼女は休暇毎に余が家に來り、余が家に來る毎に、必らず何か手土產を持ち來れり。母上彼女を戒めて給はく『書生たるもの丶左樣なる事をなすは、甚だ心得違にあらずや』と。或る日家人戸棚を開きたるに、その隅より蜜柑幾個となく出て來れり、母上は給へり『池田さんか、愧しものだから、此處に入れ行けり』と。やり度くはあるし、やるには氣の毒、遂に斯くなしつるなり。而して彼女の余が家に來るや、毎に早朝にして、朝餐の前にあり、家人彼女の爲めに膳を備れば、彼女は袂よりパンの片を取り出し、是れ

にて澤山なりと云へり。而して二十年十月より帝國大學第一醫院にて看護婦科を專修し、二十一年十月全科卒業せり。

彼女の櫻井女學校にあるや、基督敎に付て聞く所多かりしと雖、未だ猝かに之を信ぜず、嘗てその親友に語りて曰く『心にもなき祈禱に頭を低け居る時には、何となく、眠たくなる』と。然れども上帝を信ぜざれば、斯身を天地に繋ぐに心細しとて、遂に二十年八月に洗禮を受けたり。その科業に趁はるゝ身にてありながら、彼女は作文を學ひたしとて、余に就て質す所鮮からざりき、而して彼女は余が家に來る每に必らず何にかの手傳をなし行かんとせり。

彼女親友あり、廣瀨梅子と云ふ、余梅子に就て彼女の事を聞く、曰く彼女は事に當るに際しては、再思三思せり、然れども一たび決するや他人の毀譽に頓着せず、一意貫徹せり。曰く人の爲めにするに勇、余嘗て故あり敎師の驩心を破れり、彼女は余が爲めに百方周旋し、之を補綴し、而して事若し整はずんば、その學資を分て余を助けんとせし、而して更らに余をして與かり聞かしめずと。曰く彼女の如き眞個に義人と云ふ可し、彼女の如き眞個に獻身的精神あるものと云ふ可しと。その欠點を問ふ、曰く不規則なり、不攝養なり、不整頓なりと。左もある可き筈なり、彼女は母なくして生長せり、彼女は二十歲を超る迄は、閑雅なる敎養を受けたるとなかりき、彼女は金錢を見ると泥土の如く、その乏しき學資さへ他の爲めに擲つを顧みさりし。

彼女は如何に純孝なりしか、故鄕の父は固より、その亡き母の事迄も、涙を浮へて語り出てぬ。彼女は云へり『父上深く酒を嗜み醉臥し給ふに拘らす、深夜早晩病客の門を叩く每に、母上は自から處方調劑し給へり』と、然らは彼の母は尋常人にてあらさりしなる可し。

彼女の學友大關和子は、余か爲めに語れり、彼女は故

鄕の老親を慰むるに深く心を用ひたり、その公園若しくは勝地に遊び、碑文杯あるを見れは、直ちに之を謄寫して父に送れりと。彼女の友誼に敦かりしは、彼女交遊間の評判なりき、他の過を見れは忠告訓戒、結くに熱涙を以てせり。

冒險は彼女の特色の一なりき、七八歲の頃にやありけむ、溪川の水溢れぬはかりなるに、獨り向岸に渡らんと欲し、他人の呵止するを顧りみす、裳を挂けて之を横きり、遂に溺れ死せんとしたるとありき。彼女の故鄕にあるや、嘗て夜行阿蘇山を攀ちたるとありと。その聲を聞けは、柔和にして草にも心を置くもの丶如く、且つ稠人廣坐の中杯にては、屏息低頭謂ふ能はさるもの丶如かりしに係らす、その大膽不敵なる、實に驚く可きものありき。その學友人に語りて曰く『池田さんは怖ひ人だ、斬ると云へは眞實に斬り兼ねぬ人だ』と。然れとも彼女は到底婦人なり、若しモルレー氏かマルチノー孃を許したる語を假り來らは、婦人らしき仕方に於て、丈夫の心膽を有したるもの歟。

話頭一轉彼女の帝國大學に於て看護婦科を卒業するや彼女は第一醫院に奉職せり、彼女は看護婦は、眞に人の苦痛を濟ふ獻身的の仕事たるを會得し、熱心之に從事せり、彼女は虛弱にして身ら善病と雖も、患者の看護には、徹夜をも厭はざりき。而して彼女が第一醫院に奉職したるは、大にその弊風を革新せんと欲したれば也。凡そ病院に於ては、親切を買ふには賄賂を以てせざる可らず、彼女は痛く此の弊風を革めんとせり、看護婦の第一義は、最も親切なる心腸と、清淨なる品行とに在り、彼女は第一醫院に向て、その摸型を作らんと欲したり。嗟呼事意の如くならず。

二十二年一月彼女は看護婦の職を辭して再び榎坂町なる余が家に來り寓せり。大學醫院長宇野朗氏は、懇ろにその留任を勸めたり、その同學友の如きは、力を盡

して之を留めたり、余の如きも理を盡して留めたり、彼女は屡は此事を余が一家に諮らんと欲して來れり、然れども言ひ出し得ずして空還したると幾回なるを知らず。遂に止む可きにあらざれば思ひ切りて云ひ出しぬ、既に云ひ出してよりは、千人の余あるも彼女の心を轉するに由なし。彼女は何故に大學醫院を出てたる、その弊風のとても隻手にて回す可らず、而して一日も爲す所なくしてその中に居るは、その身を汚かすが如き感あるものその一。而して社會嬌風の業たる區々一病院に止らず、大處より着手せんと欲したるその最も重なる一たりしなる可し。彼女は天成の革新家なりき、他人の苦痛を見る、恰も身自からの苦痛に罹るか如し。その故郷に在りし時、幾度か熊本なる二本樹の貸坐敷に駈け出し、娼妓に向て正業に就かんとを勸説せんとしたるとあり、現にその近傍の婦女に對し、不品行のものあれは、嚴責温諭、餘力を剰すとなかりしと云ふ。亦た以てその素志の存する所を見る可し。されは彼女か東京に來るや、喜んで婦人嬌風會に加入したり、是れ實に彼女か希望を實行するの着手として。その一夫一婦の建白の如きは、寢食を忘れて周旋奔走せり。

斯くて余か家に寓してよりは、漢學を父君に、英學を隣家湯淺氏の姉君に學ひたり、彼女は余か家人と姉妹の如く何事となく打ち談し、勉學に餘念なかりき。彼女は志望大なりしも、學才は中人以上に出てす、然れとも有爲の氣象は、彼女をしてその短かき學才に勝たしめたり。余か當世の得失を談し、四方山の噂をなすや、彼女は默然として之を聳聽せり、果して會する所ありし耶、否耶。彼女の遠慮勝なる、更らに語る所なかりき。彼女は未た直接に余に向て語る所なし、その聞かんと欲する所、語らんと欲する所、必らす先つ余か家人を介して之を余に達せり、故に余は彼女に就て、

深く知る所なし。然れども彼女は甞て話の序に云へり、『毛絲細工杯は、ツマらぬものなり、その毛絲も外品なれは』と。二十二年條約改正論の熾なるや、彼女は余か家人に語りて曰く『私は內地雜居には反對なり、何となれは外人か日本の土地を買ひ〆れは』と、蓋し一種の古風なる愛國心は、深く彼女の腦裏に印したるもの歟。

二十二年の春、子尾子の余か家に來り寓すると同時に、余は熊本に歸り親戚三村氏に寓せり、而して子尾子の父池田東園は、之を聞き余に面會せんとて熊本に來り、余が寓を音信れたり、余の匆忙多事なる、僅かに彼と寒暄を叙するに過ぎざりき。然れども余は斯の頽然たる老翁の顏上に描かれたる深き意味を了解せり、彼は實に子尾子の前途に掛念せり、而して之を以て余に托したる也。

余が熊本より加隈藤本二家の孃を伴ひ來るや、子尾子は此の二孃と共に隣家なる湯淺氏幼稚園の一室に寓し日夜勉學せり、彼女は英學、漢學、作文の外、更らに速記術を學べり。余は追々と社務多忙となり、轉た子尾子と日夕相語るの機會を少くせり、然れども彼女が成立を祈るの念は、彼女の清廉潔皎にして半點だも鄙吝の情なく、而して遠慮勝ちなる外皮に、豪膽邁往の氣を包むを知るに就けて、愈〻增加せり。余は中心竊かに思へり、余が交友中にも彼女程賴母敷ものは、多くあらじと。

二十二年十一月の頃にやあらん、彼女は浴湯せんか爲めに、余が家に來れり、余偶ま家に在り、晩餐既に了す、快談幾時なるを知らず、彼女は冷氣のその身を襲ふを知らず、之を聳聽せり。而して此れよりして彼女は風邪の心地とて打ち臥しぬ。當初には左程とは思はざりき、然れども熱は增〳〵騰上し來れり、余が家人の彼女を見舞ふや、彼女はその手を出して曰く『モーいけ

ませぬ、今度は急性腹室扶斯であり升すから』と。余が家人と共に見舞ふたる時は、彼女は既に病熱に浮されたり、彼女は云へり、『御覧なされ、柿の實が袂よりコロ〳〵出て仕舞ひ升』と。嗚呼清廖なる彼女の孤魂は既に飛んで、故山の秋に在り、その前后の語路よりすれば、彼女は既に煢々たる老親の傍に在り、その最愛の弟と戯れたる柿樹の下に在るなり、余は覺へず泣けり。彼女は毫も之れを知らざりき、最早彼女は無邪氣なる少女となれり。

命運は彼女を再ひ第一醫院に導きぬ、彼女はその醫師よりも、看護婦よりも、嘗て非常なる敬愛を博したるもの、加ふるに看護婦取締、鈴木雅子、大關和子の如きは、皆な櫻井女學校以來の同學生なれは、彼女の看護手當等には、固より剩す所なく盡したりき。然も余か母上の如きは、晝夜宿直して看護に餘念なかりき。十二月は半になれり、然れとも彼女の病は未た頂上を下らす、人々危殆を懷けり、電信もて故郷の老親に報せり、老親よりは何分然る可く頼むと返事來れり。明治二十三年は來れり、然れとも恢復の期は未た來らす當時余は國民新聞の創設に取り紛れ屢は見舞ふとを怠れり、實に心ならすも。然れとも餘り心元なきを以て、一月の中旬彼女を第一醫院に見舞へり、彼女の形容は瘦せ細りて見る影もあらさりき、唯た其眼のキラ〳〵したると、顴骨の秀てたると僅かに當時の面影を止むるのみ、彼女は純白なる寢布に純白なる上衣を蔽ひ、仰ひて臥せり、つく〳〵と余を見て、いと微なる音にて『難有ふ』と云ひ更らに『國會はモー開けますか』と。余は涙を飮んで還れり、余か大學の赤門を出る時には、幾度か 冷なる大息を漏らせり、思ひ出たせは今たに栗然として身の毛立つ。

一月二十日は新島先生危篤の報、大磯より急電達せり、二十三日午後二時十五分先生永眠迄は、殆んど彼女の

事を思ふ遑あらさりき。既にして二十四日、先生の柩と西東に別れ、茫然精神的半死人として東京に歸るや余が心經は先つ彼女に向て動けり。嗟呼彼女は既に骸骨となりて湯淺氏に歸り居れり。

母上は余が爲めに泣きつゝ語り給へり、彼女の死せんとするや『嗟呼モー大分近くなりた、歸ふ歸ふ』と、母上は『何處に歸るの』と問ひ給へり、彼女は『山西』にと答へたり。彼女は死する迄その知覺を失はさりし、その傍にあるものを指して誰れかと問ひしに『あれは德富のお婆さん、これは鈴木さん』と呼へり、蓋し母上と鈴木雅子とは臨終の際その傍に侍したれは也。最早息の音絶たんとするや、彼女は『父上』『母上』と呼へり、余の母上は『お父さんもお母さんも皆な此處に來て居り升』と給へり、而して彼女は再ひ言ふ所なく靜かに永き眠に入れりと。時に二十三日午後七時なりと。

二十五日午後二時より靈南坂會堂に於て葬式を執行せり、余は彼女の略歴を陳へたり、余は云へり、余は日本に於ける一の偉人を記念する每に、彼女を想起せすんはあらす、何となれは彼女は新島先生と同年同月同日に死したれは。天命若し彼女を死に導との止むなくんは、余は彼女の爲めにその死する時を得たるを祝すと。斯くて彼の學友及ひ敎友その他彼と前後東京に到りたる我黨社中は、質素なる彼の柩を擁して青山墓地に送れり。枯枝を吹き鳴しつる木枯は、讃美の悼歌に和して、無限の悲哀を會葬者の一人に送れり、彼は云へりその友に向て、『余も何となく死に度くなれり』と。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

彼女の凶報老親に達するや、彼は落膽して答書を裁するの勇氣を失へり、彼は他人の代筆によりてその悲哀の萬分一と、その余か家に向て謝意の十分一を報せり。

二十四年の夏、或る夜、何處ともなく何日ともなく余

は彼女の父なる頽然たる老翁を見たり、孤身娉婷、唯た影子の如し、余は見たるのみにて胸は裂けんとせり、覺め來れは一塲の夢にして、余は滿身の冷汗に浮ひ居たり。余は是に於て倍々彼女の爲めに記する欲あらんとせり、而して果さゝりき、暫くありて傳ふるものあり、彼女の父池田東園は、落膽の餘、日夜飲酒以て悶を排し居たりしか、彼女の墓參の爲めに東京に到らんと欲し、準備既に整ひたるに、一夕某の宴席にて頓死せしと。而してその死せる時日の、余か夢みたる時日と同一なるや否やを知らす、然れとも甚た接近し居るは相違なき事にして、余は今にその不思議を感し居れり。

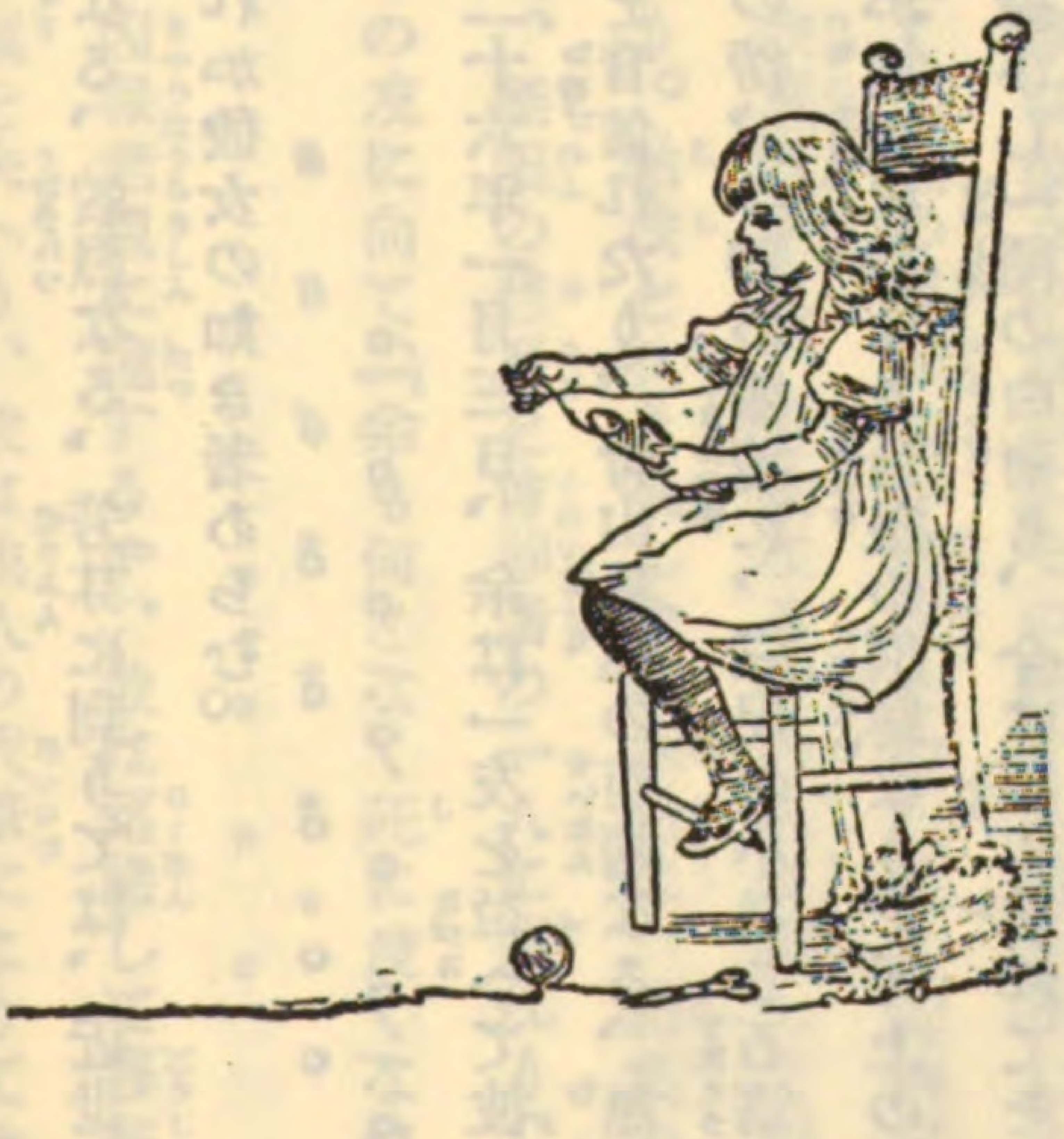
嗟呼彼女は何事も爲す所なかりき、然れとも爲さんと欲するの志望に到りては、死も亦た打ち消す能はさるものある也。余は親む所に阿りて彼女を摸型的淑女と云はす、自然は彼女の敎師なり、彼女は獨り自から生成せり、彼女は自から作りし一人なり、彼女は恰も野生の薔薇花の如し、その屈曲して刺あるか如き固より彼女の爲めに諱む可らす。然れとも天然の、氣高き、淸淨なる、皎烈なる、芳芬に到りては、近世の巾幗者流誰れか彼女の如き者あらむ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

明治二十六年一月三日、余は一友を拉へて彼の靜なる眠宮を音信れたり、青山墓地の西端なる、無緣地藏の石像の傍、一坪の檻墻に、三尺の小なる石塔こそ是れ彼女か地球に於ける最後の痕跡なり。母上の手自から植へ給ひし一種の白菊も、今は霜に枯れてその萎める花すら止めさりき、父上の手から揮毫し給ひたる、彼女の名は、雨に打たれ日に炙られつゝも、歷々として石塔の面に存せり。顧れはその傍新墳纍々、恰も一國の幽界共和國を爲りなせり。嗚呼三年前余等か彼女を此の土に殘し歸りし時は、四邊は白茅の野原にて、蓬

かに一基の無緣地藏尊、その寂寥を護したるに、今や則ち此の如し。今後の三年の後如何、三十年の後如何、抑も亦た三百年の後如何。

人生無百歳、百歳亦如何、古來英雄ノ士、倶已歸山阿





田家新年

臥水生

上

未だ老いざるの松なき林のうちに、碧瓦の色の微かに露はるゝは、この村の葬祭の司なる老僧と、別に一個の雛僧との棲める一古寺なり、曾て鶴の棲みたりしといふ鐘樓は、半ば仄むきたる門のうちの丘に在りて、鐘あり靜かに懸りたり、鏽華は一面に咲きて彫られたる銘字を埋め、上に蝸牛の古篆を描き添へて縦横狼籍し、敗魚の鱗に似たる瓦の蔭には、二三羽の鳩ありて巣くへり、その何代の祖先がこの華鯨の吼へたるを聴きしのみにて、此の鐘は久しく鳴らざりける、

歳の將に盡きなんとする日の曉、この村の毎家の簷にはら／＼と霰の音づれて、しげき霜柱の上に印されたる草鞋の痕、朝餐あさる雀兒の跡、里の童の遊戯の伴侶なる狗のあしあとなどに吹き入りて、路もせにおかしき痕を散らせしが、亭午を過ぎし頃より大雪となりて、この淋しき村を埋めたり、

村の中央なる古き一軒の家の門より、深雪に印されたる多くの草鞋の痕ありて、邐迤として古寺の門に入れり、寺のうちには木魚の聲聞え、讀經の聲も幽かに聞え、より／＼磬を敲くの音をしぬ、少時して一路の松風梵唄の聲をなせる寺の門より、多くの村人は愁を帶びて還へり來たれり、寒を怕れて蝟の如くなる雛僧が、竹の皃笠をその青々と剃られたる囟顱に戴きて、行く／＼龜かめる手を吹きて先頭に立つは、晩餐の齋を受けんためなるべし、牡丹餅紋の羽織を着けたる赭面の

老人は、この村の冠婚の長なる村長なり、後より來たれる村人を顧りみて、さても人の命ほどはかなきものはなし、此の村の開基にて、お上より藍綬の章を賜はりたる祿右衛門どのも、はや彼の世の人となりぬ、一個は點頭て、行く身は兎も角も、跡に殘されし妻や兒は今日より如何にすらん、一個は面にふりかゝる雪を拂ふて、その慧敏しき兒の、父の後を追ふて嚮昔より啼きやまぬには、母の心は千々に碎くるなるべし、一個、美くしき其の兒の母も、今日よりは寡婦となりぬ、頑是なき兒と共に浮き世の憂さ辛らさを今日より見ん、一個、あまりに悲みて病などひき起してはならぬほどに、善く慰藉めて安心さすべし、日に一と掬びの米を村の人より贈りても、哀れなる寡婦と孤兒とは泰らかに其の日を送らるべし、さても善く降るよ、雪は豐年の瑞祥とはいへ、斯る日には降らずもがな、何かといふうちはや祿右衛門どのゝ門へ來た、看よ亡き人に播かれたる麥の、雪を浴びて青々として威勢の佳さ、來ん年の麥秋にはこの豐穰を誰にか見すべき、

崩れさる黄茅の屋をつき出てたる煙突は、あたりの雪を半ば解かして、そこより煙かすかに起ち升り、吹き來る風に掃はれて横さまに取れたる簷を傳うてたなびけるは、永き眠に就ける可愛の夫を寺に送り呉れたる村人に温きものを食はせんと、祿の婦は涙片手に濕りがちなる柴ふきて、飯を炊げるならん、村人のかたみに語り合ひつゝ門邊に近づける頃、門の扉半ば啓け、雪に映じて燿やくばかりなる女の面現はれたり、

眉は愁によりて蹙むれど、心を舒べなば涼しげなる雨山の匂ひ濃やかなむ、眼は啼くが爲めに杏の如く紅くなれど、麗かに笑はゞ優しきと春の海の如けん、懷に稚兒を抱きしまゝ腰を折りて村人を拜しぬ、生憎この雪の日に、さぞやさぞと言ひさして、跡は涙に言はせけり、

懐なる稚兒は楓葉の如き手をあげ、斷み居たる乳房を放して、父さんはと問ひぬ、母は涙を呑みて、またしても聽き解けの惡いと、父さんははや遠方へ行かれたほどに、大人しう待つて居や、村人は面を背け、佳い兒よ／＼、父さんはあの山踰えてあの川渉えて、遠くのお里へ行かれたほどに、泣かずに待つて居らば、紅くて綺麗な玩弄物を買ふて來て給もるといふに、稚兒は母と村人との顏を視くらべ居たりしが、やがてよゝと泣き出しぬ、母は抱きしめて冷たき唇を兒の頰に中てけり、

村の長なる老人は、禿げたる顱に殘りたる白髮を束ね結ひたる蜻蛉の如き丁字髷に、解きたる笠の紐をからめ、ツをあはたゝしくほどきつゝ、姉御よ祿右衛門どのゝ安らかに眠るべき塋の坎は、この大雪に埋もれて、尙ほしきりにふり積むほどに、今宵一夜はあのお寺樣の本堂の、尊とき御佛に置きました、和尙さまの夜を通して難有お經を讀むて回向をなし給ふほどに、婦は聽き敢へず、そはまた何たるとぞ、この寒き雪の夜に、獨り寂しき御堂のうちに殘すとは、村の長は頭を掉りて、佛の御燈あかく點されたる、尊とき御佛の前のみならず、戸帳、天井、欄間、襖に名ある古の佛畵師の丹誠を凝して畵きたる、靈ありとさへ言ひ傳へたる微妙じき天女に圍まれて居給へば、この荒屋のうちに在りて、夜もすがら幽けき燈火の蔭に、そなたの涙、その兒の啼、村人の喞言に夜を明かさんよりは、亡き人の魂は如何に喜ばんと說き諭しけり、

說かれて僅かに頷きながらも、尙ほ心元なくて婦はいよ／＼悲に沈みけり、やがて飯は熟し、汁も煮え、酒も溫りぬ、隣の媼は蚯蚓に似たる黑き蕎麥切を鉢に盛りて贈り來たり、近きほとりの娘は毬の如き馬鈴薯の煮たるものを皿に載せて持ち來たりぬ、他の村人たちは、黄豆粉餅、いし／＼、蜜柑、鹽煎餅など思ひ／＼

に持ち來たりぬ、共に哀れなる寡婦を慰めて、この蕎麥きりも、この餅いひも、この芋も、この豆も、皆な祿右衛門どのゝ賜なり、思へば幾年前、祿右衛門どのが荒れたる土地を闢き、草を燒き石を舍て、豊かならぬ資產を擲ちて、この一村の田を拓かずば、米も麥も天地ひらけし以來、この村のこの土地には生へず、若し祿右衛門どのあらざれば、移り住める我等も、などかこの和らげる村のうちに今日の太平の樂を享ぐるとあるべき、山よりも重きその恩を忘るゝものはこの村にはあるべからず、心の安らかにおはし給へと慰めて、寺より借り來たれる几の上に置かれたる祿右衛門が譽かくはしき浮世のかたみ、玉の如く澤ある黑塗の匣に、金もて五三の桐を凸に描かれたるに盛らるゝ藍色の綬もて結ばれし銀の章の前に、皆な跪きて再拜し、もて來し供物を捧げけり、

この藍綬の章は、祿右衛門が先祖より傳へたる資產を擲ち盡くして、この土地を拓きたる功業によりて、上より下し賜はりしものなり、藍綬の章を受けしその翌年の樂しき正月に、この婦はこの家に歸ぎぬ、此の時花婿はいたく貧しくなり果てゝ、婚禮の席に美しき銀章を踈末なる禮服の襟に佩びたるの外には、花嫁を迎ふる爲めに、村人等がその額に汗して獲たる幾斗の米麥をもて、市より買ひ來りて贈りたる、新しき少さき簞笥一個、その簞笥のうちには、隣の媼が幾朝の霜に手を爛らして梭を把り、歸ぐべきこの女が、幾夜の眠を短かめて冷やかなる剪刀と親しみ、霞める眼に幽かなる燈火に暈を看つゝ針を停めて、燈心の華を數へ占ひながら縫ひたる衣の兩三枚、藏められたるのみ、その外には柄の朽ちかゝりたる斧、鍬、及び硏ぎへらされたる新月の如き鎌の、梁のほとりに懸けられ、他には何物もなく四壁唯だ立てり、

村の長は寡婦を助けて賓客に飯と酒とを饗し、雛僧に

は晩餐の齋と、村人より贈り來たれる供物を、亡き人の靈前に備へ呉れよと吩咐けて、やがて彼を還しぬ、

今宵は一年の最終の日とて、村人は大晦日の支度せんとて、一個の影失せ、二個の姿去り、夜闌くるまゝに次第〳〵に歸へり行きて、後には唯冷やかに青き燈火の蔭にこの淋しき夜半を語り慰めつゝ、吾が家には用なき嫗の兩三人、その瘦せさらばいし影は半ば零ちたる壁の上に映れど、風はその瘦せさらばいし影を透して香なくして冷たき花を吹き入れ、燈火暗くまたあかし、寡婦か懷なる稚兒は、枯れたる乳房を舐りあきて、その紅玉の如くなる頬にすりつけ、優さしき春風の呼吸すや〳〵と娯しき夢を看るらむ、より〳〵漣の如き微笑の頬に傳ふるごとに、よゝと母は泣けり、燈火は凍れるか如し、家の外なる雪深さ幾尺ぞ、

下

夜半に流雲の如きものあり、深雪を度りて寺の門に入りけり、眠れる雪は愕き起ち舞ひ狂るひて、跡に可愛きあし痕一道を殘し行けり、

寺の本堂の欄干のほとりに、雪は激して紛々と逆だちしが、やがて靜まれば、ソコに稚兒を抱きて屹と起ちたる一個の女を見る、眉は昂り眥は裂け、紫色なせる唇を嚙むで睨むが如く露はれたる牙は、頬を掠めて散らげる鬢毛を含みぬ、欄下の雪は眞白にこの女を照して十分の凄味を添へける、哀れなる寡婦はこの雪の夜に唯だ獨りして、寒き御堂のうちに眠れる可愛の夫を訪づれんとて來たりしなりけり、

扉をひきあけて寡婦はうちに入りぬ、佛燈かすかに古龕を照らすところ、隱々として如來の像立てり、灰白みたる香爐の烟ははや絕へなんとして、何ほ異しき文字を書きつゝ素木の棺を繞れり、渠の夫が長へに眠れるところの、

雪は白蛾の如くはら〳〵と吹き入りて佛燈を亂れ打ち

ぬ、ふき消されじと寡婦は片袖を擧げてそれを藏くし靜かに棺のほとりに傍ひ、細き聲して喚びぬ、さぞ淋しう思すらん、雪の眞夜半にこの御堂のうちに、斯うして獨り眠り居給ふとよ、眼さめ給へ吾が夫、そして手を携りあふて吾が家に歸ろうよ、

喚べど譍わらず、寡婦は俯して棺のうへに手をかけぬ、すなほなる肩を滑べりて、黑髮は婆娑と棺の上に落ちぬ、これもし吾が夫、早く起きよ、起きよ、起きよ、起きよ、起きよ、言ひつゝおどろ〳〵しき黑髮を隻手に摑みて、顚きざまに如來の像を仰き見ぬ、此の時寡婦の眼は怪しくきらめきて、さきに靑かりし顏は、刹那に朝日を啣みたる霞の如く照りかゞやきぬ、

渠は星のやうなる眼をあげて堂中を廻看しぬ、古煤のうちにおぼろにほのめける四邊の襖の天女の畵を視てオ、是れは美くしや、吾が夫のさびしう在すらんとて來て見しに、これはまァ夥しき天女さまの、瑟をかなで、簫を吹き、羯鼓を打ちて在ますとよ、吾が夫は何故眼さめ給はぬ、オ、情なき男の心を知らずして、一つ心にかけてのみ思ひわたるゝ吾が夫を、この淋しき雪の夜に尋ね來しに、夫はこの美くしき天女さまの妙なる調に聽きほれて、可愛の妻が喚ぶ聲には耳をかさぬか、思へば〳〵つれなき吾が夫の心かな、寡婦は躍り上ると二度三たび、

忽ち金虬の如きものありて寡婦の眼のさきに凝りつ流れつすると思ふとたん、襖に畵かれたる天女は皆な一齊に搖き出でぬ、斷霞を裁したらむ如き衣を飜へし、明星を綴りたらむ如き手環を鳴らし、瑟かなでたるものは瑟を揚げ、簫吹けるものは簫を揮り、羯鼓をうちたるものは撥をかざし、楊弓とれるものは楊弓を彎き、この哀れなる婦を環りて立ちたりける、婦はあらと叫ひて合掌しつゝ仰ぎ見れば、天井に描かれたる天女も靑紗に似たる雲に駕りて降りぬ、欄間、柱に彫れたる

佛も夜叉も皆な躍りぬ、戟とれるものは戟を舞し、如意とれるものは如意を揚げ、香爐を擎げたる獅子も活きぬ、寶簡を啣みたる鳳凰も飛びぬ、天華しきりに降りて光明赫耀、古りたる御堂はたちまち黄金の殿となりけり、やがて獅子は紫雲の如き鬣をふりて雷の如く一聲吼えぬ、昏倒したる寡婦は驚きさめて首を仰ぐれば、一陣の風は千萬片の雪を吹き帶び來たり、佛燈それにうつりて瞬くまの美くしき金輪の暈を殘して消へ失せたる後は、天地大寂莫、

寡婦はやがて起き上りぬ、啼く兒を抱き上げて、さながら蜻蛉の蓼花に點じて、去りては復た來たるが如く、可愛の夫が長へに眠れる棺に傍ふてはまた却ぞき、袖を翻へしてそこらあたりに舞ひたりしが、亂舞の姿のおかしく

　曉のかね心あらば吾が夫の
　　永き眠を喚びさましてよ

斯く口吟みつゝ、蝶の如くひら〳〵と欄干の上に來たり、忽ち身を閃かして飛び下り、深雪を蹴りて鐘樓のほとりに走り行きぬ、折しも雪は既に歇みて、帛の如き薄き雲を透して、やさしき星の光は淡く銀の世界をつゝみけり、

靜かに懸る鐘の半面は、吹きつけられたる雪に藏くれて、さながら妙花綴り成したる華鬘の如し、寡婦は二度三度歌を口吟みつゝ、壞れかゝりたる石磴を登り、仰きて靜かに横はる撞木に手をかけぬ、一二三四五六七八九たび十たびふり搖かして、忽ち芭蕉の風に簸ほるが如く身を閃かすや、十指の頭先より迸り出づる精氣電の如く、この太き撞木は流星の如く飛び行きて火華の散らげんばかりに鐘の花輪に中りたり、

百年來曾て鳴らざりしこの古鐘の半面の雪は、裂けたる甕の如く地に震ひ零ちたり、鐘は大に鳴りぬ、敗瓦の蔭に甘睡せし鳩の兒は驚き起ちぬ、撞木は跳ね返へ

れり、再び之を把りて振り搖かしつゝ、鐘を望むて投けたりける、樓の屋の一角を蔽ひたる雪は、鷺の如く飛び落ち碎けぬ、鐘は大に鳴りぬ、撞木は跳ね返へれり、復たこれを把りて振り搖かしつき放しぬ、鐘は大に鳴りぬ、四邊の雪は活きて走しりぬ、撞きて第六聲に至りし時、朽ちたる撞木の繩は音もなく截れて、さながら白蛇の如く深雪の上に走り、寡婦は撞木を抱きたるまゝ反けざまに倒れたり、

時正さに一月一日の午前第六時、一道の曙光雲の間を迸しり出でゝ、紅霓の如く中空に度り、滿眼の皚々たるもの皆な耀きて瑪瑙の色をなし、金鷄は勇ましく初日の出を賓して啼き、村人は皆な夢さめぬ、

嗚呼、久しく鳴らざりし鐘は端りなく狂婦の爲めに新年第一の曉鐘となりて、新天地の萬物を喚び醒ましぬ、看よ、この鐘樓の下に華まる個々の山林水郭の鮮かに麗はしきを、眞白のうちに濃藍一抹して巴字を描き成したるものは、この村の田に膏する名なしの湖とその水の落つるところの名なしの川なり、優さしく立ち昇る無數の炊煙の蔭こそ豊かに圓なる村人の團欒あれ、山も林も野も水も美なる哉、嗚呼是れ皆なこの哀れなる婦の夫なる祿右の拓きたる所の者なり、長へに眠れる人は長へに覺めて此の村の神とぞなりにける。





家妻

アービング著

湖處子譯

女の胸にかくれたる
寶を見れは、わだつ海の
底なる珠も珠ならす。
我宿ちかく我か來れは、
くしき香の薫るなり。
妹か袖よりふく風に、
花の匂も妙ならす。

ミツドルトン

余は展劇甚なる運命の轉變を支ふる婦人の勇氣を觀るの機會に際しき。蓋し夫の往々にして硬性の膽力を擊ち碎きて塵土に歸せしむる所の禍難なるものは、却て軟性の活機を喚興して其特質を強く且つ高からしめ、時としては殆と崇嚴の域にまでも擧けしむるものゝ如し。平生唯一様纖弱從順、良夫にのみ之れ賴る婦女子にして、然も人生榮華の途上に於ける不慮の變故に際して、遽かに其心力を振ひ興して以て悲運の下に呻ける良夫の扶助となり、支柱となり、磐石動かぬ精神を以て、襲ひ來る疾風に當りつゝ、能く運命の虐遇に耐ゆるを見る、其の人心を感かすもの世間未た斯の如きはあらす。

宛然夫の葡萄樹、——其の雅しき蔓を展へて樫樹に纏ひ、其枝に憑りて日光の梢にあけられたる葡萄樹が、一旦其喬木の雷霆に擊ち僵されたる時に於て、其柔らかなる蔓蘗を以て之を懷き、其裂かれし枝を結ふか如く、無事の日に於て唯男子の所屬なり裝飾たるに止まる婦女子か、遽然禍害の震ひ來りし日に於て、渠か粗豪の氣魄の零碎を合せ、胸に垂れたる頭を支へ、斷絕したる腸を縫ひつゝ、此日渠か安息處となり遁陰處

となるとは、實に妙なる天命と謂ふへし。
余は嘗て最も强き羈に繫たれし、或る昌ふる家族に圍繞されたる一個の友を祝福せしとありき。渠は其の熱心を推して余に云ひき、世に妻を有ち子を有つの幸運のほか、余か君に望み得る所あるを知らす。君若し榮えは、其榮を分つものは渠等なり。若し不幸ならは、君を慰むるものも亦渠等なり」と。余も亦悲運に墮ちたるもの丶裡、其位置を社會に恢復する上にあつては、有配者の獨身者に比して相宜しきと數等なるを觀き。是は渠か死生唯自個の外に頼る所なき可憐のもの丶聲に與さる丶と、固より少からすと雖、然れとも亦主として其氣力の、家庭の愛の爲に慰め活され、戸の外には唯闇黒と逆浪のみ充てりと雖、其爐邊には猶ほ恩愛の王國ありて、自個茲處に君たるとを感へは、其面目の猶ほ存せるものあるか故にあらすんはあらす。然して此際獨身者の自ら荒み自ら棄るに任せ易きも、其の寂寞無聊に堪えすして自ら廢み、情死すも主なき空屋の暴れゆくか如く、一たひ沈めは復た擧かるの傾なきも、亦此の温かき火爐なきに由らすんはあらす。

此觀察は余をして端なくも舊時見たりしある短かき家庭消息を懷ひ起さしめぬ。余の親友レズリー卿にメリーと呼ひて風流社會に人となりし、美にして藝ある少女を娶りたりき。彼（假に女性の代名詞さして）には富のなかりしかとも、レズリーの資産は莫大なりき。渠はあらゆる風雅の遊藝を以て彼を飽かしめ、優美の趣味なり幻想なり、大凡女性の身邊に魔力を展ふる所の妙興の裡に彼を操らむの豫定の爲に心浮かれぬ。渠は云へり、彼か世は微妙しき物語の如くならむ」と。

此二個の性質の異處、亦妙に兩個を聯くものありき。レズリーは磊落にして稍沈着なる方なるも、メリーは始終輕快にして怡悅なりき。余は屢レズリーか、メリーの幻姿の彼を同伴中の本尊たらしむるを偸み見て、無

言の面稱嘆の色を隱す能はさるを見き。メリーも亦同伴の追從諂諛の中に在つて、窃に其人の情を得むとするもの丶如く、眩ゆけなる秋波を以て渠かあたりに窺ひき。彼かレズリーの腕に憑る時、其の嬌かなる容姿と渠の男子らしさ風采と、いかはかり好く釣あひげるよ。メリーか渠を見あくる面の、渠を信して他意なき容子は、レズリーをして此力なきものを負ふ其憎からぬ負擔に心醉するもの丶如く、勝利の面目、不便の憐情に微紅を潮せしめぬ。實に余は斯く少くして相宜ひ然も斯く相信して合歡の花の途に上る一對を、これまて嘗て見しとなかりき。

然してレズリーか其莫大の富を擧けて投機の大海に浮へたるは、渠か事の終なりけり。引つ丶きたる逆浪の爲に其資産を蕩盡せられ、渠か無一物になり了りしはメリーを娶りてまた月を越えさる間にてありき。渠猶ほ一時は其の位置を維持せしかとも、然れとも漸やく痛ましくなる顔は、張さく情を隱み得さりき。渠か世は今引のはしたる呵責となれり。然して渠を最も苦ましめしは、メリーに對して平素の愉快を裝はねはならぬ一事なりき。そは渠此の魂消ゆへき珍事を以て、何知らて悅へるメリーを震殺すると能はさりけれはなり。

然れともメリーは愛の慧眼を以て、世の渠と是からさるとを疾くより見ぬきぬ。實に彼は既に良夫の變れる容を見、胸塞ける太息を聞けるか故に、常坐を怡はさむとする疾しき空しき工夫を以て、今さら欺むかるへくもなかりき。メリーは今其輕快なる幻姿と、温かなる辭色を以て、徐ろに良夫の機嫌を回さむと務めしかとも、そは唯良夫の情を射貫ける矢を轉た深く穿ちこむのみ。其妻の愛すへき個條を看出せは看出すほと、渠は猶ほ其妻を誤るとの速かなりし遺憾に責められぬ。渠は謂へり、暫らくせは、メリーの靨は頬より消へ、其唇の歌も止み、美しき眼の光も悲歎の雲に罩はるへし。

今かく輕く響ける情も、世の憂と哀によりて鉛の塊より重くやならむ」と。

ある日渠は遂に來りて余を叩き、深甚絶望の音を以て自個の陷れる境遇を具さに語れり。余は其始終を聞きたる後問へり、君か妻は其を知れりや」と。此疑問に感たれて渠は身うち震ひ涙をこぼして叫ふらく、そうかね「ア、」君若し余を憐まむとならば、吾妻とな云ひ玉ひそ、メリーの一念余を狂せしむ」と。

「何故に」と余は問ふらく「彼は早晩其を知らざるべからず、君亦いつまで彼に隱し得べきそ。今若し君より白さずんば、君か白すより一倍痛ましき方法を以て彼の耳を撃つべきなり。君は知らずや、愛するものゝ唇の毎に激甚の音を和らぐるものなることを。且つ君は今其を妻に語らさるか爲、彼の與ふる同情の慰藉を自から拒まむとしてあるなり。それのみならず、兩個の情を擊ちて以て思想感情を相傳ふる、唯一の愛の線をさへ斷たんとすなり。見よ彼は今にも何物か君の心を蝕ひ居ることを觀然して眞個の愛ならば必ず包みかくすことなきものゆゑに、君の苦痛の自身に隱されたりと感はば、遂に輕侮憤怨の念を生せむ。

「チ、さはれ吾友彼か前途の望に如何なる打撃を加ふべき乎を思へ。其良夫の乞兒なることを彼に白さば、彼の天に昇れる心の地に墮さるゝこと如何ばかりなるかを思へ。人世の榮華社會の快樂を受くべき身にして、余と共に貧乏不聞の裡に縮み去るべくあることを告けなは、衆眼の光衆情の誇として絶えず輝くべき其舞臺より、社會の底に彼を引さけたることを語れとは——、彼如何にして貧に堪ゆへき、彼は風流社會に生ひしこと。彼如何にして自ら棄て得む、彼は舞臺の本尊なりしそ。チゝそは彼か情を裂かむのみ、彼か情を裂かむのみ。

余は渠か悲痛の能辯なるを見、其を流れしむるの言葉にあることを知るか故に、渠か云ふまゝに云はしめ、徐

ろに其潮の退くを待てり。其悲歎過きて沈める無言に移れる時、余は復ひ其問題を取り、渠か境遇と其妻に白すへきとを勸めたり。渠は無言に其頭を振れり、哀れけに亦明らかに。

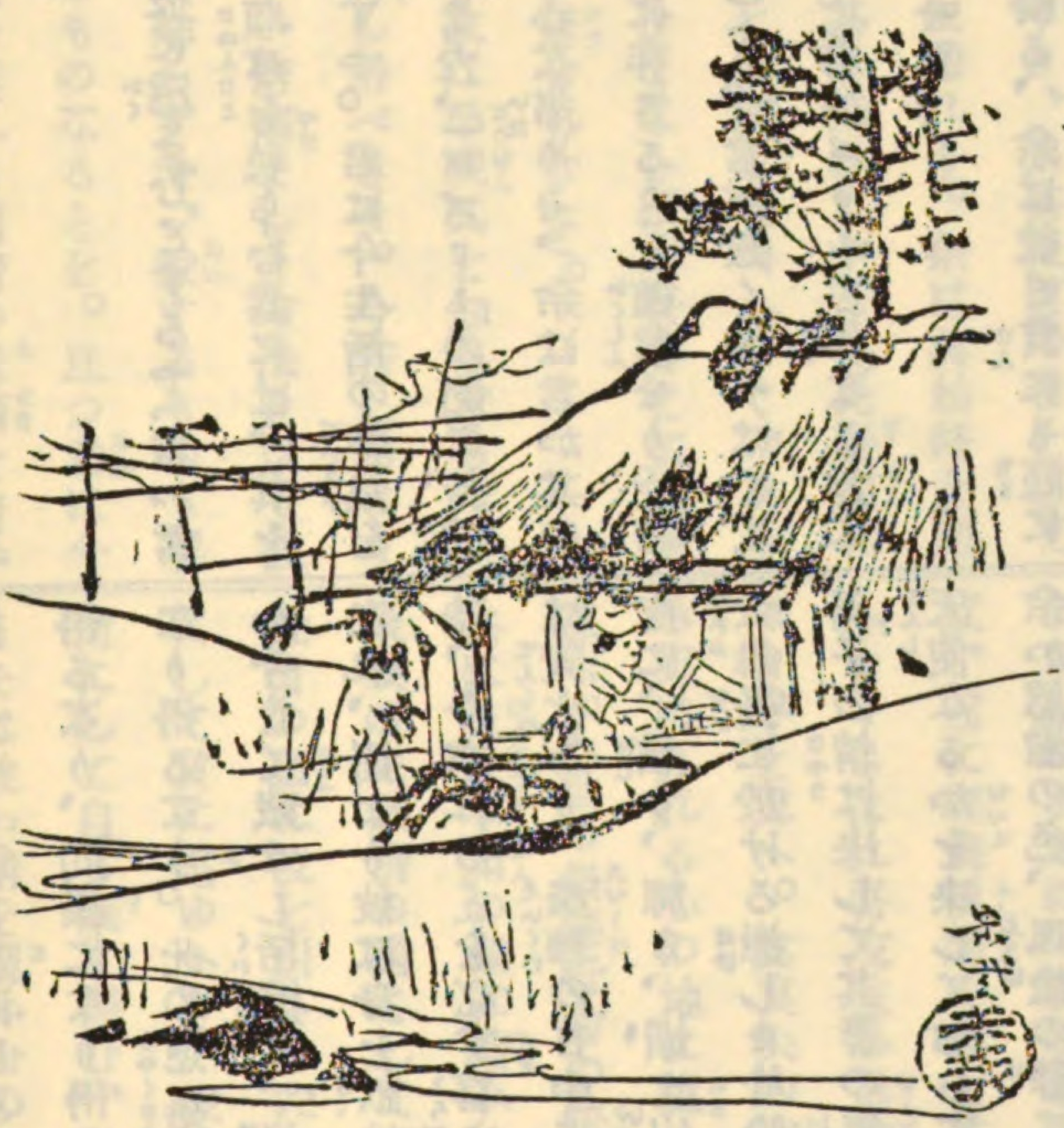
「然れとも君は如何にして彼に隱さむとするや、君か君の位置を易ふるに必要なる順序を執らむ爲には、其を彼に白すの必要あるにあらすや。君は今生活の躰裁を易へさるへからす、然してまた、」レズリーの面に苦焰の線走りてけれは、「其事に心な痛めそ、余は君か其の福祉を外觀の上に置くものに非さるとを確信せり。君は猶ほ友、溫かなる友を有てり。君か低く住へはとても、誰か君を卑しむものそ。君かメリーと幸なる爲には、必すしも高樓大厦を要せじ。

余は彼と小屋にも幸に住み得る、余は彼と貧にも塵にも退り得る、得るよ、得るよ、神彼を惠みます、神彼を惠みます」と。アヽ是れ渠か悲痛懇情交至り、身を震はせて叫ひし語なりき。

「吾言を聞け友よ」と余は椅子を進めて溫かに渠か手を握りつヽ、「吾言を聞け友よ、彼は必す君と同樣になり得るなり、同樣になり得るのみならす、猶ほ卑しくもなり得るなり。此の逆境こそ彼か功名手柄の場處彼か今まで藏せし活機と、焰の如き同情を喚ひ起す機會なれ、固より彼は身を献けて君を愛するの誠を示すの時、今來れるとを必す喜ふへけれはなり。婦人の情には天火あり、榮華の日中に隱れりと雖、逆運の闇黑の夜に、熾り、輝き、焰え出づるものなり。此の世界の大舞臺に於ける激しき吟味の場に臨むにあらされは、男子の情は決して其妻の眞價を知らす。彼か如何なる天使なるかを決して知らす。

余か慇懃の色、諷諭の辭は、レズリーの切情を捕ふるものありしなり。余は聽者の胸に手ごたへあるを感えしなり。余は猶ほも前言を繼き、渠に勸むるに速かに

還りて其妻の爲に、重き情を御すへきを以てせり。余は斯くレズリーに保證せりと雖、然れとも余自から告白す、其結果を思へは懸念に堪へさるものありしと。何となれは夫の快樂三昧に世を送る婦女流の勇氣を誰か能く料り知るものあらむや。余は恐れぬ、メリーの輕快なる精神、或は遽然其前に置かれたる零落昏黑の谷より反りて、是まて遊ひし日影の巖に縋りつきはせさるやと。獨り之はかりにあらす、流行社會の浮沈の際には、門外者流に知られさる幾多の痛心なるものなり。要するに、余は其の明る朝、震慄せすしては



レズリーを見ると能はさりき。蓋し渠既に其妻にうち白けて來りしなり。

「して彼は如何にありしや」

天使のとくよ、寧ろそが彼を安堵せしめしもの丶如く見えにき。彼は吾言を聞くや否、吾頸に兩の手をかけ、此間君か心を痛しめしは是かと問ひきと。渠は猶ほ語を繼きて、

「さりなから憐のものよ、彼は二個か受くへき變遷の如何なるかを會得し能はす。彼の胸には貧てふ思想なく、あるものは唯詩歌にて讀みたる愛に伴ふ貧てふ文字のみ。身を剝るへき

とも感せす、便利の快樂の什具の共に失はるへきとをも氣つかす。されは實際苦しき所帶、さもしき不足、つらかる難澁を感する其時其時こそ眞實の試驗なれ」と。

されと君は既に彼に白すと云ふ至難の業をすませるなり。君か其秘密を公にせしや否、君か心は安堵せるなり。白すとは憂かりつらむ、されとそは唯當坐の苦痛にして、白すや否や過去るものなり。若し白さむとして白し得す、今か今かと一日一時も安からさるに於ては、君の痛心いかはかりそや。破產の人か實際煩悶するものは、其貧よりも其口のみ。誇れる情と、空しき衣兜の間の苦鬪のみ、直ちに滅ゆへき虛色の維持のみ。貧に裝ふ勇氣を帶よ。貧の鋭とき刺を折るものは即ち是れなり」。此點に於ては、レズリーも亦既に準備する所ありき、メリーは如何、彼の苦慮する所も亦、この變れる境遇に同化し得へきや否の一事のみにてありしなり。

數日の後ある夕レズリーは余を訪へり。渠は今其居宅を引拂ひて、市中より一二里離れし田家のある小さき茅屋を繕ひ、家具の運ひに終日つかれぬ。渠か新所帶に要する所は、僅かに一二の什具にして、それも質素のものにて足れは、舊宅を裝りし珍藏寶器は皆賣れて、唯メリーか愛てたる一臺の琴のみ殘れり。渠は云へり此琴はかり、餘りに深く彼か心に密着せるのみならす、二個か相思ふの情最も細かなりしは、自個其樂器に凭れたちて、融るはかりの彼か美音に傾瀉する時なりしか故に、二個か愛の歷史に於ても、放つへからさる關係ありと。此磊落の人にして猶ほ此可憐の事ありと思へは、余は唯微笑する外はなかりき。

渠は今一日の勞作に力つき、心も亦弱りたるものと見えて、重き足を引する間、自から沈念の淵に沈みき。「憐れのメリーよ」と。遂に立留まりて太き溜息を發し

たり。
「して彼に何がなりしや、彼に何事か起りしにや」
渠は怨に堪えさる視線を投けて、「何事とか、このさもしき所帶に成り下れることを事もなけに思ひ玉ふや。此の見すぼらしき小屋に伏せねはならぬとを、此のわひ住居の家婢の業にやつれねはならぬとを」。
「さらは彼は此の轉變を嘆きてあるにや」。
「歎けりと、否とよ、彼はいつも快よけにて毫しも怨る色なかりし。實に彼には余に是まて知らざりし心靈の住むかとまてに思はれぬ。彼はいつも余か爲の愛なり、美なり慰藉なりけり。」
希有なる娘よ」と、余は叫ひて「君今自から貧と呼へとも、友よ、君は今まて斯はかり富むてはあらさりき。君か其娘の情に有てる隱れし寶の無量なる、よも君か測り知る所にあらし。
實に、實に、されど友よ、此の小屋の初度の會食たにすみたるもの〻、後は慰まむ術もあるへし。されと君は今日か彼の試撿の初日、彼か斯るわひ住居に退るも。今日か最初、見るも悲しき家具を排へて、長の日くたひれ暮すとも、家庭の業の面倒を知るも今日か最初、實に彼は一個の藏寶珍器もなく、便利慰藉の道具すらなき住居を、今日始めて見て、今は疲羸絶望にくづ折れて前途の貧の無爲を歎ちてやあらむ」。
是れ實にさもあるへきとにて、然も余か豫言し得さりし處なりしかは、答へむ言葉とてもあらす、レズリーか沈思しつ〻ゆく跡を、默々としてつけゆきぬ。
途は公道より野路に入れり。見はたせは那邊に深く茂れる林樹欝とりと蔭影を布き、路のあたりに幽遠安固の觀を畜けり。樹蔭開きて茅茨見えたり。其は牧場詩人の住居としても、いと陋しく見ゆると雖、猶ほ樂しけなる田家の趣味なきにしもあらさりき。野生の葡萄、蔓からみて軒の一角に纒ひか〻り、喬木二三樹、屋根

の頭に所見よく枝を翳し、猶ほ其戸の周圍に雅致に作れる花坪あり、其前面にも一場の芝生の見えにき。蛇の如き小徑は、其背に開かれたる小さき柴門をくゞり、一簇繁れる叢を繞り繞りて戸まて這ひたり。我等か其茅茨に近つきける時、宛かも裡より琴の音洩れ聞えぬ、レズリーは吾腕を振れり。我等は立留まりて耳傾けたり。其はメリーの聲にてありき、最もあはれの單調を以て、良夫か格別好みし短歌を歌ふメリーの聲にてありしなり。

レズリーか手は今吾腕にありて震へり。渠は今すこし明かに聞かむものと、一歩進みぬ。小石の徑渠か歩みによりて鳴れり。一個美の匂へる面。窓より窺きて忽ち消え、直ちに輕き足音聞え、メリーは我等を迎へむと戸より轉ひ出てぬ。彼は白く鮮かなる田家娘子の樣に裝ひ、其麗はしき髮に二總三總の花を插し、頰は爽けき微紅に熱り、而は微笑に輝きつゝ、斯く可憐なる彼か風姿は余か始めて見し所なりき。

「チ、吾ショーシよ」と、彼は叫ひて「君の歸り來ませしか、妾は君の歸りをのみ待ちて待ちわび、戸より門より窺きて待ち居き。妾は疾く茅茨の後の樂しき樹蔭に卓子を据ゑ、上等の覆盆子を澤山摘みてき、君の好み玉ふを知れは。そしていと旨しきクリームも、何もかも、かく迄見事に、猶ほこゝにチ、」と云ひつゝ、其腕をレズリーの腕のうちに挿こみ、喜悅に照れる面をあけてレズリーの顏を仰き見、我等はかくも幸福なるよ」と、

憐れのレズリー驚倒せられぬ、渠はメリーを其胸に懷きよせ、彼の頸に腕を投けかけ。接吻しては接吻しつゝ坐ろに語ると能はす、涙のみ眼に溢れぬ。

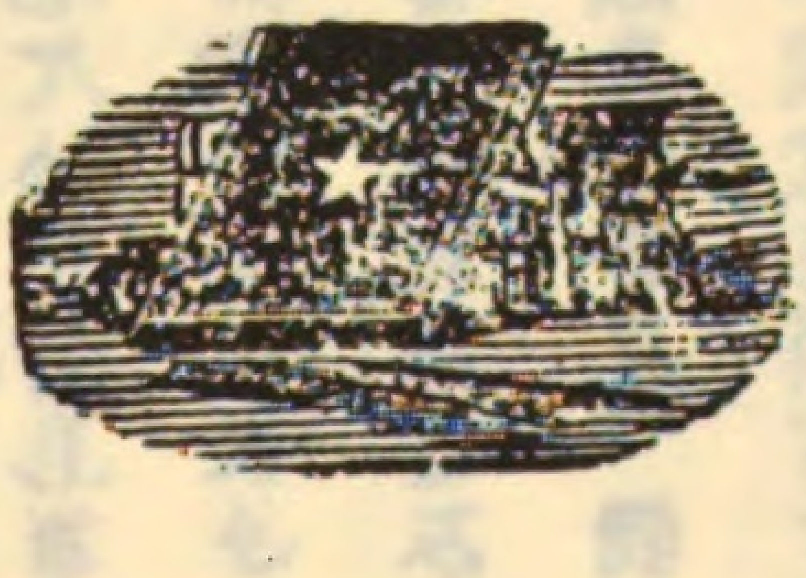
渠は屢余に告けぬ、縱令自個前日如何に世と榮えたりとも、如何ほど幸運に過きたりとも、斯ほと妙なる愉快の時には遭はさりきと。

幽咽泉流水下灘圖解

（平家物語平經正竹生島詣の條）

やう〳〵日暮れ、居待の月さへ出で丶、海上も照りわたり、社壇も彌耀きて、誠に面白かりければ、常住の僧、是は聞ゆる御事なりとて、御琵琶を奉る。經正これを取りて聞き給ふに、上玄石上の秘曲には、宮の中も澄みわたり、實に面白かりければ、明神も感應に堪へずや思しけん、經正の袖の上に、白龍現じて見へ給へり。經正あまりのかたじけなさに、暫く御琵琶をさしおかせ給ひて、かうぞ思ひつゞけらる。

千はやぶる神にいのりのかなへばや
しろくも色のあらはれにけり。



竹越與三郎著

新日本史

上巻四百頁餘◎中巻三百頁餘

上巻四十錢
中巻三十錢
郵稅各六錢

新日本は國史中の大變革なるのみならず、實に世界の歷史に於ける大事實也。新日本史は幕府の中世に遡つて新日本の由來を尋ね、之を考ふるに學者の深識を以てし、之を斷ずるに政治家の活識を以てし、滔々序し去り序し來り、廿三年國會の開設に至つて已む。眞に是れ明治年間有數の一大活史也。而して其史躰たるや東西を混化せる新躰にして、序事あり、議論あり、編年史躰あり、文明史躰あり、人物論あり、傾向あり、逸事あり、上は政變外交より、下は社會、學問、思想、財政、宗教の變遷に至りて盡さゞるなく、苟も之を繙かば新日本なる一大パノラマの中心に立ちて四方を望むか如く遠景、近光、歷々として掌中に入るべし。森田思軒居士は之を以て愛蘭黨の首領マッカルテーの大英近代史に比し、早稻田文學は之を以て和譯せるマコレー史を讀むの心地ありと評す、亞細亞は議論大膽、曖昧の處なしと評し、寸鐵はウエルベル的叙事とマコレー的評論を兼ねたりと爲す。其文の堂々乎として大家の風を具へたることを以て知るべき也。而かも其文字平易にして婦人にも老人にも一讀即ち解せられ萬民に諳誦せらるべき平民的歷史たるを失せざる也。若しそれ其事實に至ては一々之を主動者に質したれば的確にして動かすべからず。今や上巻は六板を重ね中巻は二板を重ね。以て其如何に天下に喝采せられしかを知るべし、苟も天下の形勢に通じ、社會思想の變遷に通ぜんと欲するの士幸に一讀を惜しむ勿れ

發兌元　東京京橋區日吉町四番地　民友社

發賣捌
○東京◎上田屋◎東京堂◎巖々堂◎東海堂○大坂◎吉岡◎梅原◎嵩山堂○西京◎便利堂◎東枝律◎飯田信文堂◎鈴木○神戸◎吉岡支店◎船井○熊本長崎○鹿兒島吉田○長崎安中○博多積善館○前橋喚呼堂

英國現內閣大臣、國會議員、大學教授ブライス著
人見一太郎譯

平民政治

菊版總紙數二千九百三十四頁
總クロース。美製本。セームス
ブライス肖像入
合本二册正價四圓
運賃二十錢

帝國議會開會中特別割引合本二册實價二圓五十錢運賃本社自辨の事、但し注文の諸君は必らず**前金拂込**を要す

本書の第十九世紀の尾端に於ける、超群絶倫の**大著述**たることは、歐米諸國の學者、政治家、立法家、新聞雜誌、異口同音に證明する所、今や我邦立憲政体建設せられ、漸く輿論政治の佳境に進まんとす、此時に於て**堅實、精明、適切、健全なる政治的知識**を得んと欲せは、此書を措いて亦た他に求む可きなし、我社爰に見る所あり、二個年二十個月の歳月を積んで、之を譯成す、譯文の謹嚴、明朗、精確、三千頁に近きも、一字一句の苟もする所なきは、敢て自から公言して憚らざる所、亦た世上具眼者の認むる處、今や帝國議會開會中を期し、**大に價格を減し**、以て我邦政治的知識の普及を計らんとす、是れ聊か吾人が江湖に酬ひんと欲するの微志也、頃ろ米國禁酒會派出員ウエスト孃我邦に來る、人其の發議の善を問ふ、孃答へて曰く、ブライス氏平民政治實に其の一なると、巾幗者流にして此言を爲す、我邦議員、法律家、政治家、有志家、實業家、書生、たるもの豈に此書に孤負して可ならんや、抑も亦た我社が諸君に與ふ好機會に孤負して可ならんや、本書の著者ブライス氏は、オックスホルド大學の教授にして、嘗て廣氏內閣に在り外務次官たり、今や自由黨の最も傑出したる名士として議院に在り、現に廣氏の新內閣に立て內閣大臣の椅子を占む、其の學識淵博にして、觀察鋭敏、判斷公明にして、推論精到、而して坐して言ふ可く、起て行ふ可く、一點空疎迂腐の痕なきは、氏が本色、而して其の本色を發揮したるは、未だ此書に優るものあらず、

發兌元 東京京橋區日吉町四番地 **民友社**

眞村の匠

普通學全書第廿四編 發兌廣告

理學博士 石川千代松先生校閲
八田三郎先生編

動物學新書

●洋裝美本全一冊●挿圖百餘個入(十三日發賣)
●●●●正價金二十錢●郵税金四錢●●●●●

其書の善良なると其價の極めて低廉なるとを以て毎冊共に非常なる江湖の喝采を博したる普通學全書は今や第廿四篇を發行するの幸運に遇へり特に本書動物學新書は從來の教科書と大に其撰を異にし或る一形の動物を撰んで模範とし其全群の性質を表象せり故に各種學校初級の教科書として最も適當の良書なり加ふるに理學博士石川先生の丁寧なる校閲を經たれば一層の完美を盡したり乞ふ愛讀の榮を賜へ

普通學全書總科目

●普通學全書ハ毎篇讀切完結ス●第一篇ヨリ取揃御注文ニ應ズ●第一篇正價金十六錢第二篇正價金十八錢第三篇以下一冊正價金二十錢宛●郵税毎冊金四錢(郵券代用一割增)

弊店發兌書籍目錄御入用ノ諸君ハ御申越次第進呈仕候

發兌元 東京神田表神保町 富山房書店

史學會發行

史學雜誌

毎月十五日發行●壹部定價金拾錢郵税貳錢●六部前金郵税共金六拾壹錢●拾貳部同金壹圓貳拾貳錢●郵券代用ハ一割增●為替ハ神田一ツ橋通為替取扱處ヘ振込ヲ乞フ●

發賣所 東京神田 富山房

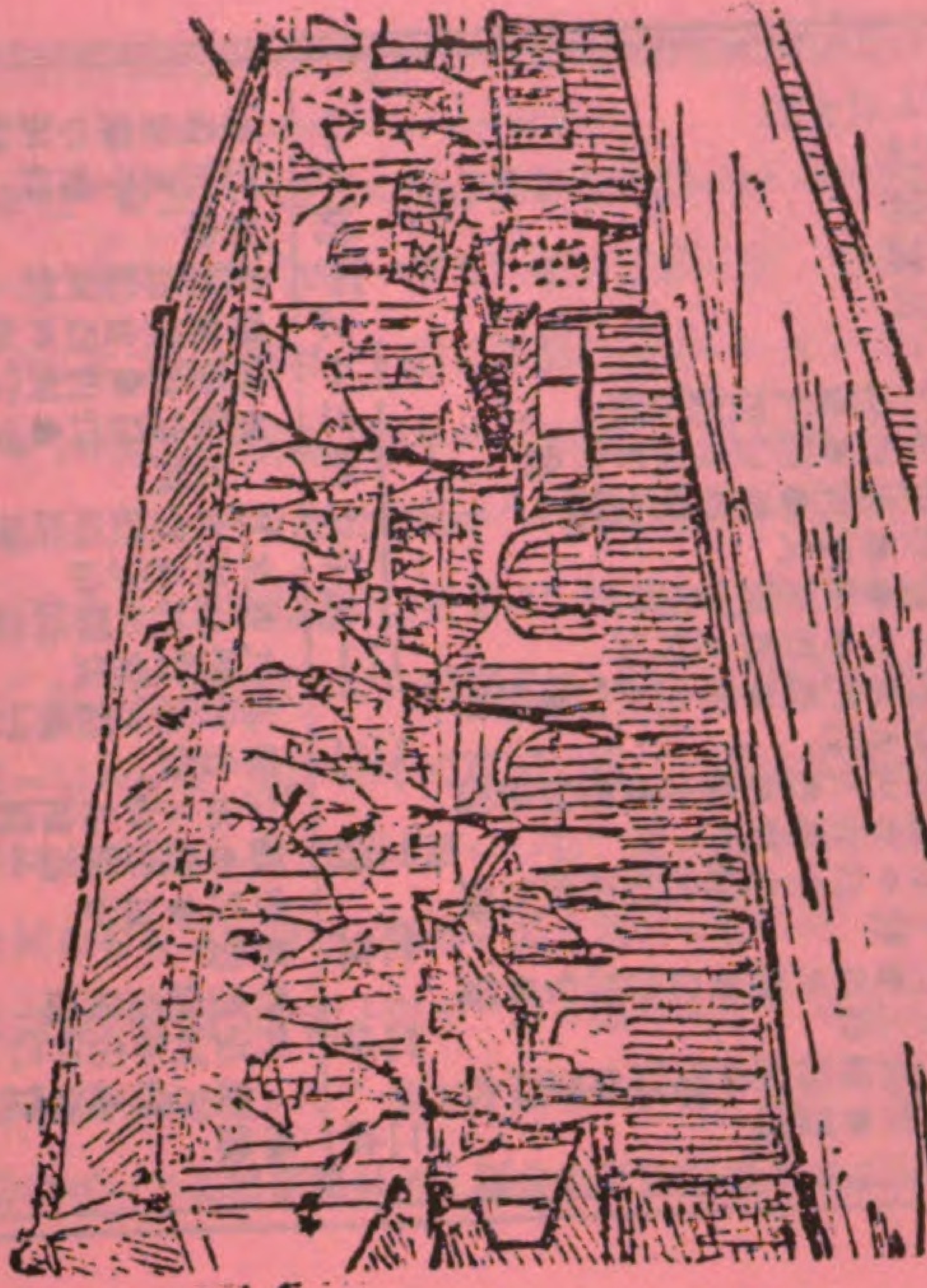
明治廿五年九月十四日遞信省認可

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　秀英舍印行

家庭雜誌第五號附錄

國民便覽

明治廿六年一月十五日



東京市京橋區日吉町四番地

家庭雜誌社

紀元二千五百五十三年 * 明治二十六年

大祭日	
四方拜	一月一日
元始祭	一月三日
孝明天皇祭	一月三十日
紀元節	二月十一日
春季皇靈祭	三月二十日
神武天皇祭	四月三日
秋季皇靈祭	九月廿三日
神嘗祭	十月十七日
天長節	十一月三日
新嘗祭	十一月廿三日

節氣	
小寒	一月五日
大寒	一月二十日
節分	二月三日
初午	二月二日
八十八夜	五月一日
入梅	六月十一日
夏至	六月廿一日
半夏生	七月二日
二百十日	八月卅一日
冬至	十二月廿一日

甲子	庚申
一月廿七日	一月廿三日
三月廿八日	三月廿四日
五月廿七日	五月廿三日
七月廿六日	七月廿二日
九月廿四日	九月二十日
十一月廿三日	十一月十九日

社日	彼岸
三月廿二日	三月十七日
九月十八日	九月二十日

一月大

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30	31	..	..	..	..

二月平

日	月	火	水	木	金	土
..	..	..	1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	..	..	..	..

三月大

日	月	火	水	木	金	土
..	..	..	1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30	31	..

四月小

日	月	火	水	木	金	土
..	..	..	..	..	..	1
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23	24	25	26	27	28	29
30		..		..		..

五月大

日	月	火	水	木	金	土
..	1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28	29	30	31	..	..	..

六月小

日	月	火	水	木	金	土
..	..	..	..	1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	..

七月大

日	月	火	水	木	金	土
..	..	..	..	..	..	1
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23	24	25	26	27	28	29
30	31	..	..	..		..

八月大

日	月	火	水	木	金	土
..	..	1	2	3	4	5
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	30	31	..	..

九月小

日	月	火	水	木	金	土
..	..	..	..	..	1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30

十月大

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30	31	..	..	..	..

十一月小

日	月	火	水	木	金	土
..	..	..	1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30	..	..

十二月大

日	月	火	水	木	金	土
..	..	..	..	..	1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30
31	..	..	..	..	..	..

目錄

喬木風多し。國民之友は、明治二十年二月其の初號を發兌してより以來、數多の敵に出逢ひたり、而して獨力を以て百敵と戰ひ、今日に到る迄、其の地位の主人公たり。然れども更らに狎れ惰る所なく、恒に世運に先んじて進歩しつゝあり。特に數月以來目覺しき一大長足の進歩を做せり。『史論』を新設せり、是れ歷史は過去の政治、政治は現今の歷史なる格言に據り、人生に關する新觀察と新知見とを與たへんが爲め。批評の中に『群評』二三を加ふ、號毎に。是れ專門の作家が專門の作を評するもの、眞に批評の標木たる價値ありと信す。『當今之問題』なる一欄は、最も極力結構したるもの、總て當今の問題に就て、我邦諸新聞雜誌議論の要領を記す、所謂事實を中心として議論を斷くもの、間ま記者の意見を挿むものあり。『海外思潮』は其の名の示す如く、歐米列國の重なる政治家、學士、文人、事業者、美術師等の最新なる意見の粹を拔き、精を摘むもの。『大勢一斑』は特に天下大勢の時移刻動を示すものにして、毎月一回必らす出て來る。是れ則ち文明史の月報也、年を積む久しければ宛然たる一個の日本文明史となる可し。『經濟

事情』は是迄餘事に屬したれども去月來の進歩と共に、專門の記者をして、精撰評押、肯綮にして事全く、人をして一目其事情を瞭然たらしむ。的に是れ變化の要領のみ、其の他は舊に仍りて舊よりも進歩せり。

讀者若し吾人の言を疑はゞ、請ふ近刻の國民之友に徵せよ。

定價

		前金	府外郵税共
一冊	……	六錢	六錢五厘
九冊	三ヶ月	五拾四錢	五拾八錢五厘
十冊	……	六拾錢	六拾五錢
十八冊	半ヶ年	壹圓壹錢	壹圓四拾錢
二十四冊	……	壹圓拾錢	壹圓廿錢

二十冊以上一冊五錢五厘の割市外は別要郵税

發行所　東京市京橋區日吉町四番地　電話七十番　民友社

渴不飮盜泉水。熱不息惡木陰。
惡木豈無枝。志士多苦心。

◎新聞の要は、社會を描き、社會を評し、社會を導くにあり。彼は、自から此の重責に任ず、其の描くや大膽敏直、其の評するや精透、而して其の社會を導くや、恰も野に叫ぶ預言者の聲也。

◎彼は新聞を作らんが爲めに、政治を論ずるものにあらず、政治的革新の大目的を遂せんが爲めに、新聞を假りて政治を論ずるのみ。其の位置の不羈にして、獨自一己の識見を具するが如きは、固より實を俟たず。

◎彼は總ての問題に於て急先鋒たり、特に社會問題は、彼の肝血の一斗注ぐ處。

◎文學上には健全なる思想、清新なる趣味の鼓吹者たり、實業上には、自由と勤勉の味方にして、壟斷と惰怠の敵也。

◎彼は社會の森羅萬象に向て、其の注意と感情を注射す。彼は世の不正を見ては、痛擊餘力を剩さずと雖、正義を見れば、踊躍唯た及はさらんとを恐れ惴る。如何なる場合に於ても、彼は壓制者に背を向け、被壓制者に顏を向く。

◎急轉直下の樣は、彼が平昔蓄積したる力を揮ふ得意の時なり、一の大事件あれは、必らず此に應ずるの大奮勵あり。

◎社會が一の恐懼を爲し、一の過渡に接するや、彼は社會に先んじて、之を報し、之を警め、之を導き、之を勵ます。

◎帝國議會に於て彼が如何に超群の伎倆を逞ふしたるを知るものは、亦た必らず其の實の虚ならざるを知らん。

◎彼は新聞たるの良心と、智識と、品格とを有せんとを期す、而して自から期する所に負かざるを信す。

◎彼は我邦に於ける新聞らしき新聞なり。唯一と云ふ能はずんは、其の重なる一ならん。

◎進歩は、彼の特色なり、彼は進歩を首唱し、而して彼自から日に進歩しつゝあり。

◎彼とは誰ぞ、國民新聞也。

定價	
一枚一錢五厘 一ヶ月前金卅錢 三ヶ月金八十五錢 但地方は郵税一枚五厘一ヶ月十三錢を要す	

廣告料　一行の代價左の如し（但五號活字二十二字詰）

	十行以下	十一行以上	卅一行以上
一日限り	十錢	九錢五厘	九錢
二日以上	九錢五厘	九錢	八錢五厘
五日以上	九錢	八錢五厘	八錢

發行所　東京市京橋區日吉町四番地　電話七十番　國民新聞社



家庭雜誌は社會の地盤を改革し、有爲健全なる新人民を育し、高潔仁慈なる新婦人を扶け、以て和樂光明なる新家庭を作らしめんと欲するものなり、其論評は平直にして其觀察は特拔、其意匠は嶄新にして其文辭は明白、史談あり今古東西の烈女偉人を活躍發揮の筆もて寫し、科學あり最も愉快なる方法に由りて實用に適せる物質的文明の發暢を助く、文藝には高妙なる小説綺麗なる詩歌音樂絵畫批評詩話文話其の外高妙の感想を養ふべきすべてあり、家政には家事經濟育兒法衛生談看病術調理法社交一斑日用品物價並縫裁物婦人の職業案内家内の取締奴婢の使ひ方及び衣食住に關する諸事を載す、雜錄あり、時事一斑あり、寄書投書あり、小供の爲にせる記事あり、普通雜誌の外別に一種の生面を開けり、

發行所　東京市京橋區日吉町四番地　電話七十番　家庭雜誌社



年度	歳入	歳出
十六年度(決算)	八三、一〇六、八五九円	八三、一〇六、八五九円
十七年度(決算)	七六、六六九、六五四	七六、六六三、一〇八
十八年度九ヶ月(決算)	六二、一五六、八三五	六一、一一五、三一三
十九年度(決算)	八五、三二六、一四四	八三、二二三、九六〇
二十年度(決算)	八八、一六一、〇七四	七九、四五三、〇三六
廿一年度(現計)	九二、八一四、八〇六	八一、〇八九、〇一三
廿二年度(現計)	九六、六八七、九七九	七九、七一三、六七一
廿三年度(現計)	一〇六、〇一三、〇五〇	八四、一四六、五六七
廿四年度(豫算)	八三、四六二、五三二	七七、〇一二、二五三

名譽は彼の燦然たる泡球の如し、其最小の部分破るれば全躰忽ち消て跡なし。

サムエル、バツトラル



ひふのみと春を思はぬ時だにも
たつこさやすき花の影かは

釣 恒

年別	總數	內國債	外國債
十六年	三三五、三七〇、〇〇〇円	三二六、四六〇、〇〇〇円	八、九一〇、〇〇〇円
十七年	三二四、七一〇、〇〇〇	三一六、二三〇、〇〇〇	八、四八〇、〇〇〇
十八年	三二八、九六〇、〇〇〇	三二〇、九五〇、〇〇〇	八、〇一〇、〇〇〇
十九年	三二二、三六〇、〇〇〇	三一四、八四〇、〇〇〇	七、五二〇、〇〇〇
二十年	三〇八、七五〇、〇〇〇	三〇一、二三〇、〇〇〇	七、五二〇、〇〇〇
二十一年	三〇一、一八〇、〇〇〇	二九四、一九〇、〇〇〇	六、九九〇、〇〇〇
二十二年	二九四、八九〇、〇〇〇	二八八、四六〇、〇〇〇	六、四三〇、〇〇〇
二十三年	三〇〇、八三〇、〇〇〇	二九五、〇〇〇、〇〇〇	五、八三〇、〇〇〇
二十四年	三〇八、四二〇、〇〇〇	三〇三、二四〇、〇〇〇	五、一八〇、〇〇〇
二十五年	三〇一、七八〇、〇〇〇	二九七、二九〇、〇〇〇	四、四九〇、〇〇〇

山不厭高　海不厭深

曹 孟 德

春光一點



貨幣鑄造額

年度	總額	金	銀	白銅	銅
十六年 (自明治十一年 [illegible] 至十六年六月)	一八三、四六〇、〇〇〇円	六二、四四〇、〇〇〇円	一〇四、八四〇、〇〇〇円		一二、四一〇、〇〇〇円
十六年	五、三九〇、〇〇〇	四九〇、〇〇〇	三、八三〇、〇〇〇		一、〇七〇、〇〇〇
十七年	七、四七〇、〇〇〇	八四〇、〇〇〇	五、八七〇、〇〇〇		七六〇、〇〇〇
十八年 九ヶ月	五、〇六〇、〇〇〇	六五〇、〇〇〇	四一〇、〇〇〇		三一〇、〇〇〇
十九年	一一、一五〇、〇〇〇	一、一五〇、〇〇〇	九、六〇〇、〇〇〇		四〇〇、〇〇〇
二十年	一一、六五〇、〇〇〇	九七〇、〇〇〇	一〇、二三〇、〇〇〇		四六〇、〇〇〇
廿一年	一一、六一〇、〇〇〇	九三〇、〇〇〇	一〇、四五〇、〇〇〇		二三〇、〇〇〇
廿二年	一一、一五〇、〇〇〇	一、七六〇、〇〇〇	七、二九〇、〇〇〇	二、一〇〇、〇〇〇	
廿三年	一一、〇一〇、〇〇〇	八九〇、〇〇〇	八、四五〇、〇〇〇	一、六七〇、〇〇〇	

貨幣流通額

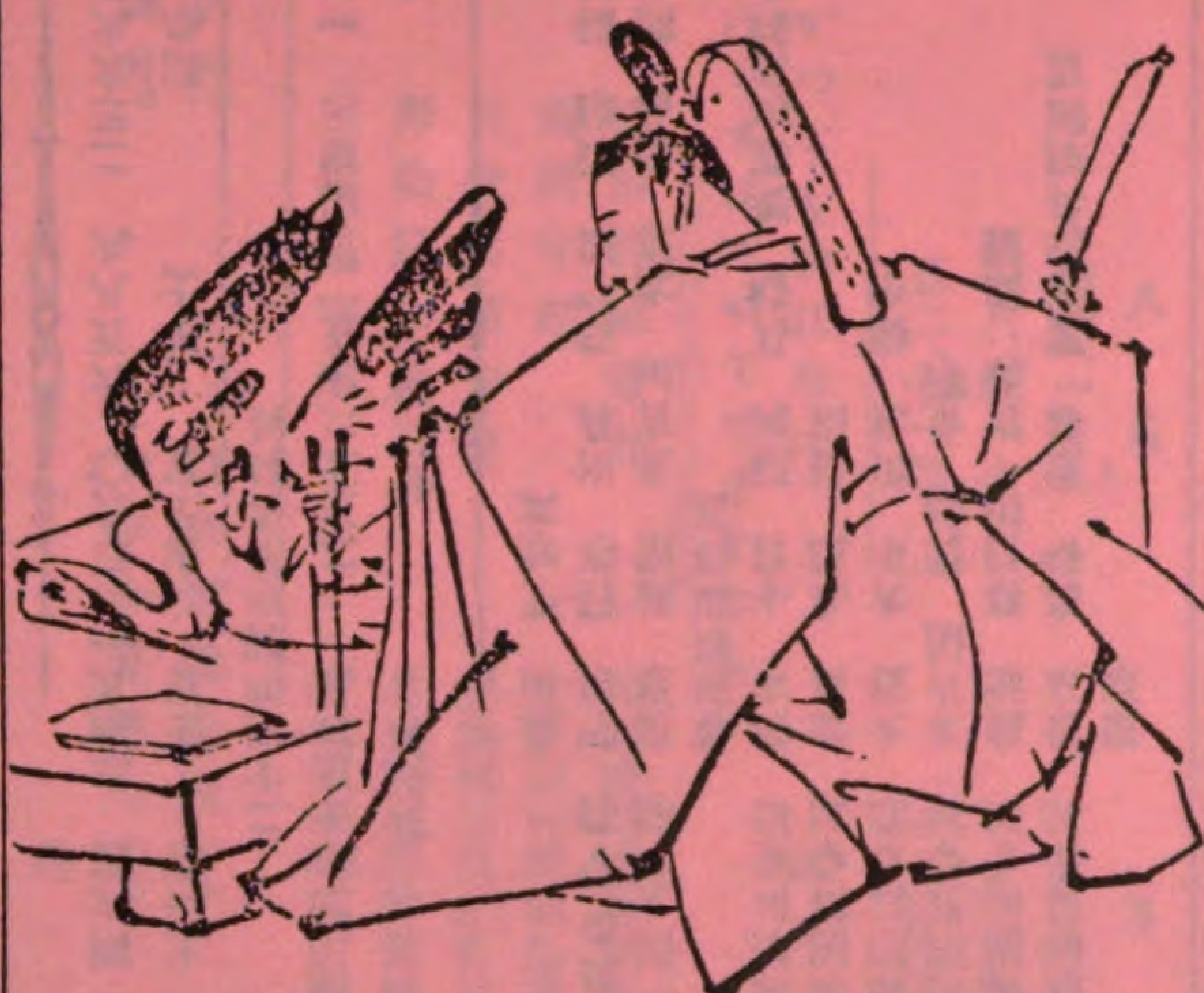
年度	總額	金	銀	白銅	銅
十九年	六一、七一〇、〇〇〇円	一三、二九〇、〇〇〇円	三三、三四〇、〇〇〇円		一五、〇八〇、〇〇〇円
廿年	六二、二八〇、〇〇〇	一四、一一〇、〇〇〇	三三、二六〇、〇〇〇		一四、九一〇、〇〇〇
廿一年	六七、六五〇、〇〇〇	一四、六九〇、〇〇〇	三八、一六〇、〇〇〇		一四、八〇〇、〇〇〇
廿二年	七三、七一〇、〇〇〇	一六、三六〇、〇〇〇	四三、八七〇、〇〇〇	一、四四〇、〇〇〇	一二、〇四〇、〇〇〇
廿三年	七〇、六八〇、〇〇〇	一六、二七〇、〇〇〇	三九、五五〇、〇〇〇	三、四〇〇、〇〇〇	一一、四六〇、〇〇〇

年度	總額	紙幣	銀行紙幣	兌換銀行幣紙
十九年	一一五,二四〇,〇〇〇円	七八,六六〇,〇〇〇円	一二,〇一〇,〇〇〇円	六,六〇〇,〇〇〇円
二十年	一三一,九八〇,〇〇〇	六六,四〇〇,〇〇〇	二九,二八〇,〇〇〇	三六,三〇〇,〇〇〇
二十一年	一三一,五一〇,〇〇〇	五三,五七〇,〇〇〇	二八,三二〇,〇〇〇	四九,六二〇,〇〇〇
二十二年	一三二,九〇〇,〇〇〇	四五,四七〇,〇〇〇	二七,三三〇,〇〇〇	六〇,一〇〇,〇〇〇
二十三年	一三三,三二〇,〇〇〇	四〇,〇七〇,〇〇〇	二六,三九〇,〇〇〇	六六,八六〇,〇〇〇
二十四年	一二八,七八〇,〇〇〇	三一,三七〇,〇〇〇	二五,四六〇,〇〇〇	七一,九五〇,〇〇〇

英雄何必讀書史。直攄血性為文章。不仙不佛不聖賢。
筆墨之外有主張。縱横議論析時事。如醫療病進藥方。

鄭板橋

年度	預ヶ金高	預ヶ人員	人口一人ニ付
十九年	一五,四〇五,四〇四円	四九〇,三三七人	•四〇〇円
二十年	一八,二一三,二八二	五六八,八四九	•四六六
二十一年	一九,七五八,四八二	六六五,八八二	•四九九
二十二年	二〇,四四一,三五四	七六二,八六九	•五一〇
二十三年	一九,五一四,八四四	七九七,四八六	•四八二



税目	税額	税目	税額
地租	三八、七七一、三三九円	所得税	一、〇五八、四四一円
酒造税	一五、五六〇、四三五	醬麴營業税	二八、二二二
烟草税	一、八四四、八六一	證券印税	五九一、五九二
醬油税	一、二九七、七五二	菓子税	六三八、一九二
沖繩縣酒類出港税	一〇一、〇九二	米商會所税	一〇六、四六四
株式取引所税	八七六、〇〇〇	國立銀行税	二二一、八五〇
賣藥税	四五五、四七七	船税	二六九、九〇一
車税	六三二、二三五	度量衡税	二、五一二
北海道水産税	二一九、四八〇	銃獵免許税	七三、九九〇
牛馬賣買免許税	七二、六六六	海關税	四、四七九、〇九六
總計	六六、四二三、一九七		

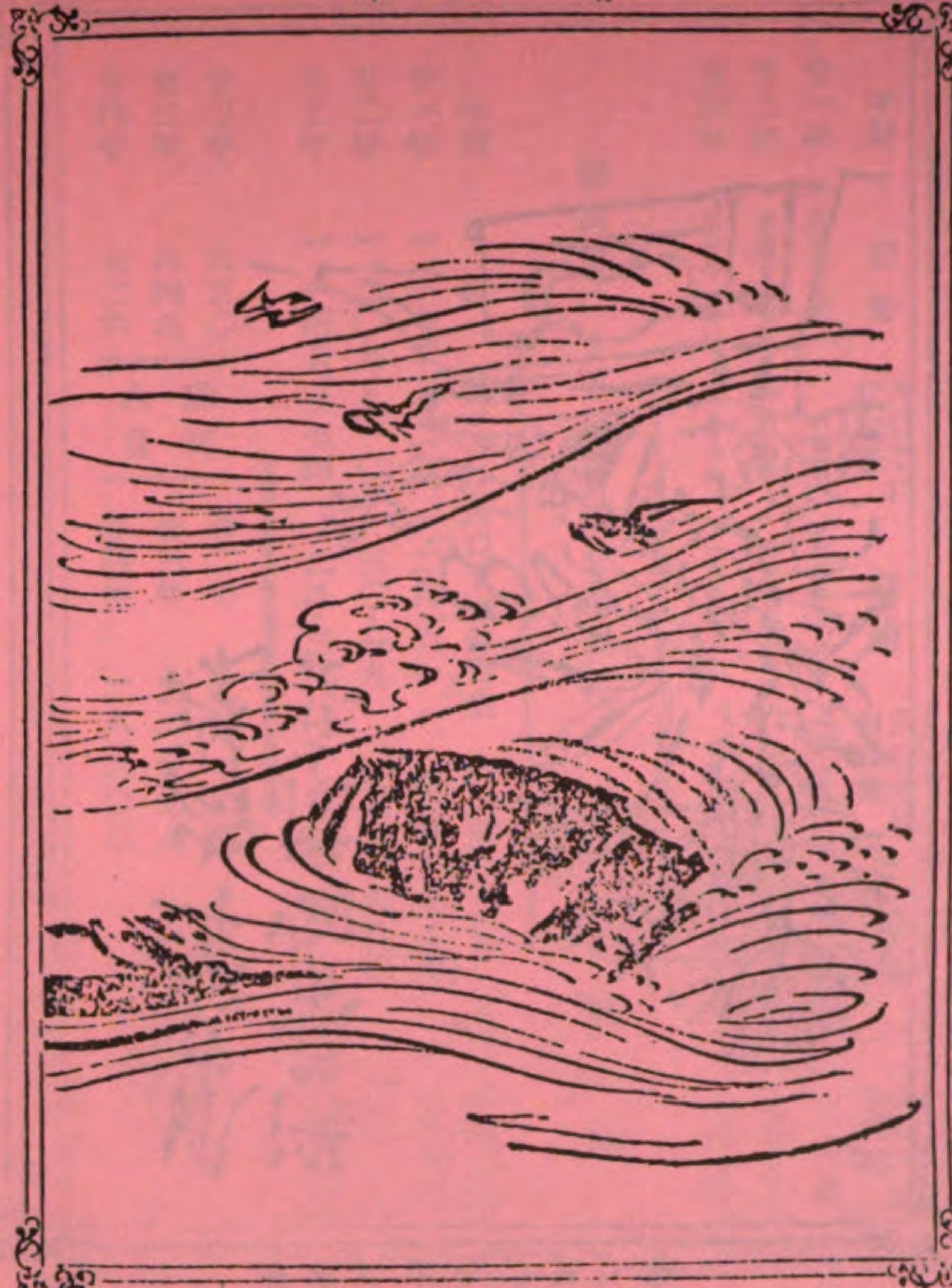
	人員	所得金	税額
二十一年	一一九、八九七人	八〇、九四五、八五八円	一、〇六八、七七九円
二十二年	一一五、六四三	七八、八八一、八六三	一、〇五六、二五五
二十三年	一一五、八三三	八一、〇四七、三七一	一、〇八八、四七六

近衛	東京
第一師團司令部	東京　高崎　佐倉　要塞砲兵隊浦賀
第二師團司令部	仙臺　新發田　青森　函館
第三師團司令部	名古屋　豐橋　金澤
第四師團司令部	大坂　大津　伏見　姬路
第五師團司令部	廣島　丸龜　松山
第六師團司令部	熊本　小倉　福岡　長崎　要塞砲兵隊赤間關　警備隊區沖繩
	警備隊區對馬
憲兵司令部	東京　仙臺　名古屋　大坂　廣島　熊木
屯田兵司令部	琴似　發寒　山鼻　新琴似　篠路　輪西　江別　篠津　和田
	太田　空知太

	廿二年	廿三年
陸軍	二四五五二八	二五五六七五
海軍	一二九二〇	一二六三三

二十三年陸軍軍人種別

將官	上長官	士官	准士官	下士	諸卒	職工	諸生徒
五七	四九四	三四九一	三九〇	九五八九	二三九九三四	一六五	一九〇六



年度	人員	月俸
二十一年	四七、一五九人	九五六、〇五四円
二十二年	四八、四一七	九七九、四四二
二十三年	五二、七一四	一、〇五四、三七一

久方の月のかつらも秋はなほ
もみぢすればやてりまさるらん　忠岑

第一海軍區	横須賀鎮守府	相模國三浦郡横須賀港
第二海軍區	呉鎮守府	安藝國安藝郡呉港
第三海軍區	佐世保鎮守府	肥前國東彼杵郡佐世保港
第四海軍區	舞鶴鎮守府	丹後國加佐郡舞鶴港（未開）
第五海軍區	室蘭鎮守府	膽振國室蘭郡室蘭港（同上）

賀蘭烽火接居延。白草黄雲北到レ天。
一片城頭青海月。十年沙磧使レ人眠。　高啓



戸數及人口
(明治廿四年十二月卅一日現在)

年別	二十一年	二十二年	二十三年
戸數	七、八〇二、八二六	七、八四〇、八七二	七、八〇六、〇五二
人口	三九、六〇七、二三四	四〇、〇七二、〇二〇	四〇、四五三、四六一
內	男 二〇、四三一、〇九七	女	二〇、〇二二、三六四
平均一戸ノ人口	五、〇八	五、一一	五、一八
女百人ニ對スル男	一〇二、〇九	一〇二、一二	一〇二、〇四

(備考) 皇族以上は算入せす

石門高峽沙丘寒。五馬春停天地開。無限北風吹不到。萬家明月待君來。　王世貞

族籍別人員
(二十三年十二月卅一日現在)

族籍					
華族	三、七六八	戸主	五八九	家族	三、一七九
士族	二、〇〇八、六四一	同	四三二、〇四四	同	一、五七六、五九七
平民	三八、四四〇、〇三四	同	七、七六二、三二三	一同	三〇、六七二、九八七 四、七二五
合計	四〇、四五二、四四三				

(備考) 前項の人口と一、〇一八の差あるは在監無籍人を除きしに由る

年別	結婚	人口千に付結婚	離婚	人口千に付離婚	配偶	人口千に付配偶
廿一年	三三〇、二四六人	八・三四人	一〇九、一七五人	二・七六人	七、四一九、九五三人	一八七・三四人
廿二年	三四〇、四四五	八・五〇	一〇七、四七八	二・六八	七、四四五、一一九	一八五・八〇
廿三年	三二五、一四一	八・〇四	一〇九、〇八八	二・七〇	七、四二八、九〇一	一八三・六五

難波津にさくやの雨や梅の花　宗因

年別	出生	人口千に付出生	死亡	人口千に付死亡
廿一年	一、一七二、七二九人	二九・六一人	七五二、八三四人	一九・〇一人
廿二年	一、二〇九、九一〇	三〇・一九	八〇八、六八〇	二〇・一八
廿三年	一、一四五、三七四	二八・三一	八二三、七一八	二〇・三六

年	人員
廿二年	六五〇人
廿三年	八四六
廿四年	七二六

變死

年	人員
廿二年	二〇、七二六人
廿三年	二二、五二八
廿四年	二八、八〇二



	二十二年	二十三年	二十四年
博士	五〇	五〇	一一八

內
法學博士 一八　醫學博士 三〇　工學博士 三〇
文學博士 一四　理學博士 二六

帝國大學卒業生 一、〇二六　一、三九五　一、四九八

內
法學士 二九五　醫學士 三六六　工學士 三二四
文學士 七三　理學士 一七八　製藥師 三一
藥學士 六　農學士 八四　農藝化學士 一七
林學士 五三　工科大學卒業生 一一

年別	學齡人員	學齡就學	學齡人員百中就學
二十一年	六、九二〇、三四五	三、二七七、四八九	四七•三六
二十二年	七、〇七八、五六四	三、四一〇、四二二	四八•一八
二十三年	七、一九九、五一二	三、五二〇、七一八	四八•九三

	二十一年	二十二年	二十三年
收入	九、五三〇、一〇〇	九、五九一、六〇〇	九、八七九、八〇〇
支出	八、一六四、九〇〇	八、三五七、二〇〇	八、六七五、一〇〇

年別	醫師	產婆	藥劑師	藥種商	製藥者
二十一年	四〇、九四〇	三〇、八六〇	一、五五一	九、八三〇	—
二十二年	四一、四〇五	三二、一一一	二、〇二九	一〇、七四四	—
二十三年	四一、八〇八	三二、五〇五	二、六二三	一〇、三九〇	一、二〇一

耕作 五、五一八、〇四〇戶
專業 自作 二、一七〇、六五三　小作 一、五一九、二〇〇
兼業 自作 八三七、四〇六　小作 七九二、〇九七
捕漁採藻兼業 自作 一一三、〇一七　小作 八五、六六八

捕魚採藻 三四三、〇二三戶
專業 一四〇、八四一
兼業 七一、九三〇
耕作兼業 自作 六八、五九四　小作 六一、六五八

大工	一六七、九六四	木挽職	八三、八一三	桶工	五一、九八七
鍛工	四六、六六八	石工	二九、三〇二	柚職	二一、一三一
船大工	一一、五一五	縫工	一〇、七九八	靴工	二、九三〇
鞍工	一、〇一二	銃工	五八七	合計	四三四、七八四



民事訴訟

事項	廿一年	廿二年	廿三年
新訴	三八五、二〇七	三八二、一二八	四五八、三二三
上告控訴特別訴訟判決	六、六二二	六、八九三	七、三九六
始審勸解判決	三八六、〇九〇	三七八、三九三	四五六、一七三

身代限

年度	被告件數	負債主人員	債主人員	負債金額	償還金額
廿二年	三、八五五	五、三五三人	六、七〇三人	八五三、一四四円	一七九、六六八円
廿三年	三、六九六	四、四七七	五、六二四	七六九、八三七	一六〇、六六七

公費還分

年度	不納人員	不納金額	公費上納不足金額
十九年度	六一、二五六人	一〇、六五六円	二、一九九円
二十年度	三五、〇九六	六、四〇三	二、三四二
廿一年度	一一、六六三	二、九五一	一三四
廿二年度	七、九六八	二、〇四二	三〇九

登記件數及手數料

事項	廿一年	廿二年	廿三年
件數	二、三〇四、三五一	二、六一三、二六四	三、三四四、八九九
登記料手數料	一、〇四六、九六二円	一、一九二、二三五円	一、三九四、八九二円



重輕罪犯及罰則違犯

事項	廿一年	廿二年	廿三年
重輕罪犯	一〇五、八七五	一〇八、七九三	一四九、一八二
重輕罪犯處刑人員	一〇五、二九三	一〇八、六六八	一四九、〇四九
罰則犯	―	一二三、一二四	八七、五一八

監獄

年度	總數	監獄及支署	集治監及分監	假留監	在監人
二十二年	一八四	一八〇	三	一	六四、〇〇八
二十三年	一六六	一五九	六	一	六九、四四六
二十四年	一六七	一五九	七	一	七三、五九四

入監人員

廿二年	廿三年	廿四年
六二、〇七五	七九、五八三	八二、三五八

火災

	廿二年	廿三年	廿四年
火災の度數	一三、四三六	一五、一二〇	一八、六七六
火災に罹りし家	三〇、二三六	三九、五〇四	四八、五七三

盜難

	廿二年	廿三年	廿四年
盜難に遭ひし家	二四九、七六五	三九二、六四二	三六五、六三二
盜難に遭ひし船	二、九一五	四、七九六	五、一八〇
盜難に遭ひし人	二九、九七六	四七、一二三	五一、九四七

尋常終身保険　は被保険人存命中は何年にても保険料を拂込の法なれども

有期掛金終身保険　は一年、五年、十年、十五年等一定の年限を限り保険料を拂込の法にして其年限を經れば保険料の拂込を要せず死後遺族に契約面金額を拂渡すものとす若し年期中被保険人死去するも契約面の保険金を拂渡すなり

養老保険　は四十、四十五、五十歳等の年齢に至れば被保険人契約面の金額を請取り老後餘生を送るの資となすものとす假令は十五歳の人一年拂込四十歳請取養老保険を托せば保険金額百圓に付一回金四十六圓十二錢を拂込めば以後拂込なしに四十歳の時に至り被保険人生存せば契約面の保険金百圓を交付すべし又數年拂濟養老保険なれば十五歳の人四十歳請取の契約を結べば年掛三圓廿四錢を二十五回拂込み最終の拂込を終りし一年後に會社より契約面の金額を交付すべし若し年齢滿期に至らずして被保険人死歿する時は亦遺族に契約面の金額を拂渡すものとす

短期保険　は一年或は數年の期限を定め其年期中に被保険人死歿する時は契約面の金額を遺族に拂渡すものとす若し幸に無事なれば保険料は損失となる

落花枝にかへるさ見れば胡蝶かな

守武



地所建物船舶賣買及讓與の登記は賣買代價又は時價相當の價格に從ひ買受人又は讓渡人より出す。賣買代價又は時價相當價格五圓未滿登記料五錢。五圓以上十錢。十圓以上二十五錢。二十五圓以上五十錢。五十圓以上一圓。百圓以上二圓。二百圓以上三圓。三百圓以上四圓。四百圓以上五圓。五百圓以上六圓。七百五十圓以上七圓。千圓以上八圓。千五百圓以上九圓。二千圓以上十圓。五千圓以上一萬圓まて十二圓。以上五千圓まて每に二圓を增加す。

地所建物船舶質入書入登記、貸借の爲めに非すして義務を果すへき保證の爲め地所建物船舶の質入書入登記、地所建物船舶に關する差押、假差押、差留、假差留、假處分及地所建物の收益差押の記入は、登記料の半額(但し五錢を下らす)。

家督相續及遺留したる地所建物船舶を相續するものゝ登記は地所一筆三錢。建物船舶は時價に從ひ登記料五分の一。

登記事件の取消は變更の登記を請ふもの每一件、登記の謄本若くは抜萃を請ふもの每一枚、登記の一覽を請ふものは、手數料五錢。



地租　地價百分の二個半。北海道は百分の一。琉球伊豆七島小笠原島は從前の通り。

所得税　人民の資產又は營業其他より生ずる所得金一箇年三百圓以上あるものに課税す（同居の家族に屬するものは戶主の所得に合算す）

所得金高三萬圓以上百分の三。二萬圓以上百分の二半。一萬圓以上百分の二。千圓以上百分の一半。三百圓以上百分の一。

酒造税　酒造免許税は酒造所一箇所に付三十圓。北海道（函館を除く）は二十圓。酒類造石税は一石に付釀造酒四圓。（北海道は二圓）蒸溜酒五圓三圓。再製酒六圓四圓。自家用料鑑札料八十錢。

特飴營業税　五十圓

煙草税　製造營業税は營業所一ヶ所に付一年十五圓鑑札料二十錢。仲買營業は十五圓仕入鑑札料十錢。小賣營業税五圓出賣鑑札料十錢。煙草製造人製造の時定價十分の一の煙草印紙を貼用す。

證券印税（其一）　當座預り金引出小切手及び委任狀は五厘。金高記載なき約定證文、讓金(物)證文、跡式證文、讓與證文、期限を定めざる預り金證文、耕地小作證文、雇人請合狀、金高記載なき物品預り證文、全借用證文、地所家屋預り證文、諸物品切手、借地借家證文、賣買仕切書、保險證書、諸會社株券、送金手形、金錢諸物品通帳、結社約定書は一錢。金錢物品判取帳は二十錢。

證券印税（其二）　金高五圓以上に限り印紙を貼用すべきものは下の如し。營業に關する送狀及請取書一錢。金錢借用證文、地所家屋賣買證文、金高記載ある物品預り證文、全借用證文、物品賣買證文、金錢定期預り證文、金高記載ある契約證書、一圓以上一錢。二十圓以上二錢。五十圓以上四錢。百圓以上六錢。百五十圓以上八錢。二百圓以上十一錢其他。金錢當座預り證文、貨物預り書小札、一圓以上一錢。二十圓以上二錢。爲替手形、荷爲替手形、約束手形、五十圓未滿一錢。五十圓以上二錢。百圓以上四錢。二百圓以上八錢其他。

醬油税　營業税（一製造所一ヶ年）五圓。造石税、醬油は諸味一石に付一圓、溜は製成一石に付一圓。

菓子税　製造及卸賣營業税、雇人十人以上のもの一年二十圓。六人以上のもの十五圓。三人以上のもの十圓。二人以上のもの五圓。一人のもの三圓。なきもの一圓。小賣營業税、雇人三人以上のもの七圓。二人のもの三圓。一人のもの二圓。なきもの一圓。製造税、菓子賣上金高百分の五。鑑札料、營業鑑札二十錢。仕入鑑札十錢。出賣鑑札十錢。

駒とめて袖うちはらふかげもなし
佐野のわたりの雪の夕暮
定家

民事訴狀正本一通に付請求の金額若くは價額五圓まで二十錢。十圓まで三十錢。二十圓まで六十錢。五十圓まで一圓五十圓。七十五圓まで二圓廿錢。百圓まで三圓。二百五十圓まで六圓五十錢。五百圓まで十圓。七百五十圓まで十三圓。千圓まで十五圓。二千五百圓まで廿圓。五千圓まで廿五圓。以上千圓まで毎に二圓を加ふ。

控訴は右の半額。上告は全額。

人事其他の金額に見積るべからざるものは三圓。

答辯書。證據物寫。檢證書。辯論書。上申書。陳述書等。證人。鑑定人。評價人。引合人等の呼出を請求する願書。期日の延期を請求する願書は正本一通二十錢。」官吏の臨檢を請求する願書。執行命令書を請求する願書。財産差押又は物品公賣を請求する願書。身代限り處分を請求する願書は五十錢。

裁判言渡書の謄本を下付するとき差出す受取書には其謄本一枚五錢其他の謄本を下付するとき差出す受取書には其謄本一枚三錢の割合を以て印紙を貼用せしむ勸解には勸解表に署名のとき一件毎に二十錢。

子や泣ん其子の母も蚊の食はん　嵐雪



郵便貯金條例摘要

詩歌は最幸最善なる精神の最幸最善なる瞬間の記錄なり　シエルリ

第四條　郵便貯金一人一度の預金は十錢以上とし(端數は厘位に限る)一人一日の預金は五十圓以下とす郵便貯金一人の預金總額は元利合せて五百圓に超過することを得ず

第五條　郵便貯金の利子は毎年三月卅一日を期として之を計算し元金に加へ四月より更に利子を付すべし

第六條　郵便貯金預け人には何時にても郵便貯金の金額又は其幾分の拂戻を請求することを得

第七條　郵便貯金預け人は其貯金の幾分を以て公債證書の購入保管を請求することを得、但其公債證書は額面五十圓又は五十圓を追加したるものに限る

第九條　郵便貯金通帳は一人一冊を限りとす若二册以上を受領して貯金預入を爲したるものは最初受領せし通帳に記載せる貯金の外利子を付せずして拂戻をなさしむ

第十條　郵便貯金預け人は最初貯金の預入をなしたる月より滿一年毎に其通帳を遞信省に差出し前期利子の記入を受くべし、但一年の終期四月又は五月に當るものは之を六月に差出すべし

第十三條　郵便貯金預け人は郵便貯金を家督相續人に讓與する場合を除くの外其名前書換を請求することを得ず

郵便稅

書狀　重量二匁毎に二錢。

郵便葉書　一葉一錢。往復のもの二錢。

毎月一回以上發行する定時刊行物及附錄　一號一個十六匁毎に五厘。二號又は二個以上十六匁毎に一錢。

書籍、帳簿、各種印刷物、寫眞、書畫、繪畫、原紙、營業品見本雛形、農產物種子は三十匁毎に二錢

內國電報料

和文片假名十字以內(一音信)十五錢(一市內發着は五錢)。加十字毎に增十錢(一市內發着は三錢)。

歐文五語以內(住所氏名共)二十五錢(一市內發着は十錢)。加一語毎に增五錢(一市內發着は二錢)。

壹岐對馬へは歐文壹岐へ十錢。對馬へ十五錢。

至急官報は通常の二倍私報は三倍。

追尾は一回毎に原信料の半額。

同文電報料は原信を除て一通和文五錢。歐文十五錢。

照校電報料は原信料半額を增す。受信電報料は和文一音信歐文五語の料金を增す。

電信爲替料

金高五圓迄　廿八錢　十圓迄　三十錢

二十圓迄　卅五錢　卅圓迄　四十錢

地名	墨國弗一語料金(メキシコ弗)	香港弗一語料金(同)
歐洲各地へ	二弗廿一仙	三弗二仙六
歐洲露國へ	一弗六十仙六	三弗二仙六
亞洲露國へ	一弗六十六仙六	三弗廿三仙二
華盛頓へ	二弗五十五仙八	三弗廿七仙二
紐育へ	二弗五十一仙	三弗三十二仙六
桑港へ	二弗七十六仙六	三弗四十八仙二
香港へ	一弗十六仙	四弗五仙二

地名	墨國弗一語料金(メキシコ弗)	香港弗一語料金(同)
新嘉坡へ	三弗四十五仙二	二弗
錫蘭へ	二弗七十六仙八	二弗八十五仙二
濠洲へ	四弗十七仙二	一弗廿八仙
マニラへ	四弗五十九仙二	一弗七十仙
釜山浦へ	六十仙 上海へ 一弗八仙	六十八仙 北京へ
厦門へ	上海より上海弗一弗四仙	厦門一弗一仙

交換使用料　東京横濱兩市内一箇年額　金三十五圓

電話料　京濱兩市内一通信(五分時間)　金五錢宛

京濱間一通信(仝)　金十五錢宛

電話交換局ある市町外の地に電話器を設置する時は其市町の境界を去る三町毎に一箇年三圓、一人にして同一の家屋又は地所内に於て同一の回線中に二箇以上の電話器を設くる時は一箇を除き其他一箇毎に一箇年八圓又電話器外別に電鈴を設くる時は一箇に一箇年料金八十錢

春びわりや



日本外國間郵便電信到着日時

地名	電信平均時間	郵便平均日數	地名	電信平均時間	郵便平均日數
朝鮮釜山	二時	六日	同 元山	—	九日
同 仁川	—	七日	呂宋マニラ	四時	二十日
清國天津	二時半	十一日	同 上海	二時	五日
英領香港	二時半	七日	布哇ホノルヽ	—	卅二日
印度孟買	十五時	三十日	同 新嘉坡	三時	十六日
同 カルカッタ	十六時	三十日	佛國巴里	十六時	廿八日
英國倫敦	十六時	廿八日	同マンチェスター	十六時	廿八日
同 リバープール	十六時	廿八日	米國桑港	十五時	十八日
同 紐育	十五時	廿日	同 シカゴ	十五時	十五日
加那太セントリオル	廿六時	十五日	同 トロント	—	十五日
同 ハンバーグ	十六時	廿五日	南米秘魯	—	四十日
露領浦塩斯徳	二時半	廿六日	濠洲メルボルン	五時	廿五日
亞弗利加ケープタウン	—	七十日	白耳義アントワープ	十六時	廿九日

江水三千里。家書十五行。行々無別語。只道早歸郷。 劉崧

事項	二十一年	二十二年	二十三年
郵便局	三、七一〇	三、六〇七	三、六三〇
同 函	二七、二四〇	二六、〇五三	二六、四〇四
同 線路	一七、九四〇	一七、六九〇	一八、三三二
郵便物數	一五八、二六五、〇〇〇	一八三、六〇〇、〇〇〇	二六、六四四、〇〇〇
外國郵發	六七八、〇〇〇	八〇六、〇〇〇	八六三、〇〇〇
郵物數谷	八七五、〇〇〇	一、一六二、〇〇〇	一、二四三、〇〇〇
電信局	二五五	二七六	三〇九
同取扱所	—	二四	三六
同 線路	二、四九一	二、六〇一	二、九一三
同 線路延長	七、一六三	七、六三〇	八、六五七
音信通數	二、八〇一、八四八	三、三四五、一二四	四、一七六、三一八
郵便電便收入	三、二七二、〇六七	三、八五九、二三二	四、六三七、九六三

いたづらにすぐる月日はおほけれど
花みてくらす春ぞすくなき　興風



兩レ江秋樹有無間。沙柳萧條未レ可レ攀。
彩翠滿船天一碧。夕陽影裏洒二金山一。

陳碧城

五十哩以内の切手を所持する者は途中の停車場に下車し再同切手を以て其後列車に乗繼ぐことを得す

五十哩以上の切手を所持する者は横濱、大船、大磯、國府津、御殿場、沼津、靜岡、濱松、豐橋、名古屋、岐阜、大垣、米原、草津、馬場、京都、大坂の各停車場に限り何れにても下車し再び乗繼ぐことを得べし

五十哩以上百哩未滿の切手通用期限は二日（進行當日を併算す以下皆同じ）

百哩以上二百哩未滿三日　二百哩以上三百哩未滿四日　三百哩以上五日

五十哩以上の切手所持者と雖も前記停車場の外途中の停車場に下車する時は其切手は効用を失ふものなれば之を掛員に納付すべし

くれて行く秋のかたみにおく物は
わがもとゆひのしもにぞありける

兼盛

横濱神戸間	上等十圓	同往復十八圓	中等六圓	同往復十一圓	下等二圓五十錢
同 長崎間	上等廿六圓	往復四十三圓	中等十六圓	往復廿六圓	下等六圓五十錢
同 上海間	上等四十五圓	往復六十八圓	中等廿八圓	往復四十四圓	下等十一圓
同 函館間	上等十二圓	下等四圓	同小笠原島間	上等十六圓	下等六圓
同四日市間	上等四圓中	往復八圓	中等三圓	往復五圓中	下等一圓中
神戸琉球間	上等二十八圓		中等十六圓	下等八圓	
同 天津間	上等六十一圓	往復百六圓	中等卅六圓		下等十七圓
同 芝罘間	上等五十一圓	往復八十八圓	中等三十圓		下等十四圓
同 仁川間	上等四十圓	往復六十八圓	中等二十四圓		下等十一圓
同 釜山間	上等廿八圓	往復四十七圓	中等十七圓		下等七圓中
同 浦潮間	上等五十四圓	往復九十二圓	中等卅二圓		下等十三圓
同 敦賀間	上等十八圓	下等六圓中	同新潟間	上等廿六圓	下等九圓中
同直江津間	上等廿四圓	下等九圓	同[illegible]都間	上等廿六圓	下等十三圓中
函館室蘭間	上等三圓七十五錢	下等一圓中	同青森間	上等二圓中	下等一圓
同 小樽間	上等八圓	下等三圓	同根室間	上等十圓	下等四圓
上海浦鹽間	上等六十圓	往復百八圓	中等卅四圓		下等十七圓
同 釜山間	上等四十圓	往復七十二圓	中等二十圓		下等十圓
上等食	一日 金二圓		中等食 金一圓		下等食 金五十錢



年別	社數	資本金	平均一社資本金
二十年	二、〇三八	六七、八五五、四六八円	三三・二九五円
二十一年	二、五九三	一一七、六六九、九八一	四五・三八〇
二十二年	四、〇六七	一八三、六一五、〇七七	四五・一四八

くたびれて宿かるころや藤の花　芭蕉

年次	店數	資本金	人口一人に對する資本金
二十一年	一、〇六一	九二、四四六、〇六三円	二・三三四円
二十二年	一、〇八六	九八、六六二、三五八	二・四六二
二十三年	一、一一〇	一〇三、二二八、四九三	二・五五二

内	店數	資本金		店數	資本金
日本銀行	一	一〇、〇〇〇、〇〇〇円	正金銀行	一	四、五〇〇、〇〇〇円
國立銀行	一三四	四八、六四四、六六二	私立銀行	二七二	三五、五七一、一七五
銀行類似會社	七〇二	一四、五一二、六一六			

欲レ挽二長條一已不レ堪。
都門無二復舊毿々一。
此時愁殺桓司馬。
暮雨秋風滿二漢南一。
高青邱

	總數	總資本金高	一社平均
養蠶	一七六	一、二八六、三四六	七、三〇九
牧畜	八五	一、四五五、八四二	一七、一二八
開墾	一一	二二二、四六四	二〇、二二四
漁業	八	一〇、八〇〇	一二、六〇〇
貸金	三一五	六、九三二、七八一	二二、〇〇九
保險	八	二、五八〇、〇〇〇	三二二、五〇〇
製絲	七〇四	四、八六四、八九九	六、九一〇
織物	二四六	四、九六七、一三八	二〇、一九二
紡績	四一	一二、六一五、九二〇	三〇七、七〇五
製紙	四八	二、六三七、八三七	五四、九五五
活版新聞及び印刷	一〇三	一、三一一、八一一	一二、七三六
土木工事請負	四七	六、七一六、七五〇	一四二、九一〇
鑛業	一三〇	六、七八九、六〇七	五二、二二八
飲食物販賣	二三八	六、六七五、五〇六	二八、〇四八
諸品販賣	三六五	一一、九六五、九一六	三二、七八三
酒類釀造	一八	一、四九七、二二〇	八〇、九五七
諸品製造	七二一	二一、四六五、〇七二	二九、七七一
水運	一三六	一七、五五二、五四九	一二九、〇六三
陸運	一六三	五二、三〇六、七六〇	三二〇、九〇〇
其他	五〇四	一九、七〇九、八五九	三九、一〇七



輸出入物品類別

輸出	
蠶糸蠶綿類	三二、一七五、八九二円
製茶類	七、〇三三、〇五〇
金属	五、四〇九、七七三
銅鐵材料及製品類	二、五〇六、一一六
皮毛甲角類	二七九、七一八
烟草類	一〇七、二〇〇
雑貨	一四、〇二〇、九六三円
穀物飲食物及類	一〇、九二三、四六七
布帛材料衣類及	五、三七二、四一三
油及臘類	六三九、四八三
燐寸及紙類	二六九、九七九
（計）	七八、七三八、〇五四円

輸入	
布帛の材料及類	二四、〇二七、五三二円
砂糖類	七、八一一、三〇七
金属器具及び	五、一四〇、八九三
雑貨	二、二〇一、八九三
角牙及毛皮類	一、一一七、一〇一
衣服附属品及び	七五五、五一九
玻璃類	三七九、〇七五
穀物及種子類	六、一〇六、五三七円
器械器具及類	四、六六四、八八一
油及臘類	四、九七一、七八四
藥材及製藥類	二、二二五、七六七
染料及彩料類	一、二一八、二〇二
酒類	四三〇、一一一
烟草類	二七三、一四九
（計）	六二、八八〇、六七一

礦產物出來高（其一）

	廿二年	廿三年
官行		
金	六三、四一九匁	六七、七三一匁
銀	一、六四一、三五〇	一、八五七、三四六
銅	九、四八七、〇〇〇	三、五五一、〇〇〇
洗鑛	五一五、三七四、〇〇〇	五八三、六七一、〇〇〇
鉄鑛	二九五、六二九、〇〇〇	三七三、五七一、〇〇〇
石炭	一六三、二二五、〇七九、〇〇〇	一三一、二四六、二八一、〇〇〇
非金屬		
石炭	四〇九、六一二、五〇五、〇〇〇	四八〇、二九二、一〇九、〇〇〇
岩木	二、二六四、二四一、〇〇〇	二、三二九、五七、〇〇〇
硫黄	一六、九四一、三七五、〇〇〇	一四、八六〇、二〇八、〇〇〇
黑鉛	一、三七八、四三〇、〇〇〇	一、〇九〇、九四〇、〇〇〇
石油	三九、六〇五石	五五、八七一石
土瀝青	三一〇、六四〇、〇〇〇匁	三一二、九〇〇、〇〇〇匁
明礬	八、九二五、〇〇〇	一一、五六五、〇〇〇
水晶	一、一二九、〇〇〇	一、八一二、〇〇〇

礦產物出來高（其二）

	廿二年	廿三年
民行		
金	九六、六二五匁	一四一、一七七匁
銀	九、七二〇、二三六	九、八〇六、六六五
銅	三、五六九、八五九、〇〇〇	四、三二四、九一九、〇〇〇
鉛	一〇四、六六九、〇〇〇	一六〇、四五三、〇〇〇
錫	二一、八四九、〇〇〇	一四、〇八一、〇〇〇
洗鑛	二、九八二、一六二、〇〇〇	二、七三七、二三六、〇〇〇
錳鑛	六二三、四一四、〇〇〇	六四四、九一三、〇〇〇
鉄鑛	六四、五五九、〇〇〇	一、一六二、一七六、〇〇〇
鋼鑛	三三八、〇七九、〇〇〇	二八八、二四二、〇〇〇
安質母尼	八五五、五九一、〇〇〇	一九四、八四二、〇〇〇
滿俺	二一五、五三一、〇〇〇	二五〇、六七七、〇〇〇
緑礬	三〇九、五四六、〇〇〇	二四九、四八八、〇〇〇
丹礬	一、七二五、〇〇〇	一七、二五五、〇〇〇
白口	一、五五八、〇〇〇	二、五四〇、〇〇〇
砒	一、五三〇、〇〇〇	二、五二三、〇〇〇
雄黃	六、三五〇、〇〇〇	
水銀	九八	三二〇



種類	二十二年	二十三年	二十四年
出版書籍	一四、〇六六	一七、六五八	二〇、三一九
内 著述	六、三一三	七、四七六	七、九五六
内 編輯	七、〇〇二	九、五一八	一一、七四七
内 飜譯	二六九	二二三	二〇六
内 飜刻	四八二	四四一	四一〇
官報部數	六、一八三、五七〇	六、五八九、九七一	七、一九五、七四〇
新聞雑誌（種類）	六四八	七一六	七六六
新聞雑誌（部數）	一五一、八九四、二八五	一八八、二八九、七二八	一九九、一六八、三七一

	二十一年	二十二年	二十三年
神社	一九三、二九一	一九三、二四二	一九三、一五三
神官	一四、六六五	一四、七一七	一四、七〇〇
寺院	七二、一六四	七二、一五四	七一、八五九
住職	五一、九〇五	五二、六〇七	五二、五一一
管長教師及び生徒（神道）	七〇、六四六	七三、八九八	七七、二七二
管長教師及び生徒（佛道）	一〇四、〇五二	一〇四、七五九	一〇五、七九五

學校

年別	校數	教員	生徒
二十一年	二七、九二三	六九、〇三二	三、〇五〇、五三八
二十二年	二八、〇二四	七二、四九三	三、一五〇、六一四
二十三年	二七、八六八	七四、七九五	三、二一九、六六一

内

	官立 校數	官立 生徒	公立 校數	公立 生徒	私立 校數	私立 生徒
小學校	五	五七〇	二五、二七七	三、〇三八、〇三二	七三五	五七、七九八
尋常中學校	一	六六	四三	九、九一六	一一	一、六三八
高等中學校	七	四、三五六	ー	ー	ー	ー
帝國大學	一	一、三一二	ー	ー	ー	ー
尋常師範學校	ー	ー	四七	五、二九五	ー	ー
高等師範學校	二	一六二	ー	ー	ー	ー
專門學校	四	一、〇六一	二三	二、八〇四	三〇	八、九二五
高等女學校	一	一三二	七	一、四二六	二三	一、五六二
各種學校	一	七一	二八	一、五七九	一、六二二	八二、九五六

農產物產出高

種類	廿一年	廿二年	廿三年
硬米	三五、四〇一、〇五四石	二九、七六七、五五七石	三八、八四六、三八九石
糯米	三、〇三九、二五六	三、〇三〇、六〇〇	三、九一九、九二三
陸米	二〇五、一六五	二〇九、四〇九	二七一、四九七
大麥	七、〇八九、七六六	七、一九〇、四七九	五、四一七、三三三
裸麥	五、一二一、二〇三	四、八九八、六二九	二、八四〇、六二四
小麥	三、一〇七、二二四	三、二二七、七三一	二、四五五、〇〇八
西洋大麥	二	四四	ー
西洋小麥	六〇四	一四	ー
繭	一、一八四、四七〇	一、一八四、六八一	一、一七二、二七二
生糸	九四四、四〇〇貫	一、四〇二、二七三貫	一、一八八、一六七貫
眞綿	四四、一四一	五二、九九二	六二、五三五
蠶卵紙	二、三一五、三六〇枚	二、一九八、三〇〇枚	二、二九五、〇〇四枚
製糖	一〇、七五九、三七三貫	一三、四一三、六八五貫	二二、一一九、五二四貫
製茶	七、二五二、八三〇	六、九〇七、五六四	六、九四五、四一九

池塘鴛鴦



酒及醬油造石高

種類	二十年期	二十一年期	二十二年期
清酒	三、八一五、二九六石	三、六五四、三七五石	三、〇六八、一四一石
濁酒	四五、八一七	三四、六八二	二九、三九六
燒酎	五九、四八〇	五六、九四八	四三、四六七
酒精	二、八二八	一、八二一	一、〇五〇
白酒	一、九七四	二、〇六七	一、九二六
味醂	二八、〇八八	二九、三四六	二四、四七五
銘酒	五、三〇九	五、〇四五	四、一六〇
醬油	一、三〇四、三七一	一、二三三、五九四	一、一五七、九七三

輸出入金額

年次	輸出	輸入	輸出入物品原價 輸出	輸入
二十年	一一、〇三五、四八八	八、八七一、二六六	五二、四〇七、六八一	四四、三〇四、二五二
二十一年	七、八三三、四四四	八、七三二、四九二	六五、七〇五、五一〇	六五、四五五、二三四
二十二年	五、一八八、五二九	一四、一七三、二四六	七〇、〇六〇、七〇六	六六、一〇三、七六七
二十三年	一三、七七八、五三一	一、二〇〇、六〇七	五六、六〇三、五〇六	八一、七二八、五八一
二十四年	一、四五二、九六四	一三、八八八、五二六	七九、五二七、二七三	六二、九二七、二六九

國家は頽毀し藝術は衰頽す然れども天然の萬物は死せず

バイロン

日晩山花當馬落。天陰水鳥傍船飛。　劉滄

種類	西洋形船		蒸汽		風帆		日本形船	大船	小船	遊船
二十一年	一、四二〇艘	一四四、一九四噸	五二四艘	八一、〇六六噸	八九六艘	六三、一二八噸	六二二、〇一二艘	一九、三七三	六〇〇、九四六	一、六九三
二十二年	一、四〇七艘	一四一、一四四噸	五六四艘	八八、八一六噸	八四三艘	五二、三二八噸	六三七、〇三四艘	一九、一三五	六一六、一五二	一、七四七
二十三年	一、四五一艘	一四五、六九二噸	五六八艘	九三、八一二噸	八六五艘	五一、八八〇噸	六三八、二五九艘	二〇、五九四	六一五、九八七	一、六七八

櫻がり雨はふりきぬおなじくは
ぬるとも花の陰にかくれん　保胤



國民新聞・國民之友・家庭雜誌の讀者に對する特別大割引廣告

國民之友、國民新聞、家庭雜誌を並せ購讀し、來月より第四號合冊合中に(?)少ケ年若しくは一ヶ年前金を拂ひ込む讀者には左表の如き割引をなすべし、

	一ヶ月前金	半ヶ年前金	一ヶ年前金	一部定價	半ヶ年割引上一部の價	一ヶ年割引上一部價
國民之友	十八錢	一圓一錢（郵稅九錢）	一圓九十八錢（同十八錢）	六錢	五錢五毛	四錢六厘八毛
國民新聞	三十錢	一圓七十錢（郵稅七十八錢）	三圓四十錢（同一圓五十六錢）	三十錢（一ヶ月）	二十五錢五厘（一ヶ月）	二十四錢（一ヶ月）
家庭雜誌	五錢	三十錢（郵稅三錢）	五十錢（同六錢）	五錢	四錢五厘	三錢五厘四毛
合計	五十三錢	三圓一錢（郵稅九十錢）	五圓八十八錢（同一圓八十錢）	—	—	—
特別割引		二圓七十錢（郵稅九十錢）	五圓（同一圓八十錢）	—	—	—

半ヶ年前金は合計三圓一錢を二圓七十錢に減し、一ヶ年前金五圓八十八錢を五圓に減ずべし、其の結果は半ヶ年にては家庭雜誌を無代價にて讀むべく、一ヶ年にては家庭雜誌を無代價にて讀みたる上尚ほ三十八錢を餘すべしこれ豈に一大經濟法にあらずや、但し東京市外は郵稅半ヶ年九十錢一ヶ年一圓八十錢を要す

明治卅五年九月十四日 [illegible]
發行兼印刷人 [illegible]
發行所 東京市京橋區日吉町四番地 家庭雜誌社